

鹿兒島県史料

旧記雑録追録

二

例言

一本書は、東京大学史料編纂所蔵本「薩藩舊記雜録」を底本とし、そのうち追録卷二十二から卷四十五までを収めて、「鹿児島県史料 舊記雜録 追録 二」として継続刊行するものである。年代は元禄十年一月から正徳二年三月までの十五年間である。

一文書・記事を通じ、底本の順序に従い、通し番号を文首に付した。また卷末に文書・記事目録を掲げた。

一文書、または記事が数種の内容に分かれる場合には、小番号を付した。

一刊行に当って、文書の体裁を、おおよそ次のように統一した。

イ 文書の所在などを示す原註は、一字下げて首部に付した。

ロ 猶々書は、二字下げにし、その位置は底本どおりにした。

ハ 文書・記事には適宜読点「、」および並列点「・」を付した。

ニ 附(付記)、但(但し書)は改行した。

ホ 文書の年月日、差出、宛所の位置などは、底本の体裁にあわせて、ある程度の統一をした。

ヘ 書状は底本の体裁に従うが、包紙の封じ目は「」に統一し、包紙への註記は底本ならなかった。

ト 花押は(花押 M_x)と番号を付し、適宜人名を傍註するほか、卷末に花押集を掲げた。

一 漢字は原則として底本の用字に従い、改める場合はなるべく正字を使用するが、底本の文意体裁をそこなわないものは一部当用漢字新字体を使用した。

一異・略・俗体文字は、大部分を普通の字に改めたが、次のような字は特にこれを残した。

尔(爾) 早(畢) 吳(異) 玠(珍) 弥(彌)

一特殊文字としては、次の字だけを残した。

ノ(しめ) ㇿ(より) ㇿ(まいる) く(々々) ㇿ(候)

一変体仮名は、普通の平仮名に改めたが、ニ、ホ、ホ、面、はだけはそのまま残した。

一人名、地名および難解な語句などには、適宜傍註を付した。地名は旧薩藩領域外は国名のみ、また領域内は現在(昭和四十六年四月一日)の郡・市名で表わした。

但し国・市の字はこれを省略した。

一原註には括弧を付さず、新たに註を付す場合には()で囲んで原註と区別した。

一欠所部の原註 本マ、、欠、スリキレ等は、その部分を□で囲み、本マ、、欠、スリキレ等と傍註した。

一文意の通じない字、または箇所は□で囲み、(ママ)、(○○カ)と傍註を付した。

一挿入、付紙、貼紙、押札等は、右肩に(挿入)、(付紙)等と傍註し、他とまぎらわしい場合には「」で囲んだ。

一朱書は(朱)と傍註し、その箇所を「」で囲んだ。

一行間の書き込みは、底本の体裁にあわせたが、書き込みが多くてまぎらわしい場合は、その位置を示し、関連箇所の文末にまとめた。

一闕字、平出等は、原則として底本の体裁によった。

一漢文は、返り点・送り仮名等不統一または不正確に用いられているが、特に底本の通りとした。

一 当時一般に使用された用字のうち、次のようなものはそのまま用いた。

百性・(百姓) 小性・(小姓) 陳・(陣) 蜜・(密) 養性・(養生) 次・飛脚(継) 太・儀(大儀) 日用・(日傭)
日雇 烈・(列) 咲止・(笑止) 騒働・(騒動) 會尺・(会釈) 諏方・(諏訪) 魔・(鹿兒) 船・(船) 相授・
(相模) 訴詔・(訴訟) 飛彈・(飛驒)

一 文字および文書を、原文書で補正する場合には、(〇〇)によって補う)と補註した。

一 訂正された文字には、左傍に「、」を付し、訂正文字を右側に付した。

舊記雜錄

追録卷二

目次

題字

鹿兒島県知事
金丸三郎

例言……………一
目次……………四

卷二二	元禄一〇年	一月	八月	(綱貴公・吉貴公)	一
卷二三	元禄一〇年	九月	同一年七月	(綱貴公・吉貴公)	四二
卷二四	元禄一一年	八月	同二年五月	(綱貴公・吉貴公)	七四
卷二五	元禄一二年	六月	閏九月	(綱貴公・吉貴公)	一二三
卷二六	元禄一二年	閏九月	同一年六月	(綱貴公・吉貴公)	一六九
卷二七	元禄一三年	七月	一一二月	(綱貴公・吉貴公)	二二〇
卷二八	元禄一四年	一月	三月	(綱貴公・吉貴公)	二五七
卷二九	元禄一四年	四月	一一二月	(綱貴公・吉貴公)	二九四
卷三〇	元禄一五年	一月	八月	(綱貴公・吉貴公)	三三九
卷三一	元禄一五年	九月	同一年二月	(綱貴公・吉貴公)	三八〇
卷三二	元禄一六年	三月	一一二月	(綱貴公・吉貴公)	四一九
卷三三	元禄一七年	一月	八月	(綱貴公・吉貴公)	四五五
卷三四	寶永一年	九月	一一二月	(綱貴公・吉貴公)	四九七
卷三五	寶永二年	一月	五月	(吉貴公)	五四八

卷三六	寶永二年六月	——	一月	(吉貴公)	五八一
卷三七	寶永二年二月	——	同	(吉貴公)	六三一
卷三八	寶永三年八月	——	同	(吉貴公・繼豊公)	六七八
卷三九	寶永四年六月	——	一〇月	(吉貴公・繼豊公)	七一九
卷四〇	寶永四年一月	——	同	(吉貴公・繼豊公)	七五四
卷四一	寶永五年九月	——	同	(吉貴公・繼豊公)	七九三
卷四二	寶永六年四月	——	九月	(吉貴公・繼豊公)	八三三
卷四三	寶永六年一月	——	同	(吉貴公・繼豊公)	八七四
卷四四	寶永七年閏八月	——	同	(吉貴公・繼豊公)	九一四
卷四五	正徳一年四月	——	同	(吉貴公)	九五四
花押集	九九九

文書・記事目録.....一〇〇三

(表紙)

網貴公	自正月
元禄十年	至八月
吉貴公	
追舊記雜録	卷二十二

(原寸縦三・三センチ、横六・七センチ)

1 網貴公御譜中 此御書吉貴公御譜中ニ無之

正文在文庫

改年之御慶賀重疊目出度申上外、弥御勇健可被成御超歳
 珍重之御儀奉存外、私儀如例年今日登 城仕、首尾好御
 禮申上、御盃頂戴御時服拜領難有仕合奉存外、年首之御
 祝儀爲可申上如斯御座外、隨目録之通進上之仕外、猶
 奉期永日候、誠惶誠恐敬白、

朱力半
元禄十年 正月二日

進上 中將様 (島津綱貴)

(島忠)
松平修理大夫
吉貴御判
(花押Na)

2 網貴公御譜中

正文在文庫

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被
 獻之外、首尾好遂披露候、恐、謹言、

朱力半
元禄十年 正月十一日

土屋相摸守
(政應) 政判

戸田山城守 忠昌判

阿部豊後守 正武判

大久保加賀守 忠朝判

松平薩摩守殿

3 忠興一流系圖

淡路守惟久之子

女子

(實長)
立花出雲守種麿室

元禄十年丁丑正月十三日、於武州江戸三田ニ誕生、母
 薩摩中將綱貴主養女、實島津圖書久洪女也、

4 吉貴公御譜中

野々山

元禄十丑二月六日

吉貴公
御判アリ

5 北郷作左衛門久嘉譜中

元禄十年丁丑赴 綱貴公江都、于時久嘉爲番頭、二月六日先 公發鷹府、四月五日到江府、北郷吉兵衛忠養相從焉、

6 圖書久洪譜中久通ノ孫

元禄十年二月十五日補家老職、

7 綱貴公御譜中

正文在文庫

爲改年之嘉儀芳札令披見外、其方愈無吳超歲之由玆重存外、我等事々無恙令越年外、被入念示給、殊目錄之通被相贈之、欣悦之至外、猶期後喜之時外、恐、謹言、

朱カキ
元禄十年 二月三日

薩摩守
綱貴御判

(島津吉貴)
松平修理大夫殿
回章

8 全上

正文在文庫

なをくさしたる事なく外へとも、御よろこひ申入外ハんため文にて申入外、なをめてたくかしく、使まいり外よしうけ給りまゝ一筆申入外、いまたことのほかひえまいり外か、いよく御息災ニ御さ外や、うけ給度そんし外、さやうニ外へはとら安殿ふゆとしけんふくにて、名も又四郎殿と申りよし、成人にてめてたぎ、われくはしめ子たちへめいよくに祝義たまハリ、めてたくいく久しくはんしやうの事うけ給りハんといわぬ入満足いたし外、こゝ元にても兩屋敷一もん中何もかはる事なく外まゝ、御心やすく思召外へく外、かしく、

朱カキ
元禄十年 二月十五日

(光久)
陽和院

(島津綱貴)
松平さつまの守殿

誰にても申給へ

正文在文庫

御札令披見^レ、如承青陽之慶賀珍重^レ、先以

(續志)

公方樣益御機嫌能被成御座、年始御規式首尾好可相濟と

恐悅旨尤^レ、隨^レ以使者御樽着被獻^レ之^レ、各申談遂披露

外、恐、謹言、

朱力⁺

元祿十年 二月廿二日

土屋相摸守

政直判

松平薩摩守殿

正文在文庫

御札令披見^レ、如承春陽之慶賀珍重^レ、先以

公方樣益御機嫌能被成御座、年始之御規式首尾好可相濟

と恐悅旨尤^レ、紙面之趣得其意候、恐、謹言、

朱力⁺

元祿十年 二月廿三日

松平右京大夫

輝貞判

柳澤出羽守

保明判

松平薩摩守殿

元祿十年丁丑二月二十五日

(東山天皇)

今上皇帝納^レ有栖川幸仁親王^ノ姫^ヲ於^レ宮中^ニ立爲^レ后、綱

(幸子女王)

貴在^レ國而聞^レ之、遣^レ町田源左衛門久孝京師^ニ奉^レ祝^ニ

大禮^ニ、乃久孝參^レ内而獻^ニ上御太刀[・]馬代黃金三兩[、]

且以^レ白銀二十枚^ノ獻^ニ上^ニ女御^一、

御入内付獻上物之覺

松平薩摩守

禁裏^ニ

御太刀[・]御馬代黃金三枚[、]

女御^ニ

白銀二十枚[、]

以上

綱貴公御譜中

同年閏二月四日、寺社奉行井上大和守正岑[・]永井伊賀守

直敬[・]松平志摩守重頼^(榮)、大目附仙石伯耆守久尚、町奉行

能勢出雲守^(願 應)、河口攝津守宗恒、勘定頭井戸對馬守^(良 也)・荻原

近江守重秀各列^ニ座評定所^一、而招^ニ綱貴之留守居赤松甚

右衛門則茂^一、乃久尚傳曰、去^レ往^ニ正保四年獻^ニ列國之地

圖、雖レ然今改レ舊新畫三薩隅二州及琉球國之地圖、且日向一國之地圖者相ニ議伊東大和守祐實一、校ニ正村里郡縣國境ニ而可レ調ニ進之、是 台命也、乃則茂拜謝而退、同月二十七日、綱貴爲ニ參觀ニ發レ國、在ニ途中一聞レ之、思夫吾高祖豐後守忠久者 右幕府頼朝公之庶孽也、是故以三忠久ニ補ニ于薩隅日三國之守護一、素島津者三州之總名也、因以三島津ニ樹ニ于家號一、文治二年之秋自下忠久初出三鎌倉ニ下于薩州上既五百有餘年、世稱三三州太守一、自レ爾以來國中_ニ之豪家誇_ニ己富 動結_レ讎_ニ鋒者多、自將而屠_ニ殺之、降者降_レ之以示_ニ勇武一、就_レ中修理大夫義久三位法印龍伯知_レ世之時三州大擾、自將_ニ將師_ニ而攻_ニ擊之、撫_レ民容_レ衆國內平均、弟兵庫頭義弘_{初忠平}又_{義珍}受_レ讓_ニ躰責_ニ討豐肥筑前後六國一、有名士皆降_ニ于旗下_ニ、其後豐臣秀吉公握_ニ閩國之權_ニ進_ニ大旆_於西一、乃割_ニ日向國_餓應_{高鶴}命_{高鶴}肥_{高鶴}・財部_{高鶴}・縣_{高鶴}氏_{高鶴}領_{高鶴}之_{高鶴}・佐土原_{高鶴}、而賜_ニ于伊東_{高鶴}・秋月_{高鶴}・高橋_{高鶴}・島津中務大輔豐久_{豐久之父家久者義久・義弘之弟也、先_レ是使家久守_ニ在土原城一、秀吉公西征之時羽柴美濃守秀長、尤_ニ爲_ニ殺家久于野尻城一、故以父之遺跡賜_ニ于豐久一}、以三薩隅二州及日州諸縣郡一賜_ニ于當家一、從_レ是雖_レ不_レ能_ニ全領_ニ日州太守之號_如元、依_レ之正保年中所_レ獻之地圖命_ニ祖父光久一人一、是故日州四家_{伊東・有馬・島津}試畫_ニ所_レ領之地圖_一來_ニ薩府_一、乃取_レ之訂_ニ於國郡是四氏也

日程之齟齬_ニ清_ニ書三州及琉球國之地圖_一、書_ニ光久之姓名_ニ而奉_レ獻_ニ于幕府_一、是因_レ下忠久受_ニ封_於鎌倉_一任_中三州之守護_也、今與_ニ于伊東氏_一書_ニ連名_一獻_レ之、乖_ニ高祖以來之模範_一且失_ニ正保之先蹤_一、以難_ニ如_レ之何_一因思_レ之在_ニ于茲_一矣、豈不_ニ強而訴_ニ于幕府_一焉也、於_レ是以_ニ島津主計忠雄_{後發}帶_刀先爲_ニ總監使_一、令_下大野隼人久明・川上八郎左衛門久清・村田平右衛門經寧_{三士共}副_レ之、藤野休左衛門久賢・本城源四郎忠辰・武五郎右衛門重矩・永山休兵衛義比・大馬場正左衛門景但・鹿島郷兵衛國治等亦預_ニ其事_一、訂_中於薩隅日及琉球國之地圖上矣、

14 全御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、正月八日東叡山 御堂

御參詣之儀被承之、恐悅旨尤外、紙面之趣各申談及言上

外、恐、謹言、

宋力キ

元禄十年 閏二月十六日

戸田山城守

忠昌判

松平薩摩守殿

15 正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、正月八日東叡山 御堂 御

參詣之儀被承之、恐悅旨尤外、紙面之趣得其意外、恐々

謹言、

朱力平
元禄十年 閏二月十六日

松平右京大夫 輝貞判

柳澤出羽守 保明判

松平薩摩守殿

16 全御譜中

(の1) (島津綱貞)
(花押) No2

高百斛 薩州鹿兒嶋郡上伊敷村之内

隅州始羅郡平松村之内

中之門 福元門

右同村之内

宮脇屋敷

右爲

(島津綱久)
泰清院殿御善提料延寶四年辰十二月被寄附訖、御靈前方

諸用弥以解怠有間敷者也、仍狀如件、

元禄十年閏二月廿二日

(福見守)
惠燈院

(の2) 高三拾石

薩州鹿兒嶋郡上伊敷村之内

中之門

同四拾石三斗餘

隅州始羅郡平松村之内

福元門

同貳拾九石六斗餘

右村之内

宮脇屋敷

合高百石

右爲

泰清院様御善提料延寶四年十二月被寄附訖、因茲今度

中將綱貴公被成御判之間、御佛餉・勤行等猶以無怠慢可有執行者也、仍狀如件、

元祿十年閏二月廿二日

元祿十年閏二月廿二日

(平田)
新左衛門宗正判

(肝付)
主殿久兼判

(種子島)
藏人久時判

(善入)
安房久亮判

(島津)
助之丞忠守判

(島津)
勘解由久當判

(島津)
圖書久洪判

平田新左衛門宗正判

肝付主殿久兼判

種子嶋藏人久時判

喜入安房久亮判

嶋津勘解由久當判

嶋津助之丞忠守判

嶋津圖書久洪判

惠燈院

17 網貴公御譜中

正文在文庫

福昌寺

(の3) 隅州始羅郡帖佐郷之内

高百五拾石

住吉村

右爲

寬陽院様御菩提料被寄附之由、去年十一月九日

中將綱貴公所被成御判也、

慈眼院様御影堂附三百石同前致収納、御靈前之諸用以所

務可相渡之間、御佛餉・勤行等無怠慢可被執行候、仍狀

如件、

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃山王御社參之儀被承之、

恐悦旨尤外、紙面之通各申談及言上外、恐々謹言、

元祿十年 閏二月廿三日

戸田山城守

忠昌判

松平薩摩守殿

18 正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃山王御社參之儀被承之、
恐悦之旨尤^レ、紙面之通得其意^レ、恐、謹言、

朱力キ
元禄十年 閏二月廿三日

松平右京大夫
輝貞判
柳澤出羽守
保明判

松平薩摩守殿

19 正文在文庫

御札令披見^レ、

公方様益御機嫌能被成御座、正月廿四日増上寺

御佛殿 御參詣儀被承之、恐悦旨尤^レ、紙面之趣各申談

及 上聞候、恐、謹言、

朱力キ
元禄十年 閏二月廿七日

戸田山城守
忠昌判

松平薩摩守殿

20 正文在文庫

御札令披見^レ、

公方様益御機嫌能被成御座、正月廿四日増上寺 御佛殿

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤^レ、紙面之趣得其意^レ、恐

、謹言、

朱力キ
元禄十年 閏二月廿七日

松平右京大夫
輝貞判
柳澤出羽守
保明判

松平薩摩守殿

21 網貴公御譜中

同年閏二月二十七日、網貴爲三參觀^ニ發^レ國、一族佐多豐

前久達、家老喜入安房久亮、番頭北郷宗次郎忠嘉、用人

村田伊左衛門經智・大山權左衛門廣安從^レ駕、三月二日

開^ニ船於京泊津^一、同二十一日著^ニ船于大坂^一也、

22 網貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見^レ、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃護持院被爲

成之儀被承、恐悦旨尤^レ、紙面之趣各申談及 上聞候、

恐、謹言、

朱力キ
元禄十年 閏二月廿九日

戸田山城守
忠昌判

松平薩摩守殿

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃護持院被爲 成外儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之通得其意外、恐々謹言、

朱力キ
元禄十年 閏二月廿九日

松平右京大夫 輝貞判

柳澤 出羽守 保明判

松平薩摩守殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

朔朔日例月之御禮無之之間、不及登 城外、以上、

朱力キ
元禄十年 閏二月廿九日

土屋 相摸守 (政直)

戸田 山城守 (忠昌)

阿部 豊後守 (正武)

大久保 加賀守 (忠朝)

松平修理大夫殿

綱貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌好被成御座、先頃柳澤出羽守亭被爲 成之儀被承、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

朱力キ
元禄十年 三月二日

阿部豊後守 正武判

松平薩摩守殿

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃出羽守亭被爲 成外儀被承、恐悦旨尤候、紙面之通得其意外、恐々謹言、

朱力キ
元禄十年 三月二日

松平右京大夫 輝貞判

柳澤 出羽守 保明判

松平薩摩守殿

綱貴公御譜中

寫正文在文庫

在御札
此御書付者相渡外節、日州御持合之御家來中へ赤松甚右衛門より相渡爲申由ニ之間、又々被遣ニハ及間敷と於江

戸申談外、

覺寫

今度國繪圖就被 仰付外、從在所役人等被差下、被致支度及有之由承及外、未遲儀外、繪圖仕立様、追而委細書付可差出外間、夫迄者可有延引外、尤一國組合ニ被差出面、考此旨可被申通外、爲心得申觸候、以上、

朱力半
元禄十年 三月

寫正文在文庫

國繪圖被仕上外衆に可渡書付覺寫

〔朱〕
〔存押札〕

此覺書書拔ニ不相見外、寅三月廿四日之事、

誰御代官所

〔朱〕
〔存押札〕

此御書付者被相觸ニ不及之由被仰渡外、

誰誰 知行分郷

〔朱〕
「爰ニ押札左之朱書之通」

一高何千何百石何升

〔朱〕
「是者一村之内御代官所又者相給有之、或寺社領有之由申來外方より取可申書付之好」

何國何郡 何村之内

外 何拾石何合 何拾石何升 何寺領 何社領

誰誰 知行分郷

〔朱〕
「爰ニ押札左之朱書之通」

一高何百何拾石何合

〔朱〕
一分郷ニ而越石有之由申來外方より取可申書付之好」

一高何拾石何斗

〔朱〕
「爰ニ押札左之朱書之通」

一高何百斛何合

〔朱〕
「扨領已後新田出來、其新田を二男・三男或弟抔分知被下、扨領高ニ成外由申來外方取可申書付之好」

扨領高ニ成外由申來外方取可申書付之好」

一高何拾何斛

是ハ拜領以後之新田、何年以前何之年次男誰、或三

男誰、或弟誰に分知被仰付外、

〔朱〕
「爰ニ押札左之朱書之通」

一高何百何拾斛

〔朱〕
「扨領已後新田出來、村居有之由申來外方より取可申書付之好」

好」

一高何拾斛何升

是ハ拜領以後之新田村居有之分、尤新村開發之年號

并高付御書付可被成候、高盛無之者反別御書付可被成外、

〔爰ニ押札左之朱書之通〕

一高何拾斛何合

何國何郡何村之枝郷

何村

〔拜領已後枝村出来村居有之由得共、高ハ分り不申外由申来外方より取可申書付之好〕

何國何郡

同斷

何村

何村

是ハ拜領以後之枝郷、村居者有之由得共、高分り不申外、

右村方品々之儀書面之内何れニ有之段、其領主より申來外ハ、其上ニ有此下書之内、其品々所計相渡、如斯被書出外様可被相達外、勿論此下書之趣計ニ有、先方不被心得儀表外ハ、何分ニ表其品者可被聞届外、依之此下書者領主ノ江先達外被相觸外儀ニ有ハ無之外、面々手前ニ可被差置候事、

右之外

一山方之道、牛馬難通道、或牛馬之通路ハ罷成外得共難

所道等之事、

一大小川之名・同橋并川幅・淺深之事、

一川岸津湊より江戸并隣國江之海上道法、同船着善惡之事、

一池・沼之深サ之事、

一船渡・歩行渡場所等之事、

右之品々、此度不及相改外、古繪圖ニ有來通可被記置外、

〔元禄十年〕月日

28

〔寫正文在文庫〕
〔在押札〕

此御書付書拔ニハ不相見外、

寫

何國郷帳

何國何郡

一高何百石

何村

一高何百石

何村

一高何百石

何村

一高何百石

何村

一高何百石

何村

小以高何萬何千石

何郡何拾ケ村

何村之内

何郡

一 高何百石

何村

一 高何百石

何村

一 高何百石

何村

一 無高

何新田

小以高何萬何千石

何郡何拾ヶ村

高都合何拾萬斛

年號月

誰

〔元禄十年〕三月

〔朱〕

〔寫正文在文庫〕

國繪圖被仕上り衆より觸書之案文

〔在押札〕

此覺書書拔ニ不見外、

〔在押札〕

此ヶ條横切之御書付

一 此度國繪圖仕上り様ニ被 仰付外、依之各御領分正

保二酉年以後、新村・新川・新池沼又老川遠・大道筋

附替、或古來之大道筋通路留り外所抔變地有之

ハ、其譯御書付來ル何月迄之内御差出可被成り、其

上ニ繪圖ニも書付ニ入申外ハ、認様御指圖

可申外、尤正保二年以來變地無之者其旨可被仰聞外、

此正保二年より元禄十年迄五十二年目ニ當レリ
元禄十年ヨリ明治二十五年迄百九十六年ニナレリ

一 正保二年以後國境・郡堺論所有之外哉被相尋、御裁許

之趣御書付御差出可被成り、未御裁許不相濟所及外ハ

、是亦御書付可被遣候、

一 一村高一村切御書付御差出可被成り、新村出來外ハ、其

譯可被仰聞外、其上書付之調様御差圖可申外、尤村高

之儀御拜領高計御書付可被成り、新田出高・村居無之

田畑并小物成等、又ハ相給之衆知行高老不及御書付外、

併新田及人家出來之所、或枝郷又ハ村居無之新田たり

とも、正保二年以後分知被仰付、新田共ニ拜領高ニむ

す外所、或越石等有之者、先其品可被仰聞外、書付

認様追の御差圖可申外、

一 枝村老親村を御書添并親村之高内ニあり哉、高外ニ

外哉其譯御書記、親村より枝村に之方角・間敷及御書

付可被遣外、

一 御朱印地之寺社領、村付未差出外方及外ハ、村付ニ

一村切之高を書付指出外様ニ可被仰達外、

一知行所五十年以來拜領、或所替有之御方、其村五十年已來之新田ニ外ハ、可被仰聞外、以上、

朱力^キ
元祿十年 月日

綱貴公御譜中

正文在文庫

如御札陽春之御慶不可有休期外、其許御無爲珍重外、我等無恙越年之事外、入御念外段欣然之至存外、恐々謹言、

朱力^キ
元祿十年 三月七日

尾張中納言
綱誠判

(烏津綱也)
薩摩中將殿

御報

正文在文庫

一筆致啓上外、各様弥御堅固可被成御勤珍重奉存外、然者此度諸國之繪圖被仰付外、依之日向壹國之繪圖 薩摩守様御同前出雲守儀表相本通差出外様被 仰出外間、各様申談外様、從出雲守申越外、諸事無御遠慮被仰聞可被下外、隨而繪圖本通之御役人可被仰付奉存外、此方儀も役人申付置外、萬端御内談仕相調可申外間、御心安被仰談外様被仰付可被下外、將又右之御役人急度江戸江被差

案文在文庫

越儀御座外哉承度奉存外、御報被仰知可被下外、旁爲可申述以飛札如斯御座外、恐惶謹言、

朱力^キ
元祿十年 三月七日

伊東權左衛門
祐^シ判

長倉善左衛門
祐^シ判

川崎大膳
祐身判

喜入安房様
(久也)

種子嶋藏人様
(久也)

人、御中

御飛札令拜見外、各様御堅固御勤之由珍重存外、然者今度諸國之繪圖被 仰付外、日向國繪圖相本通被差出外様被仰出外由、依之出雲守様御意外付の示給趣得其意存外、繪圖被仰付外儀此方へ者未到來無御座外、薩摩守事爲參勤先月致發足外間、於途中右之到來承知仕、何分ニ表可申越と存外、早々被仰越之趣被入御念儀外、恐惶、猶申外、喜入安房事者薩摩守致供外付る、不能書載外、以上、

朱力^キ
元祿十年 三月九日

(種了處)
久時

34

綱貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃松平右京大夫亭被爲

成外儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之通各申談及 上聞外、

恐、謹言、

朱力キ

元禄十年 三月十四日

阿部豊後守

正武判

松平薩摩守殿

35

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃右京大夫亭被爲 成外

儀被承、恐悦旨尤外、紙面之趣得其意外、恐、謹言、

朱力キ

元禄十年 三月十四日

松平右京大夫

輝貞判

柳澤出羽守

保明判

36

吉貴公御譜中

正文在文庫

明十五日例月之御禮無之外間、不及登 城外、以上、

朱力キ

元禄十年 三月十四日

土屋相摸守

(政直)

戸田山城守

(忠昌)

阿部豊後守

(正武)

大久保加賀守

松平修理大夫殿

37

綱貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、近年之内日光山可被遊 御

參詣之旨被 仰出之段被承之、恐悦之由尤候、紙面之通

各申談及言上外、恐、謹言、

朱力キ

元禄十年 三月廿二日

阿部豊後守

正武判

松平薩摩守殿

松平薩摩守殿

御札令披見外、

公方様益御機嫌好被成御座、近年内日光山可被遊 御參
詣由被 仰出、恐悦旨尤外、紙面之趣得其意外、恐、謹
言、

朱力キ
元禄十年 三月廿二日

松平右京大夫
輝貞判
柳澤出羽守
保明判

松平薩摩守殿

正文在文庫

御用之儀外間、明廿五日四時可有登 城外、以上、

朱力キ
元禄十年 三月廿四日

土屋相摸守
戸田山城守
阿部豊後守
大久保加賀守

松平修理大夫殿

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃日光御門跡被爲 成外
儀被承、恐悦之旨尤候、紙面之趣各申談及言上外、恐、
謹言、

朱力キ
元禄十年 四月二日

土屋相摸守
政直判
松平薩摩守殿

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃日光御門跡被爲 成外
儀被承之、恐悦旨尤候、紙面之趣得其意外、恐、謹言、

朱力キ
元禄十年 四月二日

松平右京大夫
輝貞判
柳澤出羽守
保明判

松平薩摩守殿

一筆令啓達外、各様御堅固可爲御勤と珍重存外、然者今
度諸國之繪圖被仰付外、日向國繪圖之儀被仰出外趣付外、

先頃若早、示給趣入御念儀外、此方江及頃日薩摩守自途

中到來御座外、致參府委細承合可申越之由外、夫迄若御

付届延引罷成外付、先御禮如此御座外、恐惶、

朱力キ

元録十年

四月二日

(種子島)

久時

(島津)

久當

(島津忠守力)

久守

(島津)

久洪

川崎 大膳様

長倉善左衛門様

伊東權左衛門様

43

綱貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、閏二月十四日増上寺被爲

成、同十八日淺草觀音堂 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤

外、兩通紙面之趣各申談及 上聽候、恐、謹言、

土屋相摸守

四月三日

政直判

松平薩摩守殿

44 全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、閏二月十四日増上寺被爲

成、同十八日淺草觀音堂 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤

外、兩通紙面之趣得其意外、恐、謹言、

朱力キ

元録十年

四月三日

松平右京大夫

輝貞判

柳澤出羽守

保明判

松平薩摩守殿

45

綱貴公御譜中

案文在文庫

御返答之覺

一閏二月四日御評定所江諸留守居被召出外、此方よりハ

赤松甚右衛門罷出外處、寺社御奉行・大御目付・町御

奉行・御勘定頭御列座ニ有、先年被差出置外國繪圖委

相改可被差出旨被仰渡外儀、委細之御覺書、甚右衛門

書出、於御中途被備 御覽、喜入安房殿より被差下見

届申外、右ニ付御意之趣ハ安房殿より可被相達と存外、

一日向國之繪圖、伊東出雲守様御申合相調可被差出由付

ゐハ、別紙ニ段々申越下、

一先年被差出置下繪圖、御借用下書寫可被遣由、此方之儀ハ繪圖悉燒失下間、弥以御申請早々書寫被差下度下、且又繪圖ニ相添被差出下鄉村帳も、弥以御申請下書寫被遣度下、

一高辻帳之寫并村々ニ何郷之内何院之内と相記下譯頭書帳寫、其元江有之下、殊ニ二通り可有之由下間、一通り可被差下下、

一繪圖改様之儀、脇々承合相知下分ハ追々可被仰越下、

以上

朱力キ
元禄十年
四月四日

種子嶋藏人(久時)

嶋津助之丞(忠守)

嶋津勘解由(久當)

嶋津圖書(久洪)

禰寢丹波殿(翁延)

全御譜中

正文在文庫

御札令披見下、今度御入 内首尾好相濟下段被承之、目出度被存之由尤下、依之被差越使者下紙面之趣、各申談

及 上聞下、恐々謹言、

朱力キ
元禄十年
四月四日
土屋相摸守
政直判
松平薩摩守殿
正文在文庫

御札令披見下、
公方様益御機嫌能被成御座、先頃小石川御殿被爲 成下儀被承之、恐悦旨尤候、紙面之趣各申談及言上下、恐々謹言、

朱力キ
元禄十年
四月四日
土屋相摸守
政直判

松平薩摩守殿

正文在文庫

御札令披見下、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃小石川御殿被爲 成下儀被承之、恐悦旨尤下、將又今度御入 内首尾好相濟目出度被存之由、兩通紙面之趣得其意下、恐々謹言、

朱力キ
元禄十年
四月四日
松平右京大夫
輝貞判

柳澤出羽守
保明判

松平薩摩守殿

49 正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃金地院被爲 成外儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及言上外、恐、謹言、

朱力キ
元録十年 四月五日

土屋相摸守
政直判

松平薩摩守殿

50 正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃金地院被爲 成外儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣得其意外、恐、謹言、

四月五日

松平右京大夫
輝貞判
柳澤出羽守
保明判

松平薩摩守殿

51 正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、先比本庄因幡守亭被爲 成外儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之通各申談及言上外、恐、謹言、

朱力キ
元録十年 四月七日
土屋相摸守
政直判

松平薩摩守殿

52 正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃本庄因幡守亭被爲 成外儀被承、恐悦旨尤外、紙面之通得其意外、恐、謹言、

朱力キ
元録十年 四月七日

松平右京大夫
輝貞判
柳澤出羽守
保明判

松平薩摩守殿

53 正文在文庫

猶、此方繪圖本通者之義、從出雲守方申越外付、三日以前當地差立申外、御報乍申入御事御座外、以上、

御飛札致拜見候、各様弥御堅固被成御勤仕之旨玆重奉存

外、然者此度繪圖之事付、先頃以飛札申入外、然處頃日
薩摩守様從途中被仰越外者、御參府被成委細被聞召合可
被仰越由ニ付、御付届被仰越爲入御念御儀奉存外、相替
義及御座外者被仰知可被下外、其節互可得貴意外、恐惶
謹言、

朱力年
元禄十年
四月七日

伊東權左衛門
祐□判

長倉善左衛門
祐□判

川崎大膳
祐身判

鳴津圖書様

鳴津助之丞様

鳴津勘解由様

種子嶋藏人様

御報

54 正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃柳澤兵部亭被爲 成外

儀被承、恐悦旨尤候、紙面之通各申談及言上外、恐々謹

言、

朱力年
元禄十年
四月九日
土屋相摸守
政直判

松平薩摩守殿

55 正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃柳澤兵部亭被爲 成外

儀被承、恐悦旨尤候、紙面之通得其意外、恐々謹言、

朱力年
元禄十年
四月九日

松平右京大夫
輝貞判

柳澤出羽守
保明判

松平薩摩守殿

56 綱貴公御譜中

先レ是三月二十一日著ニ船大坂一、同二十四日發ニ大坂一、

駕ニ河舟一、日者依霖雨河水大漲、翌二十五日漸至ニ伏見一、

同二十七日發ニ伏見一、四月九日參府、同十日以ニ上使

阿部豊後守正武一勞レ之、

57 綱貴公御譜中

薩摩守伯父

一 高九千五百石
佐多豐前(久連)

右 豐前事酉年供ニ召列 御目見被 仰付外者ニ御座

外、

薩摩守家老

一 高五千石餘
喜入安房(久亮)

右 安房事亥年供ニ召列 御目見被 仰付外者ニ御座

外、

右 兩人此節薩摩守參勤之御禮申上外刻 御目見被 仰

付被下度奉願外、已上、

一 御太刀・銀馬代

一 御時服六

右 孝佐多豐前酉年 御目見仕外節獻上之仕外、

一 御太刀・銀馬代

一 御時服三

右 孝喜入安房、亥年 御目見仕外節獻上之仕外、

正文在文庫

明十五日四時登 城參勤之御禮可被申上外、以上、

土屋相摸守(政直)

元禄十年 四月十四日

戸田山城守(忠昌)

阿部豐後守(正武)

大久保加賀守(忠朝)

松平薩摩守殿

佐多豐前(久連)

喜入安房(久亮)

右 兩人 御目見被仰付外間、明十五日四時 御城江可被

差出外、以上、

朱力年

元禄十年 四月十四日

60 家來佐多豐前・喜入安房事、明十五日四時 御城江差上

可申之旨被仰下畏奉得其意外、恐惶謹言、

朱力年

元禄十年 四月十四日

大久保加賀守様

阿部豐後守様

戸田山城守様

土屋相摸守様

正文在文庫

明十五日例月之御禮無之由間、不及登城、以上、

朱力キ
元祿十年 四月十四日

土屋相摸守

戸田山城守

阿部豊後守

大久保加賀守

松平修理大夫殿

62 吉貴公御譜中

吉貴師^三於柴崎正勝^一甲府中納言、綱豊卿臣也、學^三神當流之馬術^一、有^レ

年^三于茲^二也、竟成^三其功^一而識^二得馳驅曲當之蘊奧^一、因

正勝書以達^三于吉貴^一、詳見^三于左^一、

63 正文在文庫

神當流馬術之趣極而御執心因不淺而、音捨之卷・管天之

卷・外之卷・岩波之卷・馬原記等之五軸並一枚馬書先師

之修鍊、且又愚意之工夫、教輪信誠之兩卷盡令傳受畢、

予門人雖^レ爲^三繁多^一、奉^レ感御厚志之馳驅曲當之術數歲

御稽古^一、御責方乘樣依^レ被^レ爲^レ成^レ拔^三其功類^一、奧儀秘

術不^レ錢^二一毫^一者也、此上於^レ有^二懇望^一、御家臣其列之輩^一

者、以^三御近臣之宛^一所^レ撰^三其氣質^一、以^三堅誓盟^一可^レ被^レ

遊^三御相傳^一、仍許之狀如件、

元祿十丁丑

柴崎十郎右衛門尉

四月十八日

藤原正勝判

松平修理大夫殿

64 綱貴公御譜中

同月十四日賜^三奉書于綱貴^一、依^レ是豈十五日登^レ營、

以^三參府之事^一奉^レ見^三于

大樹綱吉公^一、幣物獻品如^レ常、一族佐多豊前久達、家老

喜入安房久亮從^二先規^一、奉^レ調^三于

將軍家^一也、

65 全御譜中

寫正文在文庫

大御目付衆安藤筑後守殿より、丑四月廿五日留守居御用

由間、評定所^レ可^レ罷出旨申來、赤松^{（前茂）}甚右衛門罷出由處、

井上^{（定峯）}大和守様・安藤筑後守殿・松平美濃守殿御列座^{（重忠）}に、

國繪圖之儀付、御書付相渡り寫

覺

一今度國繪圖御改ニ付、其國之繪圖請取之方より萬事承
外儀無相違様ニ仕、繪圖被致外方之差圖次第ニ仕外様
ニ可被相違外事、

一大身小身によらず國郡村銘、書付、壹萬石以上并寺社
領者并上大和守、壹萬石以下其外諸御旗本之分老安藤
筑後守・松平美濃守方に、むより次第并組付支配有之
面、老、其頭、支配より書付揃候ゝ差出外様ニ可被相
觸外事、

一御書物藏ニ有之國繪圖、當分借し渡、一覽之以後返し
外様ニ可被申渡外事、

已上

朱カキ
元禄十年
四月日

全御譜中

寫正文在文庫

國繪圖調之儀ニ付、御大名様方御家來評定所に被召寄、
御一同ニ被仰渡外、右繪圖調之儀ニ付ゝ、御用有之
間、残り居可申由ニ御書付御出外御人數

但赤松甚右衛門書寫持參仕外、

松平薩摩守様
(島津綱貴)

井伊掃部頭様
(貞睦)

松平讃岐守様
(頼常)

佐竹右京大夫様
(義處)

上杉彈正大弼様
(綱憲)

有馬中務太輔様
(頼元)

本多中務太輔様
(忠國)

松平大和守様
(基知)

小笠原遠江守様
(忠雄)

松平隱岐守様
(定直)

榊原式部太輔様
(政邦)

松平越中守様
(定重)

水野美作守様
(勝理)

本多能登守様
(忠常)

戸田采女正様
(氏定)

眞田伊豆守様
(幸道)

奥平熊太郎様
(昌成)

牧野備前守様
(成春)

内藤能登守様
(義孝)

中川因幡守様
(久運)

安藤對馬守様
(重博)

久世出雲守様(重之)

水野豐前守様(忠愍)

松平周防守様(康寛)

青山下野守様(忠重)

青山播磨守様(幸徳)

相馬彈正少弼様(昌徳)

伊達遠江守様(宗巴)

朱力平
元禄十年
丑四月廿五日

67 右ニ付る井上大和守様より赤松甚右衛門に被仰渡り者、

一國之内組合有之方者一所ニ清繪圖相調申答ニ、一

國持合雖有之外、清繪圖者、只今被留置候方より調差出

申答ニ由被仰候、先頃伊東出雲守様被仰合ひる、日州

繪圖調可申由爲被 仰渡儀ニ由處、此書付ニ出雲守様御

名無之外、依之甚右衛門より御尋申り者、日向國之繪圖

一紙ニ結、清繪圖調差出外儀者、此御方様御一所より被

遊筈ニ由哉之旨、分る御尋申外處、如何ニ表其通ニ由、

大和守様御返答ニ由候、右之通ニ候得者、繪圖一紙ニ御

調外儀者此御方様より被遊筈ニ由、此御方様・出雲守様

御名有之、別紙之一紙書者御組合計之御書付歟と存り由、

甚右衛門より申出外、

已上

朱力平
元禄十年
四月廿七日

68 寫正文在文庫

一同之御用相濟り而以後相残り様ニ被仰渡、御渡被成

外御書付左ニ記、

清繪圖

松平薩摩守(綱忠)

伊東出雲守(祐實)

日向

69 寫正文在文庫

覺

一先年之繪圖何表に借渡可申事、

一新繪圖分割等其外古繪圖之通可被任外、

但古來と川筋違候所、或新川・新道・新村又者新池

沼等有之ハ、被相改繪圖ニ可被記事、

一國、御領・私領・寺社領、正保二年酉之年以來地形ニ

變り外所有之外哉、御代官・領主又者寺社方に被相尋、

變儀無之由申分者繪圖被取りニ不及、古繪圖之通可被

任外、尤變所有之分者其村計繪圖を被取、本繪圖可被

寫正文在文庫

直外事、

附 御領・私領又老寺社領之分、銘、所付書付可相渡

外間、其上古繪圖ニ有之村、ニ而相改、様子被

尋儀老其所、口直ニ可被相尋外、

一 正保二年以來論所等有之、裁許相濟外所老、古繪圖と

違外場所及可有之外間、銘、御代官・領主又老寺社方

口被相尋、左様之所及有之老、新繪圖ニ可被改之候、

但 右論所之儀、國境・郡境之外之出入老不及吟味事、

一 國境・郡境只今論所有之、内證ニ而濟儀老公儀口訴、

請裁許外様ニ被申達、裁許濟外以後、其所繪圖ニ可被

記事、

附 只今及詳論 公儀口出候場所及、出入相濟外以後

繪圖ニ可被記事、

一 國境・郡境之外之出入老裁許無構、繪圖仕立可被申事、

一 借渡外古繪圖、隣國之繪圖仕候衆と申合、國境繪圖之

上ニ而改、相違有之所老此方口可被相窺外事、

以上
朱力年
元禄十年 丑四月

在押札
左之書付折外而上書ニ此通ニ有之外

何國知行所付

誰

知行所覺

在押札
此御書付者先年於江戸首尾相濟為申由ニ御座外

一何國

何郡之内

何村

何村

何村

月日

誰

在押札
面、繪図被仕外國外之領知計如此

右之通認、知行高付老入不申外、縱老二ヶ國ニ知行有

之人老貳通認、來ル六月中井上大和守方口可被差出外、

但 其時節迄難調子細有之外ハ、其段可被相斷外、

以上、

朱力年
元禄十年 丑四月

71 案文在文庫

覺

大隅・薩摩・日向并琉球國御繪圖松平薩摩守ニ就被 仰

付外、古御繪圖拜借寫之、御奉行衆方御渡被成外御書付

之趣を以、國中變地委細相改、古御繪圖相違之所老土地

相應ニ直之、石高之儀老御副目錄之通記之、御料・私領

入交り國老銘、證文取之相記、郡墨引相違之所者相伺直之、國境詳論有之所者御裁許御墨引之通隣國役人申合直之、國境古御繪圖相違之所者隣國役人と申合相改直之、隣國境出口道、或川又者名有之山、此外國境相知り所之書付等迄、隣國役人立合後日雙方無違却様ニ申合、無相違段互ニ縁繪圖ニ書記取替之、下繪圖仕立差出り處、御吟味之上下繪圖之通無相違、清御繪圖仕立差上可申旨被仰渡奉畏り、以上、

年號エト月

謹内 誰印

同

同斷

御繪圖小屋

御繪圖小屋御案紙

72

寫正文在文庫

國境繪圖仕様之覺寫

一國境近所古繪圖ニ有之寺院・堂社・川筋・道筋・池沼

其外何ニる表所々名記有之所、兩國より不書出り様可

被相改り事、

一浦方有之國老小島杯有之所、是又兩國より不書出り様

可被仕り、

73

寫正文在文庫

在押札 此御書付者先年於江戸首尾相濟為申由ニ御座り

覺寫

但境目之中ニ當り所者、兩國より書載可被申り事、

右之分隣國之致繪圖り人と申合遂吟味、一方より書上り様可被仕り、尤右之外何之しるしも古繪圖ニ無之所者、前々之形ニ可被致置り、

朱力キ 元禄十年 丑五月

74

寫正文在文庫

國繪圖仕立様之覺寫

一繪圖紙、越前生漉間似合上之紙、裏打者厚キ美濃紙一

篇可被仕事、

朱力キ 元禄十年 丑五月

一分割之儀古繪圖之分割ニ仕、勿論道筋ハ壹里六寸之積
リ墨ニル星可被仕事、

一郡墨筋之内ニ郡之名記可被申事、
一郡色分ケ不紛様ニ可被仕事、

但郡境あさやかに墨筋引可被申外、
一村形之内ニ村高を記可被申事、

但高之儀老石切ニ仕、其外老何石餘と書付可被申事、
一墨紙ニ郡色分之目録并郡切高付・壹國之高、都合書付
可被申事、

一墨紙、郡切之村數并一國之村數記之可被申事、
一右新繪圖之表ニ書記外國郡、銘、村高帳面ニ仕立可被
差出外事、

一墨紙ニ繪圖仕上ケ人之名・年號月付記可被申事、
一御領・私領・寺社領之高仕分ケ無用ニ候、尤御代官・
地頭之名書凌無用之事、

但古繪圖ニ有之寺地・宮地等之形考、如前、記可被
申外、右之本借し外古繪圖、國々調様不同候故、
如斯書付相渡外、古繪圖考此書付ニ無相違様ニ可
被仕外、以上、

朱力キ
元禄十年 丑五月

75 網貴公御譜中
正文在文庫

爲端午之祝儀帷子單物數十到來歡覺候、委曲戸田山城守
可述外也、

朱力キ
元禄十年 五月三日
網吉
墨印

薩摩
中將殿

76 網貴公御譜中

彌寢丹波所迄如御狀岸喜右衛門事國許に引越之儀、且又
(清進)
養子願之通申付外付る、爲御禮委曲預示外趣入御念儀存
外、將亦御病氣未然と無之由、御療治專一存外、恐惶謹
言、

朱力キ
元禄十年 五月廿三日
網貴御判

伊勢兵庫様
(貞守)
御報
松平薩摩守
網貴

77 吉貴公御譜中

元祿十年丁丑五月二十七日、以_三土屋相摸守政直_一賜_二告_一于吉貴_一、且從_二先規_一拜_二受時服_一五十一、其後登_レ營而奉_レ拜_二謝_一之、時賜_二御馬_一一匹_二也、依_レ之六月六日發_二江府_一、家老島津中務久輝、用人市來次郎左衛門家賢・堀四郎右衛門興昌等從_レ駕也、致_三道_一於木曾路、六月二十二日到_二著伏見_一、同月二十四日下_二大坂_一、同二十七日發_レ船經_二西海_一、七月二十九日著_二船薩州和泉脇元_一、八月四日入_二鷹府_一、乃馳_二島津權七久茂_一後備_中於東都、九月十五日久茂登_レ營獻_二上先觸之幣物_一、奉_レ謁_二將軍家_一奉_レ謝_二吉貴歸州之忝_一也、久茂亦獻_二上御太刀・銀馬代・時服_一三、且以_二時服_一三領_二賜_三于久茂_一、

78 綱貴公御譜中

同年六月依_二參府之例_一獻_二上御馬_一二匹_一、以故賜_二奉書_一、

79 正文在文庫

御馬二匹被獻之外、加藤越中守申談首尾好遂披露候、恐_レ謹言、

朱力キ

元祿十年

六月三日

正武判

松平薩摩守殿

阿部豊後守
正武

吉貴公御譜中

正文在文庫

御狀令披見外、就土用中

公方様御機嫌之御様躰以使者被相伺之外、益御勇健之御事外間、可御心安外、隨而御看一種被獻之外、各申談首尾好遂披露外、恐、謹言、

朱力キ

元祿十年
六月十四日

松平修理大夫殿

阿部豊後守
正武判

81 全上

御狀令披見外、就土用中

公方様御機嫌之御様躰被相伺之候、益御勇健御事外間、可御心安外、紙面之趣得其意外、恐、謹言、

朱力キ

元祿十年
六月十四日

松平右京大夫
輝貞判
柳澤出羽守
保明判

松平修理大夫殿

正文在文庫

琉球布十卷・砂糖漬一器・泡盛二壺并御有一種被獻之外、
首尾好遂披露外、恐、謹言、

^{朱力キ}元禄十年 六月四日

正武判

松平薩摩守殿

阿部豊後守
正武

覺

一國繪圖一里塚之儀、惣様分割壹里六寸之可爲積旨、最
前書出外得共、右一里塚之印唯今迄古繪圖ニ長短有之
外段、是ハ國風ニ由壹里之町步、通例三拾六町ニ不合
所有之と相聞外、然上者其國之古繪圖ニ有之通、壹里
延外由繪圖ニ有之國者其國之一里を改、通例之壹里之
町步より延外ハ、古繪圖之通用置之、若其國ニ由
通例之積之一里塚有之外ハ、繪圖表一里六寸之積ニ
可被直之、壹里塚之長短何れ及可被准之事、

^{朱力キ}元禄十年 丑六月

寫正文在文庫

知行所覺

一日向國 那珂郡之内

塩路御手洗村 山崎村 新名爪村之内

廣原村之内

^{朱力キ}元禄十年 丑六月四日

嶋津主税印

知行所覺

一日向國 諸縣郡眞幸院之内

木脇村 岩地野村

吉野村 嵐田村

一日向國 宮崎郡穆佐院之内

金崎村 堤内村

^{朱力キ}元禄十年 丑六月五日 秋月式部印

知行所覺

一日向國

兒湯郡之内

高鍋村

日置村

上江村

市山村

椎木村

三納代村

持田村

岸上村

高城村

平田村

川原村

持見村

石村(松腕力)

板屋村

鹿遊村

上別府村

落子村

寺迫村

田原村

丸山村

征矢原村

長野村

瓜生村

岩山村

篠別府村

猪窪村

大池村

同國

那珂郡之内

西方村

高松村

奴久見村

一氏村

南方村

大平村

奈留村

北方村

秋山村

大矢取村

本庄村

崎田村

市木村

六郎坊村

海北村

都井村

御崎村

大納村

同國

諸縣郡之内

伊佐生村

三名村

同國

宮崎郡之内

宮王丸村

同國

白杵郡之内

方脇村(幸力)

以上

元禄十年

六月五日

秋月長門守(種彦)

87

綱貴公御譜中

正文在文庫

端午之御内書可相渡外間、明日五半時 御城江家來可被

差出外、以上、

元禄十年

六月八日

戸田山城守

松平薩摩守殿

88

寫正文在文庫

知行所之覺

一日向國那賀郡之内

北方村

東辨分村之内

朱力平

元禄十年

丁丑六月十三日

伊東主殿印(祐春)

寫正文在文庫

知行所覺

一日向國

那珂郡之内

上田嶋村

下田嶋村

袋廣瀬村

石崎村

上那珂村

下那珂村

廣原村之内麓村

新名爪村之内廻内村

一同國

兒湯郡之内

山田村

三才村

荒武村

妻万村

鹿野田村

平郡村

三納村

加勢村

藤田村

富田村

新田井倉村

朱力^キ元祿十年
六月廿二日

嶋津^{（惟久）}左京

寫正文在文庫

知行所付覺

一日向國

白杵郡之内

北方村

南方村

岡富村

祝子村

稻葉崎村

栗野名村

大武町

川嶋村

長井村

川内名村

三川内村

宮野浦村

寫正文在文庫

市振村

古江村

熊野江村

須怒江村

浦尻村

出北村

輕富村^{（經）}

大貫村

三須村

三輪村

伊福形村

土々呂村

櫛津村

鯛名村

赤水村

庵川村

加草村

尾末村

門川村

川内村

黒木村

入下村

宇納間村

田代村

立石村

小原村

水清谷村

神門村

鬼神野村

上渡川村

中渡川村

山三ヶ村

山陰村之内

七折村

岩戸村

山裏村

三田井村

下野村

上野村

田原村

川内村

五ヶ所村

鞍岡村

三ヶ所村

押方村

向山村

岩井川村

分城村

家代村

七ツ山村

三浦壹岐守^{（明敷）}

朱力^キ元祿十年
丑六月廿九日

御代官所之覺寫

一日向國

宮崎郡之内

下北方村 名田村 上北方村

池内村 南方村 村角村

大嶋村 花ヶ嶋町 上別府村

太田村 源藤村 庵屋村

在押札 此庵屋村・船引村郷村帳ニ者銘々ニ相分リ有之

右同 此庵屋・船引高村共ニ内證ハ銘々別リ申外得共、前々より兩

村高一所ニ郷帳ニ記、割付ニ成其通ニ書付外故、村付如此式ケ

村一所ニ書出申外

生目村 浮田村 細江村

長嶺村 富吉村 柏原村

跡江村 小松村 大塚村

福嶋村 三拾六年以前賣年地廢ニ而永川成無田地ニ罷成候

一同國 那珂郡之内

在押札 江田村、郷村帳ニハ宮崎郡之内ニ有

右同 此新別府村、郷村帳ニ者宮崎郡之内ニ有

右同 吉村、郷村帳ニ者宮崎郡之内ニ有

右同 下別府村、郷村帳ニハ宮崎郡之内ニ有

在押札 南方村 那珂郡南方村、郷村帳ニハ二所ニ有之、壹所

ニハ清武之内南方村ハ伊東大和守様、壹所
ハ福嶋之内南方村ハ秋月長門守様御領ト有
之ハ

右同

右同 宮崎郡ニ南方村有馬殿御領之内有之ハ

右同 此松永村、郷村帳ニ相見得外

一同國 諸縣郡之内

塚原村 本庄村 竹田村

森永村 須志田村

元禄十年丑六月

今井九右衛門印 (兼直)

92

寫正文在文庫

御代官所覺寫

一日向國 臼杵郡之内

日知屋村 日知屋村之内 富高村

財光寺村 塩見村 平岩村

山陰村之内 下三ヶ村 坪屋村

一同國 兒湯郡之内

穗北村 童子丸村 調殿村

右松村 三宅村 清水村

岡富村 黒生野村 現王嶋村

一同國 宮崎郡之内

瓜生野村

元禄十年丑六月

小長谷勘左衛門(正綱)

綱貴公御譜中

正文在文庫

御用之儀ハ間、明朔日五時可有登 城外、以上、

朱力キ
元禄十年 六月晦日

土屋相摸守(致道)

戸田山城守(忠目)

阿部豊後守(正忠)

(島津綱貴)
松平薩摩守殿

94 全御譜中

元禄十年丁丑六月晦日、元老土屋相摸守政直・戸田山城守忠昌・阿部豊後守正武下ニ奉書一曰、以下可ニ綱貴明日登レ營之事上、依レ之七月朔日登レ城、元老列座政直傳レ命曰、

大樹造ニ營東叡山本堂一、因下ニ綱貴助役之命一也、綱貴謹而拜ニ謝之一出レ營、於レ是家老以ニ禰寢丹波清雄一爲ニ助役總監使一、令下ニ島津大藏久明一副上レ之、番頭北郷宗

96 全御譜中

次郎久嘉、用人村田善太夫經智・市來次郎左衛門家賢、目附伊集院猪右衛門久芬・相良清兵衛頼庸・北郷右衛門八久治・宮之原甚五太夫重行久治・重行等、殿假爲目附役、吟味役三雲新兵衛定恒・上村茂兵衛政興、留守居赤松甚右衛門則茂、物頭白尾登五右衛門國嘉・村田九郎左衛門經武經武者殿等、爲物頭也、其外預レ事之士百數人也、同月二十二日始ニ本堂經營之事一、八月二日構ニ小屋於本所新錢座三万及筋違橋外兩所一、令下預レ事者皆居上レ之、大起三丁夫ニ築ニ本堂之屋地一、同十六日始運ニ斤斧一、綱貴亦時如ニ彼地一見レ之、

95 大藏久明譜中

元禄十年七月

將軍家造ニ營東叡山本堂一、命三子 太守綱貴公一以三助役之事一、於レ是以ニ禰寢丹波清雄一爲ニ助役總監使一、久明副レ之、其餘預レ事諸士百數十人也、ココニライテ 翌年七月二十一日功畢、八月二日召綱貴公賞ニ助役之功一、同三日清雄・久明以下十四人登レ營頂ニ戴時服及銀子一、各有差矣、時服六・白銀五十枚久明頂ニ戴之一、

條、寫

當所御普請場諸職人并人足、毎日相觸り刻限、無遲滯

罷出へし、仕廻り儀拍子木次第たるへき事、

一服忌穢有之者御普請所に一切罷出間敷事、

附 東叡山之内并下小屋共食物持參之節、魚鳥・五辛

之類堅停止之事、

一諸色運送之節、路次・舟路におゐて不作法無之、宰領

を付、往來之輩にかさつ仕間敷り、生類はさわり不申

様に念入可申事、

一御普請之場所并持運之道にぬれ、喧嘩口論堅停止たる

へし、若喧嘩口論有之ヲ及見外ハ、鎮可申り、品ニ

より早速奉行所に告知せ可申事、

附 御普請所に酒一切入申間敷り、御普請場之外にぬ

れ、酒酔申程給申間敷り、若酒に酔り躰のもの有

之外ハ、心ヲ付見届、品により奉行所に可申達

事、

一生類大切に仕、材木諸色取なをしり節、生類はさわり

不申様可仕事、

一火之用心可入念相定、役人切々見廻り、若御普請小屋

又者近邊出火有之者、不限晝夜早速御普請場に走付、

防可申り、場所ニ有之品々相守可申事、

附 定置所之外にぬれたは一切給申間敷事、

一博奕其外諸勝負堅停止之事、

一切手無之外ハ、諸色門外に出ずへからず、并こつは、

大鋸屑出之時者手代立合可相改之、少之木切にても隠

シ持出ルにおゐてハ、其者ヲ留置、役人に申聞可受差

圖事、

一御手傳方人足割、其外諸職人相考、費無之様ニ入念可

申事、

一參詣之面々、其外往來之衆は不作法無之様ニ可慎事、

一東叡山之内寺方其外諸堂は斷なく一切出入仕間敷事、

附 草木之枝折取へからざる事、

一御普請小屋圍之内に諸商人入申間敷り、惣る差當り不

入物買賣仕間敷事、

附 煮賣等御普請場近邊ニ差置間敷事、

一小屋ニ泊り外もの、御用之外自分之出合仕間敷り、見

舞ニ参りもの有之外共、かこひ之内に入申間敷事、

右之趣堅可相守、若相背族於有之者可爲曲事者也、

元禄十年

奉行

覺

- 一 御普請付の 公儀御役人衆御差圖相背不申、諸事御下知次第無油斷精を出、相勤可申外事、
- 一 服忌穢有之者、御普請場に一切罷出間敷外事、
- 一 諸色運送之節、路次・舩路おゐて不作法之儀無之様ニ可入念外、喧嘩口論堅停止たるへき事、

附 御普請場に酒一切入申間敷外、御普請場之外ニハ
 表酒醉申程給申間敷外事、

- 一 生類大切に仕、御材木諸色取直し外節、生類ニ障り不申様可仕事、
- 一 火之用心別々可入念事、

附 定置所之外ニハ一切給申間敷外事、

- 一 博奕其外諸勝負堅停止之事、
- 一 一切手無之、諸色門外に出すへからす外事、
- 一 御普請小屋圍之内ニ諸商人入申間敷外事、
- 一 小屋圍之内ニ見廻ニ参り者有之外共、圍之内ニ入申間敷外事、
- 一 御用之外御差圖無之ニ考、御手傳衆御小屋ハ一切出入仕間敷外事、
- 一 町人共より之振舞之儀ハ不及申、馳走ケ間敷儀少ニハ

表受申間敷外事、

- 一 諸職人より之音物少事ニハ表受用仕間敷外事、
- 右之旨早々爲心得申渡外、委細之儀考追ハ被仰渡管外間、此旨可相守者也、

朱力キ
 元禄十年 丑七月

全御譜中 此御書吉貴公御譜中ニ在リ

正文在文庫

一 筆令啓外、其方弥無吳可爲旅行と珍重存外、然考先月晦日御老中以御連署御用之儀外間、明朔日五時可致登城之由被仰渡、及登 城外處、今度東叡山本堂御建立付、御手傳被 仰付之旨、御老中列座ニハ、土屋相摸守殿被仰渡、難有仕合奉存、早速御請申上外、此段爲可申如此外、恐々謹言、

朱力キ
 元禄十年 七月六日 薩摩守 綱貴御判

(島津吉豊)
 松平修理大夫殿 御宿所

吉貴公御譜中 此御書綱貴公御譜ニ無之

正文在文庫

芳札令披見外、海路弥御無吳通船之由珍重存外、然者頃日暑氣甚外得共、一門中無別條外間、可易芳慮外、被入念示給段、欣悅之至外、恐、謹言、

朱力平
元祿十年 七月十五日
薩摩守 網貴御判

松平修理大夫殿
回答

100 吉貴公御譜中 此御書網貴公御譜中ニ無之

正文在文庫

一筆令啓外、七夕之祝儀且又爲生身靈祝詞、目錄之通銘、被相饋之、欣然之至外、爲謝禮如斯外、恐、謹言、

朱力平
元祿十年 七月十八日
薩摩守 網貴御判

松平修理大夫殿
御宿所

101 北郷久嘉譜中

元祿十年七月朔日、被受 網貴公可爲東叡山本堂造營御手傳 高命、因同八月三日有御歛初、禰寢丹波清雄御家爲總奉行、久嘉爲番頭勤仕之、御歛初畢後、於御門主之廣間賜饗應、翌十一年戊寅七月二十一日、就御普請成就

禰寢丹波清雄・島津大藏久明及久嘉進上太刀一腰・銀馬代御門主、各奉謝焉、時賜饗應其外役御普請之面面略之、

102 吉貴公御譜中
正文在文庫

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被獻之外、首尾能遂披露候、恐、謹言、

朱力平
元祿十年 八月三日
小笠原佐渡守 長重判

土屋相摸守 政直判

戸田山城守 忠昌判

阿部豐後守 正武判

松平修理大夫殿

103 網貴公御譜中

覺

一今度東叡山本堂就御建立、從 公義委曲以御條目被仰渡之趣、謹勿相守へし、被入御念御普請之儀外處、御手傳被 仰出之段、誠以難有仕合候之條、其旨不致

忘却首尾好成就有之ハ様に可相勵事、

一 御奉行并御役人衆中に對し慇懃に相愼、慮外之働仕間敷事、

一 御普請場并小屋にをひて、高聲諸事不形儀仕ましき事、

一 御普請中自他之輩何様之儀申懸り共、令堪忍へし、若御作事場をも不辨、喧嘩口論にをよハ、縦道理有といふとも曲事たるへし、依時宜老親族までも同罪に可申付事、

一 奉行之下知相背へからず、若又結徒黨族有之者可爲曲事事、

附 無精之者於有之者急度可申付事、

右條、堅可相守、聊不可有緩疎者也、

元禄十年八月三日

薩摩守

覺

一 東叡山之儀御崇敬之御事ハ處、今度本堂御建立御手傳被 仰渡之段大切成儀にハ、公義御條目之趣、謹可相守之、別ハ被入御念御普請之事ハ、殊多人數相集儀にハ得老、申合相勤へし、奉行役人老不及申、下、

に至迄一身之働と存、隨分可相勵事、

一 今度本堂御建立之儀、常躰之御普請とは爲相替事ハ得老、奉行・役人・頭取之面々ハ相附ハ支配中、其外日慵之者に至迄、非道之仕形無之様に、憐愍をくハへ可召任之、無調法之儀於有之者念比に申聞へき事、

一 御小屋場萬一出火有之節老、手寄に罷在面々早速駈付取消へし、其外急事有之節老、則役所之前に可相集事、

一 火廻之儀御普請場老勿論、小屋并居所に至迄、常々別る氣を付、互に申合稠敷用心可爲專一事、

附 又はハ吞所定置儀ハ、別所にて猥のむへからず、此段堅可申付事、

一 服忌穢有之もの御普請場ハ一切出ましき事、

附 東叡山之内并下小屋共に食物持參之節、魚鳥・五辛之類堅停止之事、

一 生類之儀大切に仕、材木并諸色取直し之節、不障様に可入念事、

附 御普請場にをひて生類相煩ハ敷、又老痛罷在躰見及ハハ、早速目付ハ可斷事、

一 御奉行下知、不依何事相背へからず、若及遲滯其場手つかへ有之者、支配人并附々之下役人迄可爲越度事、

附 御普請之儀に付る、存寄之儀者無遠慮可申出之事、
一 御藏より相渡之材木其外諸色に至迄、聊尔之儀仕へか
らす、人足召仕之儀、費無之様に入念可相勤事、

一人足割付之通毎朝差出へし、毎日御普請仕廻之節者役
所に集り、翌日之儀致相談、被仰渡儀不滞様に可申付
之、人足割方に付る、請人と私之申合毛頭有へからず、
此節御普請に被相懸り御方は、如何様成由緒有之共、
御普請に付る、諸事邪之心入を以て、密々之相談曾る
仕へからず、萬端不隱置内意申出可受差圖、且復私用
に付る無差圖人小屋は一切入ましき事、

附 諸職人願之儀、役所にをひて承へし、自分居所に
て一切取次有間敷事、

一 公儀御役人方者不及申、自他共に入交事外條、別る律
儀に相嗜、不形儀無之様に萬端可致覺悟、勿論喧嘩口
論一切停止たるへし、縦人足等に至迄、何様之儀申懸
りる者堪忍いたすへし、難遁子細有之といふ共、事を
不破其段可申出事、

附 御普請場にをひて亂心者、又者不慮之儀於有之者、
其場に有之面々、差計可取鎮事、

一 奉行并頭取より或理不盡之儀申渡、或最肩偏頗之儀於

有之者、無宥赦可申出之、乍然面々存違之儀も可有之
條、難心得儀者互に令熟談へし、存合儀有之、楚忽之
働いたし、難題に不成やうに可相心得事、

一人足之儀者其主取より委曲申付へし、請取之場所精を
出外様に毎々申聞、其上不届もの又ハ無精之者外ハ、
致吟味急度可申出之、且又人足に紛者も可有之間、入
念相改り様に、稠敷可申渡之、若右躰之者於有之者可
申出事、

一小屋にて高聲雜談無用たるへし、夜入五時には燈を消
へし、晝夜廻目付申付置之條、不叶用事有之、火をと
ほし外ハ、目付に相斷へし、違背之人者可爲越度事、
一 私用に付る、小屋場外口可出節者、不依誰人暮六時限
たるへし、士者奉行之證文、足輕・中間・人足者其頭
之證文、又者其主人之證文を以て可通之、無據儀にて
刻限過りハ、奉行に可相斷事、

附 小屋圍之口、朝六時に開、暮六時に可鎖事、
一 博突并諸勝負令禁止外間、堅可申付事、

一 御普請に付る、手代衆に私之馳走無用たるへし、又者
職人共よりの進物・馳走かましき儀、雖爲少事受用可
爲無用事、

吉貴公御譜中 此御書綱貴公御譜ニ無之

一酒吞ひ儀付ゐ、兼ゐ從 公義被仰渡趣申渡置ひ、今度

御普請に付ゐも被仰渡之段弥以可相守之、小屋場者不
及申、外方にをひて酔ひ程給ましくひ、若於令違犯者
可及沙汰事、

附 御普請場之外寺中并脇、無用事所に徘徊いたすへ

からず、就中遊女町に參儀從前、令禁止事外條、

近方之事に外得者相愼、家來共にも急度可申付置

事、

右條、堅可相守者也、

元祿十年八月三日

105 全御譜中 此御書吉貴公御譜中ニ在り

正文在文庫

一筆啓上仕候、爲八朔之御祝儀、御目錄之通拜受之任、

幾久忝次第奉存外、右之御禮爲可申上、如斯御座外、猶

奉期後喜之時候、誠惶誠恐敬白、

朱力キ

元祿十年 八月六日

松平修理大夫

吉貴判

進上 中將様

正文在文庫

芳札令披見外、其方弥無吳由珍重存外、然者七夕祝物進
之外、爲謝禮示給入念儀存外、恐、謹言、

朱力キ

元祿十年 八月六日

薩摩守

綱貴御判

松平修理大夫殿

回章

107 市太夫久雄寺殿久宿
嗣子

元祿十年丁丑八月四日 吉貴公歸レ國、故令下久雄爲レ使

節赴中東武上、因レ是九月十五日登レ玉城奉レ調ニ

將軍家ニ、述ニ歸國之謝禮ニ進獻如先例、

108 綱貴公御譜中

正文在文庫

御用之儀外間、明九日四時可有登 城外、以上、

朱力キ

元祿十年 八月八日

小笠原佐渡守

土屋相摸守

戸田山城守

阿部豊後守

松平薩摩守殿

109 正文在文庫

御肴一種被獻之外、首尾好遂披露候、恐々謹言、

朱力年
元祿十年 八月十一日 長重判

松平薩摩守殿
小笠原佐渡守
長重

110 吉貴公御譜中

正文在文庫

御狀令披見外、

公方様御機嫌之御様躰以使者被相伺外、益御勇健之御事
外間、可御心安外、隨而御肴一種被獻之外、各申談首尾
好遂披露外、恐々謹言、

朱力年
元祿十年 八月十二日 小笠原佐渡守
長重判

松平修理大夫殿

111 全上

御狀令披見外、

公方様御機嫌之御様躰被相伺之外、益御勇健之御事外間、
可御心安外、紙面之趣得其意外、恐々謹言、

朱力年
元祿十年 八月十三日 松平右京大夫
輝貞判

松平修理大夫殿

柳澤出羽守
保明判

112 北郷久嘉譜中

元祿十年八月九日徵久嘉於大書院、就御本堂成就被加御
褒美、喜入安房久亮傳 命、則

公出御御勝手間召久嘉、時服六拜領之、且有 御口自御
懇 高命、退就上并五郎左衛門朗喜・黒葛原源左衛門忠
雄迄、久亮奉謝焉矣、同月十一日奉可參詣東叡山御堂告、
久嘉亦勤仕御堂、有槌打御規式事了、各賜暇矣、

同九月五日久嘉獻上御樽肴 綱貴公、是就東叡山本堂御
普請成就奉賀之故也、即日 吉貴公亦奉獻御樽肴矣、
同年九月十一日久嘉賜暇、發江都同十一月二日歸魔府矣、

113 綱貴公御譜中 此御書吉貴公御譜中ニ在リ

正文在文庫

猶、能之番付差越之外、一門中何れ及無吳事外條可
易芳慮外、以上、

一筆令啓（長重）、其方愈可爲無吳珎重存（朱力）、然者去八日從小笠原佐渡守殿、明九日御用之旨以御奉書被仰渡及登城之處、同十日能被 仰付、當日於 御前能首尾好相仕舞、御懇之

上意御菓子拜領之難有仕合、右御菓子此方（朱力）の披間進之外、此旨爲可申如斯、恐、謹言、

朱力
元祿十年 八月十五日 薩摩守 綱貴御判

松平修理大夫殿 御宿所

114 全御譜中

爲改年之祝儀被差渡使翰、殊被準佳例數品贈給之、欣然之至、猶期後喜時、恐、不宣、

朱力
元祿十年 八月十五日 中將綱貴御判

謹上 琉球國司

115 全上

芳翰令披見、其地弥平安之旨珎重事、我等儀無恙令在府外間、可易芳慮、然者從大清到來之卷物三贈賜之、懇情之至存、恐、不宣、

朱力
元祿十年 八月十五日 中將 綱貴御判
琉球國司 回報

116 全上

芳札令披見、去年（清純）德慈丸出生之儀相聞、爲祝儀目錄之通被相贈之、令祝着、恐、不宣、

朱力
元祿十年 八月十五日 中將綱貴御判

謹上 琉球國司

117 全上

如來札去歲德慈丸出生付、爲祝儀目錄之通被相贈之、欣然之至、恐、不宣、

八月十五日 中將綱貴御判

回復 佐敷王子

參考
德慈丸ハ綱貴公ノ六男、後仙十郎、彌段丹波清輝之孿子、元祿九年子四月晦日誕生トアリ

118

如芳札去歲德慈丸出生付、爲祝儀目錄之通被相饋之、欣然之至、恐、不宣、

朱力^キ
元祿十年 八月十五日 中將綱貴御判

回復 中城王子

119 芳墨令披閱^ハ、去夏城内就燒失、爲爲見舞被差渡使者如^(マ)

目錄到來入念事^ハ、恐惶不宣、

朱力^キ
元祿十年 八月十五日 中將綱貴御判

謹上 琉球國司

120 芳札令披見^ハ、去年城内就燒失示給、殊目錄之通到來、

入念事^ハ、恐、不宣、

朱力^キ
元祿十年 八月十五日 中將綱貴御判

回復 中城王子

121 爲當年之嘉儀、芳翰殊被任恒例目錄之通被相贈之、過量

之至存^ハ、猶期後喜之時^ハ、恐、不宣、

朱力^キ
元祿十年 八月十五日 中將綱貴御判

回復 中城王子

122 吉貴公御譜中

正文在文庫

一筆致啓上^ハ、今度薩摩守殿於 御前御能被 仰付^ハ之處、被成御仕舞目出度奉存^ハ、右之段爲可得御意如斯御座^ハ、恐惶謹言、

朱力^キ
元祿十年 八月十九日

松平修理大夫様

參人、御中

鳥居播磨守

忠救判

123 吉貴公御譜中

正文在文庫

御狀令披見^ハ、

(綱吉養女)
八重姫君様來年夏中 御入輿之儀被 仰出之、目出度奉

存之由得其意候、紙面之趣各申談及言上^ハ、恐、謹言、

朱力^キ
元祿十年 八月廿七日

松平修理大夫殿

小笠原佐渡守

長重判

124 全上

御狀令披見^ハ、

八重姫君様來年夏中御入輿之儀被 仰出之、目出度被存

旨紙面趣得其意外、恐、謹言、

朱力キ

元禄十年 八月廿七日

松平右京大夫

輝貞判

柳澤出羽守

保明判

松平修理大夫殿

朱力キ
元禄十年 八月晦日

松平右京大夫

輝貞判

柳澤出羽守

保明判

松平修理大夫殿

125 吉貴公御譜中

正文在文庫

御狀令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座恐悦旨尤外、將又同氏薩摩守

東叡山御普請御手傳被 仰付、難有之由得其意外、紙面

之趣各一覽之事外、恐、謹言、

朱力キ

元禄十年 八月晦日

小笠原佐渡守

長重判

松平修理大夫殿

126 全上

御狀令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座恐悦旨尤外、將又同氏薩摩守

東叡山御普請御手傳被 仰付之、難有之由紙面之趣得其

意外、恐、謹言、

(表紙)

網貴公

自元禄十年九月

吉貴公

至同十一年七月

追
舊記雜錄
卷二十三

127

吉貴公御譜中

正文在文庫

一筆致啓達(網貴)、御同姓薩摩守殿頃日於御城御能被仰

付之、首尾好被相勤之由承之、珍重存(外)、依之爲御歡如

是御座(外)、恐惶謹言、

朱力平

元禄十年 九月五日

松平修理大夫様

人、御中

(編恩)
松平信濃守

網茂判

128

網貴公御譜中

正文在文庫

爲重陽祝儀、小袖五到來歡覺(政直)、委曲土屋相摸守可述(外)

也、

朱力平

元禄十年 九月七日

網吉
墨印

薩摩

中將殿

129

網貴公御譜中

芳墨令披見(外)、去、年爲進貢大清江差越(外)池城親雲上首

尾能相仕廻歸帆之段、大慶尤之事(外)、則以池城目錄之通

贈給入念儀(外)、恐惶不宣、

朱力平

元禄十年 九月十日 中將網貴御判

謹上 (高恩)
琉球國司

130

網貴公御譜中

上野御普請御手傳方役人付

一 惣奉行

彌 寢丹波 (清堪)

一 副奉行

島 津大藏 (久明)

一番頭

北 郷宗次郎 (忠昭)

一人用

村田(經)善大夫(善)

市來次郎左衛門(家)

一目付

伊集院伊右衛門(久)(芬)

相良(賴)清兵衛(清)

北郷右衛門八(久)(色)

宮之原甚五大夫(重)(行)

一吟味役

三雲(定)新兵衛(退)

上村(茂)茂兵衛(興)

一留守居

赤松(則)甚右衛門(茂)

一物頭

平田(宗)藤右衛門(則)

白尾登五右衛門(國)(慈)

一元

家村(在)平八(賢)

蒲生拾郎兵衛

伊集院 甚七

岡元 勘左衛門

川上 八右衛門

新納(時)平右衛門(考)

鮫嶋 次左衛門

伊集院 休兵衛
松元 茂兵衛

藤野 休左衛門(久)(善)

梅田 李之丞

有川 五兵衛

長沼 七右衛門

本田 市之助

高橋 武右衛門

黒田 勘左衛門

竹之内市郎兵衛

竹原 七郎兵衛

伊地知孫右衛門

荻野 半三郎

村田九郎右衛門

野村 藤左衛門

八代 三左衛門

山口 仲左衛門(治)(易)

一惣奉行江相付侍
朱力年
元禄十年 九月

131 吉貴公御譜中

正文在文庫

國許到着御禮之使者明十五日五時

御城に可差出外、自分之御禮表可申上外間、可得其意外、
以上、

朱カキ
元禄十年 九月十四日

(戸田忠昌)
戸山城

松平修理大夫殿

留守居

132 網貴公御譜中

正文在文庫

一筆致啓上外、今度 薩摩守様上野御普請御手傳被 仰
出、玆重奉存外、萬端御苦勞共ニ奉存外、且又先頃於
御前御能首尾好被遊目出度奉存外、將亦修理大夫様御
勇健被成御座玆重奉存外、御留守に切々御見廻可申上儀
御座外、夏中右手前病人共御座外未透と無御座仕合、
御見廻も不申上背本意奉存外、右之趣御序之刻宜様被仰
上可被下外、恐惶謹言、

朱カキ
元禄十年 九月十六日

鳴津八郎右衛門
久利判

鳴津中務様

人々御中

133 吉貴公御譜中

正文在文庫

御狀令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座恐悦旨尤外、將又今度被下御
暇、御馬并時服拜領之難有由、得其意候、在所到着付而
爲御禮以使者目録之通被獻之外、遂披露外處、御前に被
召出之、入念外段御喜色之御事外、恐々謹言、

朱カキ
元禄十年 九月十八日

小笠原佐渡守
長重判

土屋相摸守
政直判

戸田山城守
忠昌判

阿部豊後守
正武判

松平修理大夫殿

134 吉貴公御譜中

正文在文庫

御狀令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座恐悦旨尤外、將又今度被下御
暇、其上御馬并時服拜領之難有由、得其意外、國許到着

付^レ爲御禮以使者目錄之通被獻之^レ、紙面之趣承届^レ、恐々謹言、

^{朱力^キ}
元祿十年 九月十九日

松平右京大夫
輝貞判

柳澤出羽守
保明判

松平修理大夫殿

135 吉貴公御譜中

芳翰令披見^レ、去夏城内及回祿無是非仕合^レ、雖然下屋鋪無別條、此上之幸^ニ、依之被差越使者、殊目錄之表餽給之、入念^レ趣令怡悦^レ、恐惶不宣、

^{朱力^キ}
元祿十年 九月廿五日 侍從吉貴御判

謹上 琉球國司

136 全上

芳翰令披閱^レ、去歲德慈誕生付、爲祝詞別錄之表贈給之、(編發清純)
入念^レ趣令祝着^レ、恐惶不宣、

^{朱力^キ}
元祿十年 九月廿五日 侍從吉貴御判

謹上 琉球國司

137 全上

爲肇年之佳祥被差渡使翰、殊被準恒例目錄之通贈給、入念^レ段令欣悦^レ、猶期后音之時^レ、恐惶不宣、

^{朱力^キ}
元祿十年 九月廿五日 侍從吉貴御判

謹上 琉球國司

138 全上

芳札令披閱^レ、去夏城内及回祿無是非儀^レ、雖然下屋敷無別條、此上之幸^レ、因茲別錄之表被相贈之、欣然之至^レ、恐々不宣、

^{朱力^キ}
元祿十年 九月廿五日 侍從吉貴御判

回復 中城王子

139 全上

芳札令披見^レ、去歲德慈出生付、爲祝儀別錄之通被相餽之、入念^レ儀欣然之至^レ、恐々不宣、

^{朱力^キ}
元祿十年 九月廿五日 侍從吉貴御判

回章 中城王子

芳札令披見^レ、其國平安之旨珍重之事^レ、我等儀無恙^レ、
間可易芳意^レ、隨^レ唐繪一卷・紺縮緬五端饋給^レ、懇情
之至存^レ、恐惶不宣、

朱力年
元祿十年 九月廿七日 中將 綱貴判

琉球國司

回報

正文在文庫

一筆啓上仕^レ、重陽之爲御祝儀御目錄之通拜受之仕、幾
久忝次第奉存^レ、右之御禮爲可申上如斯御座^レ、猶奉期
後喜時^レ、誠惶誠恐敬白、

朱力年
元祿十年 十月四日 松平修理大夫 吉貴御判

進上 中將様

正文在文庫

御用之儀候間、明七日四時可有登 城^レ、以上、

朱力年
元祿十年 十月六日 土屋相摸守
戸田山城守

阿部豊後守

松平薩摩守殿

芳札令披見^レ、其方無吳歸國珍重事^レ、依之爲御禮使者
鳴津權七方被指越、爰許首尾好相濟大慶存^レ、入念示給
之趣欣然之至^レ、恐、謹言、

朱力年
元祿十年 十月六日 薩摩守 綱貴御判

松平修理大夫殿

回章

正文在文庫

一筆致啓達候、去比

太守様御儀於

殿中御能被 仰付之、首尾好御仕舞被遊^レ趣致承知、珍
重之御儀奉存^レ、

修理大夫様江右之御悅爲可申上、御自分迄如此御座^レ、

147

吉貴公御譜中
正文在文庫

146

綱貴公御譜中

正文在文庫
御肴一種被獻之外、首尾好逐披露外、恐、謹言、
宋力キ 元祿十年 十月十四日 正武判

松平薩摩守殿

阿部豊後守
正武

145

綱貴公御譜中

重陽之 御内書可相渡外間、明日五時以前 御城江家來
可被差出外、以上、
十月九日 土屋相摸守

松平薩摩守殿

此旨以御序宜預御披達外、頼入存外、恐、謹言、

宋力キ 元祿十年 十月六日

(佐土原) 嶋津左京
惟久判

嶋津中務殿
(久野)

149

吉貴公御譜中

貴札致拜見外、
公方様益御機嫌能被成御座外、然者先頃於 御前御同姓

148

全上

御狀令披見外、
公方様益御機嫌能被成御座恐悦旨尤外、將又先頃同氏薩
摩守能被 仰付、其上御菓子頂戴之難有之由、紙面之趣
得其意外、恐、謹言、

宋力キ 元祿十年 十月廿二日

松平右京大夫
輝貞判

柳澤出羽守
保明判

松平修理大夫殿

宋力キ 元祿十年 十月廿二日

阿部豊後守
正武判

松平修理大夫殿

薩摩守殿能被 仰付之、其上御菓子御拜領雖有被思召外
旨、依之以御使者被仰達外趣承知仕外、恐惶謹言、

朱力キ
元祿十年 十月廿二日

米倉丹後守
昌尹判

松平修理大夫様
御報

150 網貴公御譜中 此御書吉貴公御譜中ニ在リ

正文在文庫

芳札令披見外、先頃於 御前能相動外付る爲悦示給、殊
目錄之通被相贈之、令祝着外、將又拜領之菓子之内進之
外付、謝禮之趣是又入念儀外、恐々謹言、

朱力キ
元祿十年 十月廿八日

薩摩守
網貴御判

松平修理大夫殿

回報

151 網貴公御譜中

覺

一本所御小屋場に相詰外諸士并足輕・又者迄迄、御門出
入札ニ申付候間、札無之面々、差差通間敷外事、
一御門、朝老六時開、晚老暮六時ニ鎖、出入堅可差留外、

無據用事有之入來者有之者、門外に留置、御用人相斷
差圖次第可相通外、鑰者物頭請取置可申外事、

一私用付る罷出外輩者、士者奉行證文、足輕者物頭證文、
人足者頭方之證文、家來下々者主人證文ニ可差通之、
尤諸物持せ遣外節者、其人々、可爲證文事、

附 證文を以罷通外面々暮六時過不罷歸外者、其證文
横目ニ可差出外、

一御屋鋪方より懸る相動外人之家來下々者、與力有之面
々者與力より之斷ニ可爲致出入、與力無之面々主人
之斷ニ可出入可爲仕事、

一東南兩御門之儀表明立表御門同前ニ仕、常躰之出入者
右兩御門よりは爲仕間敷外、急事之節者各別ニ候事、
右之通堅可相守、聊緩疎有間鋪者也、

朱力キ
元祿十年 丑十一月二日

152 吉貴公御譜中

正文在文庫

御狀令披見外、
公方様益御機嫌好被成御座、先比護國寺被爲 成之儀被
承、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及言上外、恐々謹言、

朱力キ
元祿十年 十一月三日
土屋相摸守
政直判

松平修理大夫殿

153 吉貴公御譜中

正文在文庫

御狀令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃護國寺被爲 成外儀被承之、恐悅旨尤外、紙面之趣得其意外、恐々謹言、

朱力キ
元祿十年 十一月三日

松平右京大夫
輝貞判

柳澤出羽守
保明判

松平修理大夫殿

154 吉貴公御譜中 此御書綱貴公御譜中ニ無之

正文在文庫

尊書謹而拜見仕外、先頃爲生御靈之御祝儀目錄之通進上仕外處、被仰下外趣被爲入御念外御儀忝奉存外、猶奉期後喜之時外、誠惶誠恐敬白、

朱力キ
元祿十年 十一月四日

松平修理大夫
吉貴御判

進上 中將様

155 全上

御狀令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座恐悅旨尤外、將亦參勤時分儀以使者被相伺之外、及 高聞外處、來年三月中可致參府由被 仰出候、可被存其趣外、恐々謹言、

朱力キ
元祿十年 十一月五日

小笠原佐渡守
長重判

土屋相摸守
政直判

戸田山城守
忠昌判

阿部豊後守
正武判

松平修理大夫殿

156 全上 此御書綱貴公御譜中ニハ無之

猶々先頃於 御前能就被仰付外、爲祝詞目錄之表被相贈之、令恰悅外、爲謝禮別楮之通進之外、以上、一筆令啓外、先月十一日御能拜見被 仰付、難有仕合外、依之爲祝儀目錄之通進之外、隨其方愈可爲無吳と珍重

存外、於爰許一門中無吳事外條、可易芳慮外、猶期後喜之時外、恐、謹言、

朱力年
元祿十年 十一月六日

松平修理大夫殿
御宿所

薩摩守
綱貴御判

157 吉貴公御譜中

正文在文庫

其方參勤時分之儀、最前來年三月中可有參府之旨雖相違

外、同氏薩摩守御普請御用被 仰付候間、來年七月中參

勤可仕由被 仰出外、可被存其趣外、恐、謹言、

朱力年
元祿十年 十一月十五日

小笠原佐渡守
長重判

土屋相摸守
政直判

戸田山城守
忠昌判

阿部豐後守
正武判

松平修理大夫殿

158 綱貴公御譜中 此御書吉貴公御譜中ニ在リ

正文在文庫

一筆令啓外、來年參勤之時分先頃被相伺之、三月中可有

參府旨被 仰出、其通申越外處、我等儀上野御普請方相

勤外付外、其方事來年七月中可有參府之由、昨日從土屋

相摸守殿以御奉書被仰渡外、緩、可爲休息之令大悅外、

委曲從家老中可申越旨申付外間、不能詳外、恐、謹言、

朱力年
元祿十年 十一月十七日

薩摩守
綱貴御判

松平修理大夫殿

御宿所

159 正文在文庫 此御書吉貴公御譜中ニ在リ

一筆啓上仕候、弥御機嫌能被成御座、珍重奉存外、歲

暮之御祝儀爲可申上差上使申外、隨外目錄之通進上之仕

外、猶來陽諸慶可申上候、誠惶誠恐敬白、

朱力年
元祿十年 十一月十八日

松平修理大夫
吉貴御判

進上 中將様

160 正文在文庫 此御書吉貴公御譜中ニ在リ

鳴津壹岐方養生不相叶死去之由、笑止之至外、依之示給

趣被入念儀存外、恐、謹言、

朱力キ
元禄十年

十一月廿三日

薩摩守

綱貴御判

松平修理大夫殿

161 市正忠廣一流助之丞久白譜中

久白

忠昶 市熊 市之助 助之丞

元禄二年己巳十月十七日誕生、母前 太守光久公御女、

同十年十二月十五日 吉貴公渡ニ御忠守宅一、久白首服

公手自加冠、且賜レ脇刀、鳴津中務久輝理髮、

162 吉貴公御譜中

正文在文庫

御狀令披見外、就寒中

公方様御機嫌之御様躰以使者被相伺之外、益御勇健御事

外間、可御心安外、隨テ御看一種被獻之外、各申談、首尾

能遂披露外、恐、謹言、

朱力キ

元禄十年

十二月十四日

小笠原佐渡守

長重判

松平修理大夫殿

163 全上

御狀令披見候、寒中付外

公方様御機嫌之御様躰被相伺之外、益御勇健之御事外間、

可御心安外、隨テ御看一種被獻之外、紙面之趣得其意外、

恐、謹言、

朱力キ

元禄十年

十二月十五日

松平右京大夫

輝貞判

柳澤出羽守

保明判

松平修理大夫殿

164

綱貴公御譜中

正文在文庫

蜜柑二箱并御看一種被獻之候、首尾好遂披露外、恐、謹

言、

朱力キ

元禄十年

十二月十五日

長重判

松平薩摩守殿

小笠原佐渡守

長重

165

吉貴公御譜中

正文在文庫

貴札致拜見外、寒氣之節貴様弥御堅固御座外由、珍重之御事外、如仰拙者儀此度津山之城無滯受取之、彼地首尾能相仕廻致大慶外、今程緩々致休息事御座外、因茲被示下被入御念外之段忝存外、恐惶謹言、

朱力キ

元禄十年

十二月十九日

酒井鞆負佐

忠圍判

松平修理大夫様

御報

166

吉貫公御譜中

正文在文庫

御狀令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座恐悦旨尤外、將又先頃同氏薩摩守 御能拜見被 仰付之、於其方難有之由紙面之趣得其意外、恐々謹言、

朱力キ

元禄十年

十二月廿三日

松平右京大夫

輝貞判

柳澤出羽守

保明判

松平修理大夫殿

167

全上

御狀令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座恐悦旨尤外、將又先頃同氏薩摩守 御能拜見被 仰付、於其方難有之由得其意外、依之爲御禮被差越使者外紙面之趣、各一覽之事外、恐々謹言、

朱力キ

元禄十年

十二月廿三日

小笠原佐渡守

長重判

松平修理大夫殿

168

全上

御狀令披見外、如承十月十二日當所地震外、

公方様益御機嫌能被成御座恐悦旨尤候、紙面之趣各申談及言上外、恐々謹言、

朱力キ

元禄十年

十二月廿五日

小笠原佐渡守

長重判

松平修理大夫殿

169

全上

御狀令披見外、如承十月十二日當所地震外、

公方様益御機嫌能被成御座恐悦旨尤候、紙面之趣得其

意外、恐、謹言、

朱力年
元禄十年 十二月廿五日

松平右京大夫
輝貞判

柳澤出羽守
保明判

松平修理大夫殿

170
吉貴公御譜中

正文在文庫

御狀令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座恐悦旨尤候、將又十月十七日當地雖火事出來外、御城内別條無之段被承珍重由、紙面之趣得其意外、恐、謹言、

朱力年
元禄十年 十二月廿六日

松平右京大夫
輝貞判

柳澤出羽守
保明判

松平修理大夫殿

171
全上

御狀令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座恐悦旨尤外、將又十月十七

日雖當地火事出來外、御城中別條無之段被承之珍重由、得其意外、紙面之趣各申談及言上外、恐、謹言、

朱力年
元禄十年 十二月廿六日

小笠原佐渡守
長重判

松平修理大夫殿

172
綱貴公御譜中

覺

一御小屋四所之辻番、暮六ツ時より明六ツ過迄夜番可相勤外、

一夜廻之儀一夜ニ五度ツ、五ツ時より七ツ過之間ニ外廻衆被差廻、間々見合外亦可相廻外、

一北西之角辻番より南番所ニ繼渡、東北と可次渡外、一夜之内順逆ニ申合可相廻外、

右之通相勤、火之用心御材木ニ聊尔仕外儀、別る氣を付見分可仕外、若御小屋之廻リニ胡亂成者見合外ハ、致詮議、兵具奉行方ニ可申出外、聊不可有緩疎外、已上、

朱力年
元禄十年 十二月十六日

(島津久明)
大藏

173
覺

諸役人之面々、御出入之職人共より、進物雖爲少事曾る
受用仕間敷外、此旨支配有之役人者支配中は及堅可申渡
外、聊緩疎有間敷者也、

宋力キ
元禄十年 十二月廿八日

174 正文在文庫

爲歳暮之祝儀、小袖五重到來歡覺候、委曲阿部豊後守可
述外也、

宋力キ
元禄十年 十二月廿九日

綱吉
墨印

薩摩
中將殿

175 吉貴公御譜中

正文在文庫

爲年頭之御祝儀以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被獻
之外、首尾好遂披露外、恐々謹言、

宋力キ
元禄十一年 正月十一日

小笠原佐渡守
長重判

土屋相摸守
政直判

松平修理大夫殿

176 (前欠)
委曲使者口上申合外、恐惶謹言、

元禄十一年 正月十六日

戸田山城守
忠昌判

阿部豊後守
正武判

米良半右衛門
陳章判

片岡權兵衛
正滿判

菊池源左衛門
武シレス判

澁谷三郎左衛門
重シレス判

万江長右衛門
長邦判

嶋津中務圖書様

嶋津中務務様

嶋津由様勤解由様

嶋津由様助之丞様

新納四郎左衛門様
(久珍)

種子嶋藏(久時)人様

肝付主殿様(久慈)

參人々御中

正文在文庫

椎葉山中覺

一東西行程八里餘

一南北行程拾里餘

一四方道拾六筋

内貳筋新道

一御制札場七箇所

一鷹巢山七箇所

一寺貳宇

但眞宗也

一御留山拾貳

外藪木山六箇所

合拾八山也

右悉元禄貳年書付 公義に差上置之

一銅山 壹箇所

一古杣山四箇所

内壹箇所當分表杣取有り

一古城貳箇所

一村數合八拾四

内新村壹箇所

已上

朱力斗
元禄十一年

178 綱貴公御子

女子

於菟 於榮

元禄十一年戊寅正月十七日誕生於武州芝第、母江田氏、

嫁三松平飛驒守定英、生一男、後離別、

179 吉貴公御譜中

正文在文庫

華翰掌握、如來教新年之賀義不可有盡期外、先以迭無吳
事越年欣幸之至外、仍目錄之通惠賜、誠以丁寧之式幾久
令祝納外、萬祥期永日、不能多毫外、穴賢々々、

朱力斗
元禄十一年 初春念一

(近衛基熙)
(花押 No.3)

薩摩侍從殿

正文在文庫

御狀令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、十一月十二日甲府中納言殿(徳川家宣)

亭被爲 成外儀被承之、恐悦旨尤候、紙面之趣各申談及

高聞候、恐々謹言、

朱力キ
元禄十一年 正月廿一日

松平修理大夫殿

戸田山城守
忠昌判

181 吉貴公御譜中

正文在文庫

御狀令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、十一月十二日甲府中納言殿

亭被爲 成外儀被承之、恐悦旨尤外、紙面趣得其意外、

恐々謹言、

朱力キ
元禄十一年 正月廿一日

松平右京大夫
輝貞判

柳澤出羽守
保明判

松平修理大夫殿

182 吉貴公御譜中

正文在文庫

去十六日之尊書拜見仕外、然者來朝之唐船壹艘、去九日

薩摩守殿御領内屋久嶋に致漂着外付、彼嶋在番之衆方被(蝦毛郡)

致警固、同十四日隅州之地方濱尻と申所迄渡海仕外由、(肝屋郡)

日和次第當津に被送越外之様被仰付外旨、爲御案内先達

而被仰下外之趣得其意奉存外、日和次第如例警固御差添

可被送遣之候、從御家類衆委曲被申越承知仕外、恐惶謹

言、

朱力キ
元禄十一年 正月廿三日

(袋崎奉行)
諏訪下總守 賴蔭判
(同)
近藤備中守 用高判

松平修理大夫様

参貴報

183 網貴公御譜中

正文在文庫

御札令拜見外、

遠江守様益御勇健被成御座、次各様御無吳之由、珍重之(和良頼齋)

御事外、然者國繪圖之儀去年被 仰出外趣付外、椎葉山

之儀遠江守様御支配所ニ付故、日向國繪圖薩摩守所江申
請置外内、椎葉山之分於江戸被書寫外付、其御方扣御見
合繪圖被相認、新宮市左衛門殿爲御使者被爲差越私共江
蒙仰外趣、將又繪圖御調之儀付、市左衛門殿御口達之
通委細承届、繪圖考此方江先受取置申外、被仰越外段、
之内私共方御返答難申儀及御座外間、到江戸薩摩守江申
越、追及可得御意外、委曲市左衛門殿江申達外間不能詳
外、恐惶、

朱カキ
元禄十一年 正月廿七日

- 肝付 欠 主 欠 兼 殿
- 種子嶋 欠 時 藏 人
- 新納四郎左衛門 欠 參 門 忠 守
- 嶋津助 欠 丞 之 丞
- 嶋津勘解由 欠 當 由
- 嶋津 欠 中 務
- 嶋津 欠 圖 書
- 萬江長右衛門様
- 澁谷三郎左衛門様
- 菊池源左衛門様
- 片岡權兵衛様
- 米良半右衛門様

御報

184 全上 此御書吉貴公御譜中ニ無之

正文在文庫

爲改年之御祝儀尊書謹々拜見仕候、益御勇健被遊御超歲
外由目出度奉存外、於御當地一門中相替儀無御座外間、
尊意安可被思食外、隨及御目錄之通被下置之、幾久忝次
第奉存外、猶奉期後喜之時候、誠惶誠恐敬白、

朱カキ
元禄十一年 正月晦日 松平修理大夫 吉貴御判

進上 中將様

185 吉貴公御譜中

正文在文庫

貴札致拜見外、
公方様益御機嫌能被成御座外間、御心安可思召外、然考
參勤時分之儀三月中と最前奉書到來處、御同姓薩摩守殿
上野御普請御用被 仰付外付、當七月中可有參府旨被
仰出奉書之趣、被得其意難有之由尤之御事外、依之爲御
禮使札被差越之段致承知外、恐惶謹言、

朱カキ
元禄十一年 正月廿八日 大久保加賀守 忠朝判

松平修理大夫様

御報

綱貴公御譜中
寫正文在文庫

覺

一今度國繪圖就被 仰付り、御領・私領に被相尋り品、別紙に書付相渡之り、先變地之有無を被尋、變地無之方者其旨證文被取之、變地有之方計に委細被尋可然り、寺社方に表右之通に可被相心得り、以上、

寅二月

全御譜中

元禄十一年戊寅二月九日陰辰刻東叡山本堂立柱、綱貴如而監之、

○同年春東叡山有二山王權現之社一、有レ命移之之別處一、綱貴請修三造之一、六月十五日卯刻立柱、同十九日辰刻上棟、新加三彩色一寄三進焉一、

綱貴公御譜中

(日置郡)

薩州滿家院郡山厚智村花尾權現者、建保六年秋當家元祖豐後守忠久安置先考鎌倉 右幕府頼朝公及母堂丹後局・

永金阿闍梨三體之靈像一、追三尊花尾權現一、乃是所祈三

將軍家志願成就殊者國泰安民一也、頼朝公逝于正治元年正月十三日鎌倉一、至是歲元禄十一年一當三五百年之變

忌一、是故二月十一日綱貴命三入大承院十七世法印覺慧一、闡三七箇日之梵筵一、以盡三追遠之誠一、詳見左、

祭花尾山靈神文

維元禄十一龍輶三著雍攝提格二二月丙午朔戊午日薩隅日三州刺史虎賁中郎將 謹遣下三權大僧都法印覺慧等一備三珍膳上味之奠一敬祭花尾權現上柱國亞槐右幕府源頼朝尊尊上嗚呼天高而地厚而平五氣發行 萬彙順成惟天降レ時降以三賢君一惟地轉レ軸讓以三堅利一諄諄神威其德孔 碩 平レ族冒レ土厥亂維舊 有レ與有レ黨 其群 酷醜神其拂避爲三民父母一父誨三其義一母仁三其愚一既變既從神其居レ初天地一變武威萬世夙夜 兢 畏惟懷三永圖一今我國家幸安幸永 良策所レ爲 濬 思所レ致其動也天其靜也、地巍々事表無三得而言一不レ可レ不レ仰不レ可レ不レ祭今日正當三半千會回一蘋蘩既盈法養在レ盛嗚呼其神庶 享三其誠一

施餓鬼祭文

維元祿十有一年仲春之日初更之天嘉會沙門某甲謹備一
 器淨飯一盂清水沼毛山菓時花沈水香油等奠一祭
 冥道幽徑一切鬼類二原夫雖下六趣咸稟三苦惱一四生共不中娛
 樂上特難レ忍餓鬼飢饉之伸也倘見是可忍孰不可忍
 也諒夙世慳貪諸業所レ酬既經三歷却跋不レ聆二水穀名一偶
 臨三河水一膿血滿希一遇三餉食二猛火燭有財無財種族針口臭
 口衆報無量無數臻三于茲一六通健連空傷レ魂多聞阿難太
 生レ怖爾時牟尼大雄以三自在光明力一説三神咒一示三勝規一
 繇レ旃一搏食成三七々斛香積一、一掬水變三二十斛甘露一
 無數鬼類無邊餓者飢腸飽滿醜骸脫得三生天上生一淨
 邦矣凡救脫幽靈之法拔濟鬼趣之門毘盧覺皇之所説也瑜伽
 上乘之所傳也大寶樓閣不空羅索隨求寶篋救拔焰口大灌
 項光等是其經也龍猛大士龍智菩薩廣福和尚廣智三藏金河
 道殿臺山性喜南山根來之兩大師等是其祖也三國傳來師資
 相承法脉綿々而不絶是獨我宗也幸今某等請三 國君羽林
 郎公命一營三大祖大君頼朝公半千遠忌一飭三 七箇日法會一
 修三供佛利生軌一晝羞三三德六味珍膳於三寶慈悲境界一夜
 施三百味五菓妙供於一切幽冥餓靈一爾 遇 神儀尊靈
 逾歸三博仁之德一逾 假三 恃怙之思一凝三淵愉一障 平密
 嚴金臺一輝三威光影乎花尾寶閣一冀 護持孝君壽齡延長體

練三金剛一見聞清淨成三梵天德 諸有賢聖常恒加被怨冤讎
 敵不レ能三侵害一斯亦 仰梵金口所暢 一切幽魂臨茲饗レ
 施餓鬼疏
 六大無碍春苑 融三窺仇氷一
 三密加持夜場 鋪三覺智月一
 寶光幢笑之德察爾嬉鬢歌舞之業炳焉 挑三報レ喜燈乎光明
 雲一幟三度レ險舟乎音聲海一
 直到三彼岸一 醜陋質忽喪
 頓變三土砂一 淨邦 相自露
 濕雨曉 戸 永闕三泣レ辜之魂一
 綠柳崖頭 徒拱三援レ溺之手一
 偉哉法力 奇哉衆生
 個個自具三慧眼一 處々僉脫三幽冥一
 打三破鬼窟一不レ假三彈指一
 透三過天關一豈用レ旋レ眼
 願文
 奉三爲 願文
 右大將頼朝公五百年遠忌一修三漫荼羅供一願文奉レ摺寫大

乘妙法蓮經一十部

奉レ雕刻五輪塔婆一基

夫以雙圓伽梵起ニ如於一居ニ二部漫茶輶ニ智智乎諸識一
マテカカフテ
珠ニ 大羅ニ而牛羊ソカ德脂ニ化城ニ而烏菟喘遠而不レ遠即

我心絶而不レ絶是吾性水清則不レ到而到鏡ミカクトキハ 瑩 則不レ得
而得鐘谷之應奚其遲矣伏惟

右大將賴朝公者久安三年四月八日誕生字ニ鬼武者ト純粹

稟レ天迺仁人傑然而爲ニ紊亂之世ニ以ニ遷徙之身ニ起ニ自蛭

島ニ跳ニ出石橋ニ航ニ安房ニ赴ニ上總ニ擇處ニ鎌倉ニ威風起而

東州草偃攻ニ落屋島 旗雲靡而西海波靜遣レ兵誅ニ義仲一自

征擊ニ泰衡ニ敕敝ニ正ニ位ニ官至ニ大納言ニ兼ニ右近衛大將一

任ニ征夷大將軍ニ即爲ニ六十六州摠追捕使一自レ是

以降國司輕而守衛重領主弱而地頭強執ニ闔國兵馬之

權ニ捫ニ兆民塗炭之苦ニ雖レ然以レ功不ニ自誇一居レ謙而

敬レ神所謂畏レ榮好レ古薄レ身厚レ志者乎宜哉稱ニ武林蒿矢

乎大君一始レ自レ茲矣寧圖正治改元祀孟陬之月十三日之冀

風撥ニ晨露ニ雨絶ニ夕雲ニ百僚茶蓼萬民醉梅終乃祭ニ祀於松

岡ニ號ニ白旗明神ニ既而 賴家實朝兩公繼任ニ征夷大將軍一

治レ世各有レ年矣抑太夫判官檢非違使從五位下豐後守忠

久公者 大君之長庶子而當家之元祖也文治丙午載公テッシ嗣胤

之日 大君手自讓ニ寶刀一與ニ名器一補ニ薩隅日三州守護及

摠地頭職ニ號ニ島津ニ蓋栴ニ此三州乎島津御莊ニ故也又爲ニ

越前若狹之州牧一略領ニ伊勢信濃之郡莊一在ニ鎌倉ニ時橫レ

梁治ニ和田之亂一排レ箋決ニ柳營之疑一豈非ニ文武兼備

之良將乎居ニ薩府ニ日履信奉没度博仁撫黔黎弘洙泗之風

闡迦維之化且築社壇於花尾嶽南麓安ニ 先考靈像一以敬以

祭號ニ花尾權現ニ可謂至孝至誠也爾來連綿歷世 覃ニ二十

餘代一今茲元祿十一年戊寅春正當ニ 大君五百年遠忌一

三州刺史從四位上左近衛中將綱貴爲ニ其嫡苗一故延ニ屈一

百口金剛乘佛子一供ニ養兩部界曼荼羅聖衆一摺ニ寫妙法華

經十部 雕ニ刻五輪塔婆一基ニ兼 闡ニ七箇日梵筵一以盡ニ

追レ遠之誠ニ矣凡爲ニ道場儼儀一也千品 藥 斬ニ新サウハク繒帛一

七重寶樹風來說ニ苦空ニ百和香調ニ林沈檀一七重欄榻雲 簾

呈ニ我淨一安養淨邦金繩誰 誦 金鼈銀 莖 齒茵蔓ニ莖承

塵ニ波紋水樣羅 綾 洄ニ復梁上ニ兜率寶宮軒窓自啓五瓶芬

陀異ニ彩乎五智一四盤羯磨同ニ輝乎四身一闕伽一滴無ニ垢

不レ盡金杵三擲 無ニ物 不レ摧開ニ歡喜於華鬘ニ薰ニ法身

於塗香ニ玉幡玲瓏寶一蓋颯纒密ニ嚴乎精舍ニ華ニ藏乎方壘一

維辰春花灼灼織ニ海會錦一林鳥嚶々囀ニ梵唄音一山自高水

自潔見聞境非レ他誰不レ含ニ感歎之咲一乎伏願藉ニ此妙業一

松平薩摩守殿

196 網貴公御譜中 此御書吉貴公御譜中ニ在リ

正文在文庫

舊臘廿二日之芳札令披見外、其方參勤時分之儀被相伺、
三月中と最前被 仰出外處、上野御普請御手傳就被 仰
付外、七月中可有參府旨重被 仰出、難有被奉存之由
尤之事外、依之爲御禮被差上使者外付外、示給趣入念儀
存外、委曲家老中可相達外、恐々謹言、

朱力半
元禄十一年 三月二日

薩摩守

網貴御判

松平修理大夫殿

回章

197 全御譜中

正文在文庫

明十五日例月之御禮無之外間、不及登 城候、以上、

朱力半
元禄十一年 三月十四日

小笠原佐渡守(長 惠)

土屋相摸守(政 直)

戸田山城守(忠 思)

阿部豊後守(正 武)

松平薩摩守殿

198 正文在文庫

歳暮之 御内書可相渡外間、明日五時以前、御城江家來
可被差出外、以上、

朱力半
元禄十一年 三月廿五日

阿部豊後守

松平薩摩守殿

199 吉貴公御譜中

正文在文庫

御狀令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、年始御規式相濟外段被承、
恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 高聞候、恐々謹言、

朱力半
元禄十一年 三月十四日

土屋相摸守
政直判

松平修理大夫殿

200 全上

御狀令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、年始之御規式相濟候段被承

之、恐悦旨尤^レ、紙面之趣得其意^レ、恐^レ、謹言、

^{朱力キ}元禄十一年 三月十四日

松平右京大夫
輝貞判

柳澤出羽守
保明判

松平修理大夫殿

201 吉貴公御譜中

正文在文庫

御狀令披見^レ、

公方様益御機嫌能被成御座、正月八日東叡山 御堂 御

參詣之儀被承之、恐悦旨尤^レ、紙面之趣各申談及言上候、

恐^レ、謹言、

^{朱力キ}元禄十一年 三月十八日

土屋相摸守
政直判

松平修理大夫殿

202 全上

御狀令披見^レ、

公方様益御機嫌能被成御座、正月八日東叡山 御堂 御

參詣之儀被承之、恐悦旨尤^レ、紙面之趣得其意^レ、恐^レ、

謹言、

^{朱力キ}元禄十一年 三月十八日

松平右京大夫
輝貞判

柳澤出羽守
保明判

松平修理大夫殿

203 吉貴公御譜中

正文在文庫

御狀令披見^レ、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃山王 御社參之儀被承

之、恐悦旨尤^レ、紙面之趣各申談及言上^レ、恐^レ、謹言、

^{朱力キ}元禄十一年 三月廿五日

土屋相摸守
政直判

松平修理大夫殿

204 御狀令披見^レ、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃山王 御社參之儀被承

之、恐悦旨尤^レ、紙面之趣得其意^レ、恐^レ、謹言、

^{朱力キ}元禄十一年 三月廿五日

松平右京大夫
輝貞判

柳澤出羽守
保明判

松平修理大夫殿

205 吉貴公御譜中

正文在文庫

御狀令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、正月廿四日増上寺 御佛殿

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之通各申談及言上

候、恐々謹言、

朱力キ 元禄十一年 三月廿六日

松平修理大夫殿

土屋相摸守

政直判

207 網貴公御譜中

一筆致啓上候、今度領内之嶋江科人三十九人流罪被仰付外間、於大坂町奉行衆差圖次第請取、國元江可差越之旨被仰渡之段承知仕外、此旨爲可申上如此御座外、恐惶、

朱力キ 元禄十一年 三月廿七日

阿部豊後守様

人々

208 吉貴公御譜中

正文在文庫

御狀令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃護持院被爲 成外儀被

承、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

朱力キ 元禄十一年 三月廿九日 土屋相摸守 政直判

松平修理大夫殿

206 全上

御狀令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、正月廿四日増上寺 御佛殿

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤候、紙面之趣得其意外、恐

々謹言、

朱力キ 元禄十一年 三月廿六日

松平右京大夫

輝貞判

柳澤出羽守

保明判

松平修理大夫殿

209

全上

御狀令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃護持院被爲 成外儀被

承、恐悦旨尤外、紙面之趣得其意外、恐、謹言、
朱力キ
元禄十一年 三月廿九日
松平右京大夫
輝貞判

柳澤出羽守
保明判
松平修理大夫殿

210 綱貴公御譜中

正文在文庫

芳札令披見外、先頃於菟出生付ぬ、爲悦示給、殊目錄之
通被相贈之、欣然之至外、猶期後喜之時外、恐、謹言、

朱力キ
元禄十一年 四月十日
薩摩守
綱貴御判

松平修理大夫殿
回報

参考

綱貴公三女於菟姫松平飛騨守定英ニ嫁セラレ
元禄十一年寅正月十七日誕生トアリ

211 綱貴公御譜中

正文在文庫

御香具品、并御肴一種被獻之外、首尾好遂披露外、恐、

謹言、

朱力キ
元禄十一年 四月十二日
長重判

松平薩摩守殿
小笠原佐渡守
長重

212 正文在文庫

明十五日例月之御禮無之ハ間不及登 城候、以上、

朱力キ
元禄十一年 四月十四日
小笠原佐渡守
(長重)

(政直) 土屋相摸守
(忠昌) 戸田山城守
(正武) 阿部豊後守

松平薩摩守殿

213 吉貴公御譜中

正文在文庫

御狀令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃柳澤出羽守亭被爲 成
外儀被承之、恐悦旨尤候、紙面通各談及言上外、恐、謹

言、

朱力^キ
元禄十一年 四月十九日
小笠原佐渡守
長重判

松平修理大夫殿

214 御狀令披見^レ、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃出羽守亭被爲 成^レ儀

被承、恐悦旨尤^レ、紙面之趣得其意^レ、恐^レ、謹言、

朱力^キ
元禄十一年 四月十九日

松平右京大夫
輝貞判

柳澤出羽守
保明判

松平修理大夫殿

215 吉貴公御譜中

正文在文庫

其方儀當七月中可有參府旨最前雖相達^レ、當八月下旬可

致參勤之由被仰出候、可被存其趣^レ、恐^レ、謹言、

朱力^キ
元禄十一年 四月廿二日

小笠原佐渡守
長重判

土屋相摸守
政直判

戸田山城守
忠昌判

阿部豊後守
正武判

松平修理大夫殿

216 綱貴公御譜中

正文在文庫

今度 (綱吉養女) 八重姫君様就御入興、御屏風五雙被獻^レ、右之

趣各申談及 高聞^レ、恐^レ、謹言、

朱力^キ
元禄十一年 四月廿五日

土屋相摸守
政直判

松平薩摩守殿

217 正文在文庫

明廿八日例月之御禮無^レ之外間不及登 城候、以上、

朱力^キ
元禄十一年 四月廿七日

小笠原佐渡守

土屋相摸守
戸田山城守

阿部豊後守

松平薩摩守殿

218 吉貴公御譜中

正文在文庫

御狀令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃松平右京大夫亭被爲成外儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及言上外、恐々謹言、

^{朱力キ}元禄十一年 四月廿九日

松平修理大夫殿

小笠原佐渡守
長重判

219 全上

御狀令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃右京大夫亭被爲成外儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之通得其意外、恐々謹言、

^{朱力キ}元禄十一年 四月廿九日

松平右京大夫
輝貞判

柳澤出羽守
保明判

松平修理大夫殿

220 綱貴公御譜中

正文在文庫

爲端午之祝儀、帷子單物數十到來歡覺候、委曲小笠原佐

渡守可述外也、

^{朱力キ}元禄十一年 五月三日

薩摩
中將殿



221 吉貴公御譜中

正文在文庫

御狀令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃本庄因幡守亭被爲成外儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之通各申談及言上外、恐々謹言、

^{朱力キ}元禄十一年 五月四日

戸田山城守
忠昌判

松平修理大夫殿

222 全上

御狀令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃本庄因幡守亭被爲成外儀被承之、恐悦旨尤候、紙面之通得其意外、恐々謹言、

^{朱力キ}元禄十一年 五月四日

松平右京大夫
輝貞判

柳澤出羽守
保明判

松平修理大夫殿

223 忠興一流飛驒守惟久譜中
元禄十一年戊寅五月九日

將軍家於三東叡山一修二造

殿有院殿尊靈安在廟堂之外郭一、惟久奉三助役之命一勤一之、

224 吉貴公御譜中

正文在文庫

御狀令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃尾張中納言殿亭被爲

成外儀被承、恐悦旨尤候、紙面之趣各申談及 高聽外、

恐、謹言、

朱力キ
元禄十一年 六月十一日

阿部豊後守
正武判

松平修理大夫殿

御狀令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃尾張中納言殿亭被爲

成外儀被承、恐悦旨尤外、紙面之通得其意外、恐、謹言、

朱力キ
元禄十一年 六月十一日

松平右京大夫
輝貞判

柳澤出羽守
保明判

松平修理大夫殿

226 吉貴公御譜中

正文在文庫

御狀令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃日光御門跡被爲 成外

儀被承之、恐悦旨尤候、紙面之趣得其意外、恐、謹言、

朱力キ
元禄十一年 六月十三日

松平右京大夫
輝貞判

柳澤出羽守
保明判

松平修理大夫殿

227 御狀令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃日光御門跡被爲 成外

儀被承之、恐悦旨尤候、紙面之通各申談及言上外、恐、謹言、

朱力年
元禄十一年 六月十四日

阿部豊後守
正武判

松平修理大夫殿

228 吉貴公御譜中

正文在文庫

御狀令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃護國寺被爲 成外儀被

承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及言上外、恐、謹言、

朱力年
元禄十一年 六月十六日

阿部豊後守
正武判

松平修理大夫殿

229 全上

御狀令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃護國寺被爲 成外儀被

承之、恐悦旨尤外、紙面之趣得其意外、恐、謹言、

朱力年
元禄十一年 六月十六日

松平右京大夫
輝貞判

柳澤出羽守
保明判

松平修理大夫殿

230 吉貴公御譜中

正文在文庫

御狀令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃増上寺被爲 成外儀被

承、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 高聞外、恐、謹言、

朱力年
元禄十一年 六月十九日

阿部豊後守
正武判

松平修理大夫殿

231 全上

御狀令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃増上寺被爲 成外儀被

承之、恐悦旨尤候、紙面之趣得其意外、恐、謹言、

朱力年
元禄十一年 六月十九日

松平右京大夫
輝貞判

柳澤出羽守
保明判

松平修理大夫殿

正文在文庫

御狀令披見_レ、

公方様益御機嫌能被成御座、四月廿日東叡山 御堂、同

五日觀音堂 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤候、兩通紙面

之趣各申談及 高聽_レ、恐、謹言、

朱力キ
元禄十一年 六月廿一日

阿部豊後守
正武判

松平修理大夫殿

公方様益御機嫌能被成御座、四月廿日東叡山 御堂、同

廿五日觀音堂 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤候、兩通紙

面之趣得其意候、恐、謹言、

朱力キ
元禄十二年 六月廿一日

松平右京大夫
輝貞判

柳澤出羽守
保明判

松平修理大夫殿

御狀令披見_レ、

(綱吉深女)
喜知姫様

御城江被爲入_レ儀被承之、目出度被存由得其

意_レ、依之被差越使者_レ紙面之趣、各申談及 高聞_レ、

朱力キ
元禄十一年 六月廿二日

阿部豊後守
正武判

松平修理大夫殿

御狀令披見_レ、

公方様益御機嫌能被成御座恐悦旨尤_レ、將又四月朔日

喜知姫様 御城江被爲入_レ儀被承目出度被存由、紙面之

趣得其意_レ、恐、謹言、

朱力キ
元禄十一年 六月廿二日

松平右京大夫
輝貞判

柳澤出羽守
保明判

松平修理大夫殿

正文在文庫

琉球布十卷・砂糖漬天門冬一器・泡盛酒二壺并御看一種

被獻之候、首尾好遂披露外、恐、謹言、

朱力半
元禄十一年 六月廿二日

正武判

松平薩摩守殿

阿部豊後守
正武

237

網貴公御譜中

正文在文庫

明後廿五日御能被 仰付外間、可致見物旨 上意外、被
存其趣五半時可有登 城外、以上、

朱力半
元禄十一年 六月廿三日

小笠原佐渡守

土屋相摸守

阿部豊後守

松平薩摩守殿

238

吉貴公御譜中

正文在文庫

貴翰致拜見外、甚暑之節御座外得共 (續吉生母) 桂昌院様弥御安泰

御事御座外、土用中御機嫌御窺被成外付外、入御念被仰

聞外趣致承知外、猶期後音之時外、恐惶謹言、

朱力半
元禄十一年 六月廿三日

本庄因幡守
宗資判

松平修理大夫様

貴報

239

吉貴公御譜中

正文在文庫

御狀令披見外、就土用中

公方様御機嫌之御様躰以使者被相伺之外、益御勇健御事
外間可御心安候、隨外御看一種被獻之外、各申談首尾好
遂披露外、恐、謹言、

朱力半
元禄十一年 六月廿七日

阿部豊後守

正武判

松平修理大夫殿

240

全上

御狀令披見外、就土用中

公方様御機嫌之御様躰被相伺之外、益御勇健之御事外間、
可被 心安外、紙面之趣得其意外、恐、謹言、

朱力半
元禄十一年 六月廿八日

松平右京大夫

輝貞判

柳澤出羽守

保明判

松平修理大夫殿

241 吉貴公御譜中

元祿十一年戊寅七月十日吉貴發廳府、取陸而至薩州阿久根、同月十八日開三船於阿久根、家老島津勘解由久當、用人仁禮覺左衛門景治・堀四郎右衛門與昌等扈從也、八月十三日著三船大坂、同十五日至伏見、同晦日參府是行吉貴在途中不予也因以參觀遊、滯鄂久於江府而稟之、九月十五日吉貴以三職禮之事一

奉見、大樹綱吉公、幣物獻品同于先規也、先是將軍家許于父綱貴之訴、而同月二十八日久當奉謁幕府、是故雖吉貴未受家督、每參府使扈從之家老一謁于大樹、乃備當家之格式也、

242 吉貴公御譜中

正文在文庫

貴札致拜見外、雖甚暑之節外

公方樣益御勇健被成御座恐悅思召之旨、土用中猶以為御機嫌御伺、老中迄以御使札就被相達、預示之趣得其意存外、恐惶謹言、

朱力キ
元祿十一年 七月十一日

本多伯耆守
正永判

松平修理大夫様

貴報

243 吉貴公御譜中

正文在文庫

御狀令披見外、

公方樣益御機嫌能被成御座、五月八日東叡山 御堂 御參詣之儀被承、恐悅旨尤外、紙面通各申談及言上外、恐、謹言、

朱力キ
元祿十一年 七月十四日

土屋相摸守
政直判

松平修理大夫殿

244 全上

御狀令披見外、

公方樣益御機嫌能被成御座、五月八日東叡山 御堂 御參詣之儀被承之、恐悅旨尤外、紙面之趣得其意外、恐、謹言、

朱力キ
元祿十一年 七月十四日

松平右京大夫
輝貞判
柳澤出羽守
保明判

松平修理大夫殿

245 綱貴公御譜中

正文在文庫

一筆令啓外、七夕之祝儀、且又爲生身靈祝詞、目錄之通銘、被相饋之、欣然之至外、爲謝禮如斯外、恐、謹言、

朱力キ

元禄十一年 七月十八日

薩摩守

綱貴御判

松平修理大夫殿

御宿所

246 綱貴公御譜中

正文在文庫

端午之 御内書可相渡候間、明日五時 御城江家來可被差出外、以上、

朱力キ

元禄十一年 七月廿日

(良) 惠
小笠原佐渡守

松平薩摩守殿

247 全上

同年七月二十一日、東叡山本堂落成、是故綱貴畢三助役之功也、

248 吉貴公御譜中 此御書綱貴公御譜中ニ無之

正文在文庫

一筆啓上仕候、七夕之爲御祝儀御目錄之表被下置之、幾久忝次第奉存外、右之御禮爲可申上如斯御座外、猶奉期後喜之時外、誠惶誠恐敬白、

朱力キ

元禄十一年 七月廿一日

松平修理大夫

吉貴御判

進上 中將様

正文在文庫

(表紙)

綱貴公

吉貴公

自元禄十一年八月
至同十二年五月

追
録
舊
記
雜
録
卷二十四

綱貴公御譜中

正文在文庫

御用之儀外間、明二日四時可有登城候、以上、

朱力キ

元禄十一年
八月朔日

小笠原佐渡守(長重)

土屋相摸守(政忠)

戸田山城守(忠昌)

阿部豊後守(正武)

松平薩摩守殿

別紙書付之家來明三日四時 御城江可被差出外、以上、

朱力キ

元禄十一年
八月二日

松平薩摩守殿

正文在文庫

小笠原佐渡守

土屋相摸守

戸田山城守

阿部豊後守

彌寝丹波(蒲世)

嶋津大藏(久明)

北郷惣次郎(久惠)

市來次郎左衛門(家賢)

村田善太夫(経智)

伊集院猪右衛門(久芝)

相良清兵衛(頼忠)

北郷右衛門八(久治)

宮之原甚五太夫(重行)

家村平八(在賢)

三雲新兵衛(定恒)

赤松甚右衛門(則茂)

全上

以上

白尾登(國憲)五右衛門
村田九郎(經武)左衛門

同年八月二日、元老小笠原佐渡守長重・土屋相摸守政直・戸田山城守忠昌・阿部豐後守正武以奉書召綱貴於營、賞本堂助役之功、

大樹綱吉公手自賜長光御腰物代金五、十枚、乃奉謝恩齊之辱而出營也、翌三日元老又下奉書、召家臣彌寢丹波

清雄・島津大藏久明・北郷宗次郎久嘉・市來次郎左衛門家賢・村田善太夫經智・伊集院猪右衛門久芬・相良清兵衛賴庸・北郷右衛門八久治・宮之原甚五太夫重行・家村平八住賢・三雲新兵衛定恒・赤松甚右衛門則茂・白尾登

五右衛門國嘉・村田九郎左衛門經武等於營、是故各拜伏檜間、小笠原佐渡守長重述台命、而賞綱貴

本堂經營之事、勞之賜白銀五十枚・時服六于清雄・久明、同二十枚・時服四于久嘉・家賢・經智、同十枚・時服二于久芬・賴庸・久治・重行・住賢・定恒・則茂・國嘉・經武等、謹而頂戴之、奉拜謝恩遇之渥也、

吉貴公御譜中
正文在文庫

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被獻之外、首尾好遂披露候、恐謹言、

朱力半
元祿十一年 八月三日

小笠原佐渡守 長重判
土屋相摸守 政直判
戸田山城守 忠昌判
阿部豐後守 正武判

松平修理大夫殿(吉貴)

綱貴公御譜中

覺

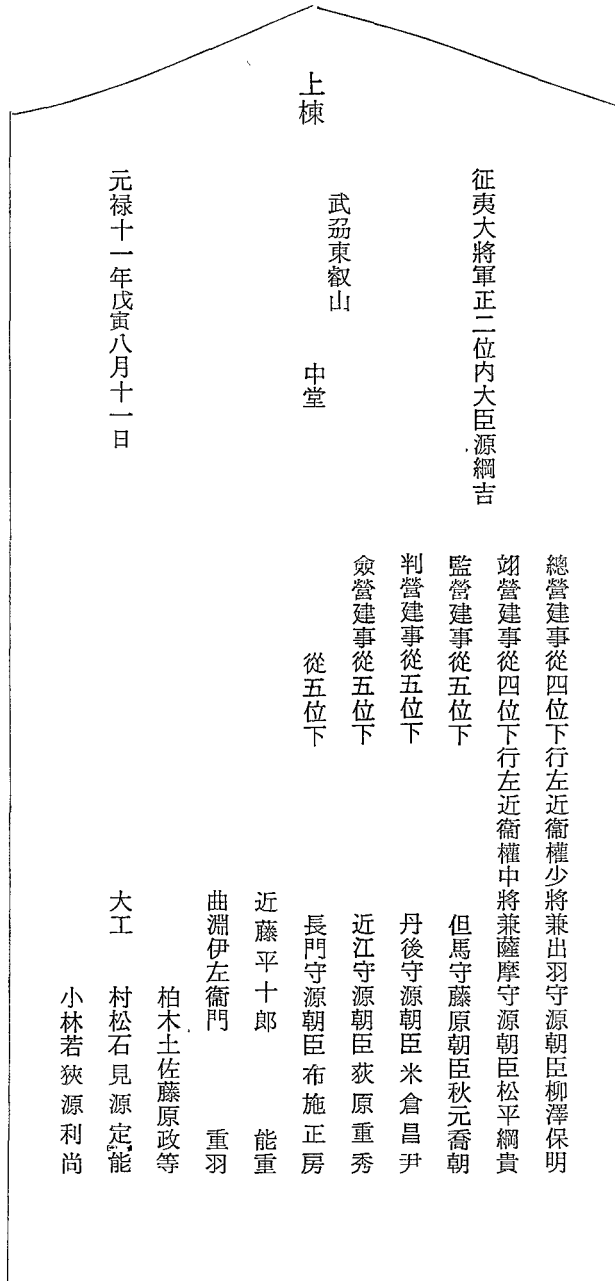
今度上野御普請御手傳被成御勤付付、何れ表首尾能相勤、御城口被召出、拜領物被仰付、且又從中將樣御褒美被下置、就夫難有奉存、自分祝をも仕度可存、兼、祝事付、被仰出置、譯表有之外得共、此節之儀、各別之事、問、身上不相應、無之樣親類無據人迄、心祝可仕、其外之人、ハ祝等仕儀無用、御免

之人に祝仕り共、重ク取立度之祝者無用ニ仕、難有奉
存り心底こゝる一度ニ輕ク祝ひる相濟り様可相心得り、此
段御手傳方相勤り人々、今日被 仰出り越承り面々よ

り申聞、可然之旨 御意り條、可奉承知り、以上、
朱力年
元禄十一年 八月九日

全御譜中

同年八月十一日、東叡山中堂上棟也、因上棟文見于左一、



綱貴公御譜中

正文在文庫

一筆啓上仕候、弥御勇健可被成御座跡重奉存外、然者爲
八朔之御祝儀、御目錄之通被下置之、幾久忝次第奉存外、
右之御禮爲可申上如斯御座外、猶奉期後喜時候、誠惶誠

257

吉貴公御譜中

大檀主征夷大將軍正二位内大臣源綱吉公

聖主大中天

迎陵頻伽聲



武藏國豐島郡東叡山寛永寺中堂建立元禄十一年戊寅八月十一日奉行同前

哀啓衆生者

我等今敬禮

大願主當山第五世天台座主一品公辨親王

恐敬白、

八月十三日

進上
中將樣 (綱世)

松平修理大夫

吉貴御判

正文在文庫

御狀令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座恐悦旨尤外、然者六月十三日

(綱吉孫女) 八重姫君様、水戸少將殿江

(吉季) 御入與相濟候之段被承之、目

出度被存由得其意外、依之被差越使者外、紙面之趣各申

談及 上聞外、恐、謹言、

朱力半 元禄十一年

八月十八日

小笠原佐渡守

長重判

松平修理大夫殿

全上

御狀令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座恐悦旨尤外、然者六月十三日

八重姫君様水戸少將殿江 御入與相濟外段被承、目出度

被存由、紙面之趣得其意外、恐、謹言、

朱力半 元禄十一年

八月十八日

松平右京大夫

輝貞判

柳澤出羽守

保明判

松平修理大夫殿

全上

御狀令披見外、

喜知姫君様御逝去段被承之、被絶言語之由得其意外、依

(綱吉孫女) 之被差越使者外、紙面之趣各申談及言上外、恐、謹言、

朱力半 元禄十一年 八月十九日

小笠原佐渡守 長重判

松平修理大夫殿

260

全上

御狀令披見外、 喜知姫君様御逝去段被承之、被絶言語

之由得其意外、紙面之趣承届外、恐、謹言、

朱力半 元禄十一年 八月十九日

松平右京大夫 輝貞判

柳澤出羽守 保明判

松平修理大夫殿

261

吉貫公御譜中

正文在文庫

御狀令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又其方儀、

爲參府先月初在所出船之處、日和悪其上病氣付る、去十

三日漸大坂迄參着之由得其意外、依之被差越使者外、委

細紙面之趣各一覽之事外、恐、謹言、

朱力キ
元禄十一年 八月廿二日 小笠原佐渡守 長重判

松平修理大夫殿

262 全上

御狀令披見外、

公方様御機嫌之御様躰、以使者被相同之外、益御勇健御事外間可御心安外、隨而御着一種被獻之外、各申談首尾好遂披露外、恐、謹言、

朱力キ
元禄十一年 八月廿二日 小笠原佐渡守 長重判

松平修理大夫殿

263 吉貴公御譜中

正文在文庫

御狀令披見外、

公方様御機嫌之御様躰被相同之外、益御勇健御事外間可御心安外、紙面之趣得其意外、恐、謹言、

朱力キ
元禄十一年 八月廿三日 松平右京大夫 輝貞判

柳澤出羽守

保明判

松平修理大夫殿

264 吉貴公御譜中

正文在文庫

御狀令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又同氏薩摩(網貫)守東叡山御普請御手傳相勤付る、去二日

御前江被召出、御懇之上意、其上御腰物拜領難有由得其意外、依之爲御禮被差越使者外、紙面之趣各申談及高聞外、恐、謹言、

朱力キ
元禄十一年 八月廿七日 小笠原佐渡守 長重判

松平修理大夫殿

265 御狀令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又同氏薩摩守東叡山御普請御手傳相勤付る、去二日 御前江被召出、御懇之上意、其上御腰物拜領之難有之由、紙面之趣申届外、恐、謹言、

朱力キ
元禄十二年
八月廿七日

松平右京大夫
輝貞判

柳澤出羽守
保明判

松平修理大夫殿

266 綱貴公御譜中

正文在文庫

一筆奉啓上候、

尊體公益御機嫌能被遊御座、上野御普請首尾能御成就之處、御腰物御拜領被遊候由奉承達、恐悅奉存候、御祝儀爲可申上奉呈愚札候、誠惶誠恐敬白、

朱力キ
元禄十一年
九月朔日

島津兵庫
久住判

進上 中將様

267 綱貴公御譜中

同年九月五日以上使阿部豊後守正武、賜告於綱貴一

先是以每年四月、爲二交替之期一、雖レ然去年以來有二東叡山助役之事一因今度所レ賜レ告也、恩賜品如二先規一、其後

登レ營而奉レ禮三謝之一、忝賜二御馬一匹一、

268 綱貴公御譜中

正文在文庫

朱印

眼睛突出煥天下換骨靈方脫體雄觀面投機超佛祖一枝如意
讀心宗、

元禄戊寅十一年中秋念九日

達磨大師四十四世正傳淨住開山七十一翁鐵牛機

手書於弘福方丈

付囑 朱イ 朱イ

左中將薩隅日三州太守

源綱貴 法名

大玄院殿昌道元新大居士

269 正文在文庫

爲重陽之祝儀、小袖五到來歡覺候、委曲戸田山城守可述
外也、

朱力キ
元禄十一年
九月七日

綱吉
墨印

薩摩中將殿

270 綱貴公御譜中

芳札令披見外、其地弥平安之旨珍重之事外、我等儀無恙令在府外間、可易芳慮外、然者唐繪四枚・石東方形一鉢・

縮布三端饋給、懇意之至外、恐惶不宣、

朱力キ
元禄十一年 九月十日 中將 綱貴御判

琉球國司

回答

273 全上

如芳札娘出生外付而、爲祝儀目錄之通到來、欣然之至外、恐、不宣、

朱力キ
元禄十一年 九月十日 中將 綱貴御判

回復 中城王子

274 全上

爲當年之賀儀、芳翰殊被任恒例目錄之通被相贈之、過量之至存外、猶期後喜之時外、恐、不宣、

朱力キ
元禄十一年 九月十日 中將 綱貴御判

回復 中城王子

271 全上

爲今年之祝詞被差渡使翰、殊被準佳例數品贈給之、欣然之至存外、猶期後喜之時外、恐惶不宣、

朱力キ
元禄十一年 九月十日 中將 綱貴御判

謹上 琉球國司

275 吉貴公御譜中

芳簡令披見外、當正月妹誕生之儀相聞、爲祝儀目錄之通贈給之、入念外之段忻然之至外、恐惶不宣、

朱力キ
元禄十一年 九月十日 侍從 吉貴御判

謹上 琉球國司

272 全上

芳翰令披閱外、娘出生之儀相達、爲祝儀目錄之通被相贈之、令祝着外、恐惶不宣、

朱力キ
元禄十一年 九月十日 中將 綱貴御判

謹上 琉球國司

276 全上

卷24

爲今年之嘉儀、被差渡使簡、殊被任恒例目錄之通贈給之、
入念外段令欣悦外、猶期後音時外、恐惶不宣、

朱力キ
元禄十一年 九月十日 侍從吉貴御判

謹上 琉球國司

277 吉貴公御譜中

正文在文庫

明十五日五時登

城參勤之御禮可被申上外、以上、

朱力キ
元禄十一年 九月十四日

小笠原佐渡守

土屋相摸守

戸田山城守

阿部豊後守

松平修理大夫殿

278 網貴公御譜中 此御書一通共吉貴公御譜中ニ無之

正文在文庫

一筆啓上仕候、爲重陽之御祝儀御目錄之通被下置、幾久
拜受仕忝次第奉存外、右之御禮爲可申上如斯御座外、猶

期後喜之時候、誠惶誠恐敬白、

朱力キ
元禄十一年 九月廿一日 松平修理大夫 吉貴御判

279 正文在文庫

一筆啓上仕候、爲重陽之御祝儀、御目錄之通被下置、幾
久拜受仕忝次第奉存外、右之御禮爲可申上如斯御座外、
猶奉期後喜之時候、誠惶誠恐敬白、

九月廿一日

松平修理大夫

吉貴御判

進上 中將様

280 網貴公御譜中

追弼申入り、近日伏見へ御着之節可得貴意外、以上、
一書致啓達候、去五日首尾能御暇被遣、近、御歸國之由
承珎重存外、然者先頃交野權佐令參府外處、種、御馳走、
逗留中御家來餘多被附置、萬端無滞 公用相勸上京仕、
委致承知御懇情之段雖申謝外、殊不慮之出火之節、被添
貴意外故、首尾無殘所大悦仕外事外、右御禮爲可申述如
斯候、恐惶謹言、

朱力キ
元禄十一年 九月廿三日

平松中納言

シレス

松平薩摩守様

281 全上

正文在文庫

其方家來嶋津勘解由儀、(久造)明廿八日五時 御城に可被差出

外、以上、

朱カキ元禄十一年 九月廿七日

小笠原佐渡守

土屋相摸守

戸田山城守

阿部豊後守

松平薩摩守殿

282 全御譜中

同年九月晦日、綱貴發江戸歸國、家老喜入安房久亮、用

人村田善太夫經智・市來次郎左衛門家賢從レ駕也、十月

十三日到_三著伏見_一、同十五日下午_三大坂_一、同十九日發_レ船、

十一月七日著_三船日州細島_一、津_一、從_レ是取_レ陸、同月十五日

入_三鷹城_一、乃馳桂宇右衛門久祐江府、奉_レ謝_三賜_レ告今日

入州之忝_一、獻品如_レ例、久祐亦獻_三上御太刀・銀馬代・

時服_三、奉_レ謁_二

將軍家_一、且拜_三賜時服_三・御羽織_一、

283 綱貴公御譜中

兩通之芳札令披見_レ、中將様_一爲年始御祝儀、練蕉布

十端進上_レ、東叡山中堂御普請御手傳首尾能御成就_レ、

爲御祝儀、練蕉布三端、燒酎一壺進獻_レ之外旨遂披露_レ處、

御喜悅之御事_レ、恐_レ謹言、

朱カキ元禄十一年 十月六日

肝付主殿

久兼判

喜入安房

久亮判

新納美作

久珍判

嶋津中務

久輝判

嶋津圖書

久洪判

伊野波親方(盛平)

281 綱貴公御譜中

寫

去年於琉球、船頭水手之者共、密_レ鯨糞買取_レ由風聞_レ、然處當度長崎_一、御當國之者共、鯨糞六拾斤程致陸賣

由、頃日長崎より申來り、右通過分之致隠買り儀ハ、
琉球にて風聞有之儀ニ得者、其砌急度致沙汰、實否
於被申出ニ者、被仰付様有之事外、他國へ密々拔出
外段別る不可然外、右隠買之者共極る未相知りニ付、内
々御聞せ御沙汰有之筈ニ付間、於琉球々稠敷衆議申付、
究り趣來春便ニ可被申出外、若買取り御當國之者ハ相知、
琉球方へ御糺ニ成立り者、琉球ニ由之糺大方之様ニ可有
之外條、右之趣可申渡旨御差圖ニ由り、以上、

宋力年
元禄十一年 十月朔日

285 右之通伊地知八右衛門 取次ニ由 近江殿方(新納久辰)に被仰渡りニ
付、此旨拙者方可申越出、近江殿任差圖申越外、於其許
實否御糺、來春便へ御一左右可被仰越外、以上、

宋力年
元禄十一年 十月十七日

川村少左衛門

北谷按司様(明愛)

仲田親方様(明重)

伊野波親方様(盛平)

覺

諸國一統ニ古金銀吹替被 仰付、新金銀通用之筈ニ被
仰渡り、依之琉球より渡唐銀之儀々、新銀を被差渡筈ニ
得共、來年三月迄ハ古銀仕御免許之儀ニ得者、當年
迄ハ古銀を被差渡り、以後者古銀仕一向不能成筈ニ付、
然者琉球より渡唐銀々古銀被差渡儀、往々者罷成間敷事
ニ付間、新銀を不被差渡りる不叶儀ニ付、長崎口よりハ
去年新金を爲被差渡之由り得共、琉球方よりハ未新金銀
不相渡り、後年惣様新銀を被差渡、御買物之故障有之外
得者、御爲ニ者不能成、且琉球方勝手ニ者不宜儀ニ付間、
先爲試當年渡唐銀之内ニ、新銀を少々相加被差渡り間、
惣様此通之新銀ニ相改り通、渡唐之琉球人より於唐得と
申達、唐人共致落着、縦位下りニハ罷成り共、唐人方は
無儀請取り様ニ、何とそ申達り儀專一ニ付、且又諸國
皆同ニ新銀ニ被相改り處、御當國より之渡唐銀之儀者、
往々共ニ古銀を被差渡り、御才覺者可相調事之様ニ琉球
方ニ由者存儀々可有之外得共、古金銀通用一向御禁止ニ
被仰渡り上者、古銀之御才覺者難成筈ニ付、此等之段於
琉球、北谷按司三司官中致納得、渡唐之人は右之旨趣能
々申含差渡り様琉球へ可被申越外、以上、

宋^{ナカキ}元禄十一年 寅十月十六日

肝付主殿

種子嶋藏人

新納四郎左衛門

鳴津助之丞

鳴津中務

鳴津圖書

新納近江殿

網貴公御譜中

覺

一 去年丑七月十四日、八重山嶋之内石墻島川平に、何國之者共不相知吳國船致漂着、不意之働有之、吳國人拾人皆共相果由被申越、於江戸 中將様方御老中様方に被仰入、長崎御奉行に我々共方申上り處、首尾能相濟、其趣委細書中ニ相達り、右吳國人與風地下之者を切付理不盡ニ切懸り得者、無是非事ニ候得共、吳國人拾人不殘打果り儀者如何り處、不及御口能幸之儀り、萬一以後右躰之儀有之、地下人之仕形狼籍又ハ船中荷物なと有之、地下之者共爲致海賊儀ニ及り哉と御疑相立、及御穿鑿候ハ、依時宜在番之儀者不及申、嶋中

之者共可及曲事之間、自今以後別る入念り様被申付可爲專要事、

一 吳國人岩間に籠居、鑓刀之様成物を構、於船中及右之道具手を不相離、爲致用心由り得共、纔拾人之事何程之儀可有之哉、此方にも相應ニ人數を寄置見合りハ、如何様吳國船致出帆り歟、又ハ及飢食物等望之様子も候者、其節飯米水薪等爲取、日和次第爲致出帆可然事り處、此方り押り出帆を相催、陸に罷在り者ハ船に爲乘之、船に有之り者ハ陸に不揚様ニ、強り致差引り故、吳國人心得惡鋪、楚忽ニ事を破、地下之者共及無是非相働り様ニ成立、近比無調法之事り、早竟最前り事、敷多人數を集、海邊ニ及小船共數艘致用意り由、此段吳國人不存様爲致格護由ニ候得共、自然吳國人共右之様子を見及、最早被打果儀と相心得、不意之致働り哉と無心元り、此段在番人を始役、之者共差引不宜存り、惣り漂着船之儀爲可避風難り得者、對其所あたをなしり儀ハ無之筈り間、地下方も其心得を以吳國人不致氣遣様ニ令挨拶、兼り申渡置り様番之者等付置、若此方より申付り儀不致承引令氣任りハ、不相構躰ニて幾日及見合、吳國船致出帆りハ、小船壹艘差出、

行先見届可申外、吳國人及飢出船難成外ハ、其様子可相知外間、相應ニ飯米・薪等爲取之可爲致出船、尤馳走ケ間鋪儀可爲無用、勿論於破船者不及飢様申付、人數・荷物等如那霸差越外様可被申付事、

一右石墻嶋江漂着吳國人仕合之儀、爰元江先達事、敷申觸、吳國人死躰塩詰ニ被指越外由風説有之不可然外、右躰之儀者、其許方之書付寫、得と相しらへ、江戸・長崎江中上事外へ者、急ニ者難調少、遲滞之儀も候處ニ、其内若他方江風聞有之、此方申上外儀、延引之様ニ表可罷成と別而氣之毒外、向後吳國船漂着之儀者、在番人江被申談、脇々江不相知様ニ相心得、使者江表脇々ニ不致沙汰様ニ被申付、御左右可有之外、右之風説者歸帆之船頭・水手共申散事外間、可被得其意事、

右之段、被得其意、嶋々江堅固可被申渡者也、

元禄十一年寅十月十八日

肝付 主殿

種子嶋藏人

新納四郎左衛門

嶋津助之丞

島津 中務
嶋津 圖書

北谷按司
三司官

288

綱貴公御譜中

一筆致啓上候、

公方様益御勇健被成御座、恐悦奉存外、猶以寒中爲可奉伺御機嫌差上使者外、依之御羽織五井御肴一種獻上仕外、可然様ニ御差圖奉廻外、恐惶、

朱力年

元禄十一年 十月廿一日

289

今御譜中

覺

今度之金銀吹替、從

公義被 仰付御事外故、往々迄古銀渡唐候儀者可難成外、

然處琉球口より新銀いまた少不被差渡外付、此節新

銀少、可被相渡との儀以來故障無之様ニ可被相調趣、御

覺書を以被 仰渡通ニ外間、當年渡唐之人江被申合之、

新銀持渡以來之支無之筋ニ有之可然外、此等之旨各被得

其意、具可被申渡^レ、爲其御覺書之寫壹通差越之候、以
上、

^{朱力キ}元禄十一年 十月廿一日
新納近江^(久殿)

北谷按司
三司官

290 全御譜中

一筆致啓上候、

公方様益御機嫌能被成御座旨、恐悦奉存^レ、然若私領櫻
嶋蜜柑二箱并御肴一種獻上仕^レ間、可然様御差圖奉頼^レ、
恐惶、

^{朱力キ}元禄十一年 十一月廿六日

291 綱貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見^レ、

公方様御機嫌之御様躰被相伺之^レ、益御勇健御儀^レ間、
可御心安^レ、隨^レ御肴一種被獻之候、各申談首尾能遂披
露^レ、恐、謹言、

^{朱力キ}元禄十一年 十一月二日
小笠原佐渡守
長重判

292 正文在文庫

御札令披見^レ、

公方様御機嫌之御様躰被相伺之^レ、益御勇健之御事^レ間、
可御心安^レ、隨^レ御肴一種被獻之^レ、各申談首尾好遂披
露候、恐、謹言、

^{朱力キ}元禄十一年 十一月十日
土屋相摸守
政直判

松平薩摩守殿

293 正文在文庫

御札令披見^レ、

公方様御機嫌之御様躰被相伺之^レ、益御勇健之御事^レ
間、可御心安^レ、隨^レ御肴一種被獻之^レ、紙面之通得其
意^レ、恐、謹言、

^{朱力キ}元禄十一年 十一月十一日
松平右京大夫
輝貞判

柳澤出羽守
保明判

松平薩摩守殿

全御譜中

一筆致啓上候、

公方様益御機嫌能被成御座旨、恐悅奉存_レ、然者私儀今度首尾能御暇被_レ 仰出、白銀・御拾拜領、其上御馬被下之、雖有仕合奉存_レ、國許に到着仕_レ付_レ、御禮爲可申上、使者桂宇右衛門と申者差上申_レ、因茲目錄之通獻上仕度(久也)御座_レ間、可然様御差圖所仰御座_レ、恐惶、

朱力_ナ
元禄十一年 十一月十五日

阿部豊後守様

戸田山城守様

土屋相摸守様

小笠原佐渡守様

人々

桂織部久祐譜中

元禄十一年十一月十五日、久祐勤_二 綱貴公著城之御禮

使_一、赴于江府、翌年正月十五日奉謁

將軍家、獻品拜賚如恒例、

綱貴公御譜中

一筆致啓上候、

公方様益御機嫌能被成御座旨、恐悅奉存_レ、然者私儀今度首尾好御暇被_レ 仰出、白銀・御拾拜領、其上御馬被下之、雖有仕合奉存_レ、國許に到着仕_レ付_レ、御禮爲可申上、使者桂宇右衛門と申者差上申_レ、因茲目錄之通獻上仕_レ間、如斯御座_レ、恐惶、

朱力_ナ
元禄十一年 十一月十五日

柳澤出羽守様

松平右京大夫様

全上

一筆致啓達_レ、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悅奉存_レ、次貴様弥可爲御堅固珍重存_レ、私儀今度首尾能被下御暇、雖有仕合奉存_レ、先達_レ申入_レ通、御在所に參着申_レ節、兼_レ被仰付置之由_二、從御家來衆被申聞_レ趣も有之、且又中途迄服部半藏爲御使者被罷出、段々被入御念儀忝存_レ、海陸無_レ儀國許へ致到着_レ付_レ、右御禮爲可申入如斯御座_レ、恐惶、

朱カキ
元禄十一年 十一月十五日

(松山城主 定重)
松平越中守様
人々

全上 此御書吉貴公御譜中ニ在リ

一筆令啓_リ、其方弥無_一門中別條有間敷鋪と称重存_リ、
我等事海陸無恙今日致着城_リ、依之爲御禮使桂宇右衛門
方差上_リ、其許之儀宜有差圖_リ、恐_レ、

朱カキ
元禄十一年 十一月十五日

松平修理大夫殿

299 綱貴公譜中

一筆令啓達_リ、琉球八重山嶋之内に致漂着_リ異國人之儀
こ付、先頃家老共より申上趣御座_リ處、江戸に被相伺、
其許に差遣_リ家來之者に、委曲被仰間旨致承知_リ、首尾
能被仰渡置儀存_リ、右之段中山王に表可申越_リ、爲御禮
如此御座_リ、恐惶、

朱カキ
元禄十一年 十一月廿一日

(用舊)
近藤備中守様
人々

300 全上

一筆致啓上_リ、重陽之 御内書頂戴仕_リ節、家來之者に
御時服二拜領之仕、寔に忝次第奉存_リ、御禮爲可申上如
斯御座_リ、恐惶、

朱カキ
元禄十一年 十一月廿二日

戸田山城守様
人々

301 全上

去夏琉球八重山嶋之内に致漂着_リ吳國人之儀付_ル、先頃從
家來共長崎奉行衆に申上趣御座_リ處、其御地に被相伺、
首尾能被 仰渡之旨承知仕、忝次第奉存_リ、右旨中山王
に表可申越_リ、此段申上_リ、以上、

朱カキ
元禄十一年 十一月廿六日

宛ナシ

302 全上

一筆致啓上_リ、去夏琉球八重山嶋之内に致漂着_リ吳國人之
儀付_ル、先頃從家來共長崎奉行衆に申上趣御座_リ處に、

其御地に被相伺、首尾能被仰渡之旨承知仕、忝次第奉参候、右之旨中山王に表可申越外、此段爲可申上如斯御座

外、恐惶、

朱力キ
元禄十一年 十一月廿六日

小笠原佐渡守様

人、

全上

一筆致啓上外、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦奉存外、然者來年私参勤時分之儀、爲可奉伺之各様迄以使者申上外、可然様御

差圖奉頼外、恐惶、

朱力キ
元禄十一年 十一月廿六日

阿部豊後守様

戸田山城守様

土屋相摸守様

小笠原佐渡守様

人、

全上

一筆致啓上外、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦奉存外、然者來年私参勤時分之儀、爲可奉伺之、以使者申上外間、如斯御座外、恐惶、

朱力キ
元禄十一年 十一月廿六日

柳澤出羽守様

松平右京大夫様

人、

全御譜中

一筆致啓上候、

公方様益御勇健被御座、(成脱カ)去月廿七日増上寺に御成、御機嫌能還御旨承知仕、恐悦奉存外、此段爲可申上捧飛札

外、恐惶、

朱力キ
元禄十一年 十一月廿七日

全御譜中 此御書吉貴公御譜中に在リ

おいよ殿永、病氣之處、養生不相叶、遠去之段笑止之至外、依之預芳札入念事外、恐々、

朱力キ
元禄十一年 十一月晦日

松平修理大夫殿

307 全上

御札致拜見外、如仰

公方様益御勇健被成御座、先頃東叡山中堂江被遊御參詣、
敕會御供養首尾好相濟、御機嫌能

還御、恐悦御同然奉存外、御普譜中無恙相仕廻、拙者大
悦之段御察之通外、右爲御悦預示被入御念之段忝存外、

恐惶、

朱力キ
元禄十一年 十二月四日

松平出羽守様

御報

308 全上

口上覺

來朝之南京唐船一艘、唐人三拾七人乘、私領内七嶋之内
寶嶋江九月十一日卸碇外、彼地之儀者湊無之、長、船を
繫置外儀難成、當國之地江送越外儀も順風無之時分之故、
唐人共江相對之上、同十四日琉球之内大嶋と申所迄、案

内相付差越申外旨、在番之者共申越外、大嶋致出帆外ハ
、其旨從琉球可申越外、先此段申上外、右之趣長崎奉
行衆江及申越外、以上、

朱力キ
元禄十一年 十二月四日

309 全上

(御用細條様女)

一筆致啓上外、今度方姫様御縁組、細川與市郎殿江被
仰出旨承知仕、目出度御儀奉存外、御祝儀爲可申上、以

使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩并目録之通致進上之外、
此旨宜預披達外、恐々、

朱力キ
元禄十一年 十二月六日

中山備前殿
(備感)

310

一筆令啓達外、先頃御在所大地震ニ破損之所有之由、
不意之儀奉存外、爲御見舞如此御座外、恐惶、

朱力キ
元禄十一年 十二月六日

松平對馬守様
(近願)

正文在文庫

貴札致拜見_レ、甚寒之節弥御堅固、珍重奉存_レ、隨_レ爲御音問、御着_一種被懸御意忝次第御座_レ、恐惶謹言、

朱力キ
元禄十一年 十二月九日

柳澤出羽守

保明判

松平薩摩守様

御報

去三日之尊書拜見仕候、然者來朝之南京出唐船壹艘、御領内七嶋之内寶嶋_(大島郡)江、九月十一日致漂着、碇を卸申_レ處、彼地湊無之_レ故、案内之衆相添、琉球之内大嶋と申所_レ送遣_レ由、從在番中被及注進_レ旨、依之委細自御家來中被申越_レ之趣表致承知_レ、右唐船其元到着次第、例之通警固御添、以挽船早、常津江可被送遣_レ、恐惶謹言、

朱力キ
元禄十一年 十二月十二日

丹羽遠江守

長守判

近藤備中守

用高判

松平薩摩守様

参費報

御札令披見_レ、

公方様御勇健被成御座、恐悅旨尤_レ、隨_レ蜜柑二箱并御着_一種被獻之_レ、各申談遂披露候、恐、謹言、

朱力キ
元禄十一年 十二月十八日

小笠原佐渡守

長重判

松平薩摩守殿

口上覺

朝鮮國之船一艘、人數五拾四人乘、領國屋久嶋一湊と中_(領七郡)所江、今月八日致漂着_レ、從本國爲商賣十一月廿三日出船候處ニ、逢難風致漂來_レ、洋中數日漂流_レ付_レ、及飢餓_レ由、依之朝鮮人より望之儀表有之、于今彼地江滯船_レ付_レ、番船付置_レ、彼方仕廻次第當國之地江可送來_レ條、其節警固之者相副、長崎江差越可申旨、委細長崎奉行衆江申越_レ、此段申上_レ、以上、

朱力キ
元禄十一年 十二月十八日

正文在文庫

御札令披見外、

公方様御勇健被成御座、恐悦旨尤外、隨而蜜柑二箱并御
看一種被獻之外、紙面趣得其意外、恐、謹言、

朱力キ
元禄十一年 十二月十九日

松平右京大夫
輝貞判

柳澤出羽守
保明判

松平薩摩守殿

全御譜中

正文在文庫

御札令披見候、就寒中

公方様御機嫌之御様躰、以使者被相伺之外、御勇健之御
事外間、可御心安外、隨而御羽織五并御看一種被獻之外、
各申談、遂披露外、恐、謹言、

朱力キ
元禄十一年 十二月廿二日

小笠原佐渡守
長重判

松平薩摩守殿

全御譜中

正文在文庫

御札令披見候、寒中付而

公方様御機嫌之御様躰、被相伺之外、御勇健之御事外間、
可御心安外、隨而御羽織五并御看一種被獻之外、紙面趣
得其意外、恐、謹言、

朱力キ
元禄十一年 十二月廿三日

松平右京大夫
輝貞判

柳澤出羽守
保明判

松平薩摩守殿

桜島池田氏齋年代記

一元禄十一年寅十二月廿四日、向ノ島ヲ櫻嶋ト唱可申旨、

御意ノ由被仰渡外、

綱貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様御勇健被成御座、恐悦旨尤外、將又今度被下御暇、
其上御馬并白銀・時服拜領雖有之由得其意外、在所到着
付而、爲御禮以使者目錄之通被獻之外、紙面之趣承届外、
恐、謹言、

元禄十一年 十二月廿五日

松平右京大夫 輝貞判

柳澤出羽守 保明判

松平薩摩守殿

綱貴公御譜中

寫正文在文庫

知行所覺

一日向國那珂郡之内

- 恒久村(宮崎)・田吉村(宮崎)・郡司分村(宮崎)・隈野村(宮崎)・加江田村(宮崎)・鏡洲村(宮崎)
- 酒谷村(日南)・吉野方村(日南)・楠原村(日南)・板鋪村(日南)・星倉村(日南)・戸高村(日南)・西辨分村(日南)・隈谷村(日南)・北河内村(日南)・郷原村(日南)
- 大藤村(日南)・東洲分村(日南)・内殿所村(日南)・益安村(日南)・平山村(日南)・風田村(日南)・宮浦村(日南)・富士村(日南)・伊比井村(日南)・塚田村(日南)・大窪村(日南)・萩嶺村(日南)・毛吉田村(日南)・上方村(日南)・下方村(日南)・橋口村(日南)・谷口村(日南)
- 中村(南那珂郡)・津屋野村(南那珂郡)・瀉上村(南那珂郡)・脇本村(南那珂郡)・熱波村(南那珂郡)

三拾九ヶ村

一同國 宮崎郡之内

加納村・木原村・今泉村・田野村

四ヶ村

元禄十一年 辰十二月

伊東大和守

綱貴公御譜中

正文在文庫

一筆啓上仕り、然者おいよ病氣養生不相叶致死去外付、御悔被仰下忝奉存外、右之御禮爲可申上、如此御座外、恐惶謹言、

元禄十一年 十二月廿七日 西井織部 忠垣判

松 薩摩守様

参人々御中

全上 全上

去十八日之尊書拜見仕り、然者朝鮮國之船壹艘、人數五拾四人乗組、今月八日御領内屋久嶋一湊と申所江致漂着外之間、其表江送來外者、警固被指添當地江可被送遣之旨承知仕候、委曲從御家頼衆被申越外之趣奉承届外、弥其元着岸次第諸事例之通被仰付、早、當津へ可被送遣外、恐惶謹言、

朱カキ
元禄十一年 十二月廿八日
丹羽遠江守(長崎奉行)
長守判
近藤備中守(同)
用高判

松平薩摩守様
参貴報

323

全上
全上

おいと殿死去ニ付、預貴札御笑止之段、御同然奉存外、
右爲御禮如此御座外、恐惶謹言、

朱カキ
元禄十一年 十二月廿九日
酒井縫殿
忠菊判
松 薩摩守様

324

全上
全上

爲歳暮之祝儀、小袖五重到來歡覺外、委曲土屋相摸守可
述外也、

朱カキ
元禄十一年 十二月晦日



薩摩
中将殿

325

全上
正文在文庫

御札令披見外、

公方様御勇健被成御座、恐悦旨尤外、將又參勤時分儀、
以使者被相伺之候、紙面之趣各一覽事外、至來年三月重
可被相伺外、恐、謹言、

朱カキ
元禄十一年 十二月晦日
小笠原佐渡守
長重判

松平薩摩守殿

326

櫻島池田氏藏年代記
一元禄十二年卯正月廿六日、吉野(高尾島)御舊例御關狩初外被仰
付、相勉之事、

327

雜抄中

一元禄十二年乙卯正月廿六日、吉野ニ初外御關狩有之、
惣奉行佐多李・嶋津主計(久世)・鎌田隼人、

328

綱貴公御譜中

正文在文庫

新春之御吉慶多幸々、猶更不可有際限御座候、此等之御

祝儀爲可申上奉呈愚書候、仍雖輕微之至候目錄之通奉進上之候、聊奉表御佳例計御座候、猶萬悦幾久可奉得、尊意候、誠惶誠恐敬白、

朱力キ
元禄十二年

正月十一日

佐敷王子

尚益判

進上
(綱目)
中將様

329
正文在文庫

一筆致啓上、各様弥御堅固可有御座と、珍重奉存、然者國御繪圖之儀、去春被 仰出趣付、日向之内椎葉山之儀、(相良頼春)遠江守支配所被 仰付置候、依之於江戸御役人方江御斷被申入、薩摩守様江御借用之御繪圖借用仕、書寫、舊冬江戸方差遣間、爰元扣見合繪圖認之、新宮市左衛門と申者申付、各様江持、様被申付、

330
網貴公御譜中

此御書吉貴公御譜中ニ在リ

改年之慶賀、猶更不可有際限、其方無吳越年、於一門中表別條有間敷珍重存、我等事無恙致超歲間、可安芳慮、爲祝儀目錄之通進之、猶期永日、恐、

朱力キ

元禄十二年

正月二日

松平修理大夫殿

御宿所

331
全上

改年之慶賀猶更不可有際限、其方無吳越年、於一門中表別條有間敷珍重存、我等事無恙致超歲間、可安芳慮、爲祝儀目錄之通進之、猶期永日、恐、

朱力キ

元禄十二年

正月二日

嶋津又八郎殿

(久嶺)
御宿所

332
全上

正文在文庫

此御書吉貴公御譜中ニ在リ

改年之御慶賀重疊目出度申上、先以御勇健可被成御超歲、珍重之御儀奉存、私儀如例年、今日登 城仕、首尾好御禮申上、御盃頂戴御時服拜領、難有仕合奉存、年首之御祝儀爲可申上、如斯御座、臨、目錄之通進上之任、猶奉期永日、誠惶誠恐敬白、

朱力キ

元禄十二年

正月二日

松平修理大夫

吉貴判

進上

中將様

333

全御譜中

改年之御慶賀重疊不可有盡期御座外、
公方様益御勇健被成御座、年始之御規式如御佳例首尾好
相濟可申、恐悅奉存外、猶以御機嫌爲可奉伺之、差上使
者外、因茲例年之通御肴二種・御樽一荷獻上仕外間、可
然様御差圖奉頼外、恐惶謹言、

朱力半

元禄十二年 正月三日

334

全御譜中

一筆致啓上外、舊臘十日
(尾張光友夫人、家光長女)
千代姫君様御逝去之旨承知仕、絶言語奉存外、右之段爲
可申上捧使札外、恐惶、

朱力半

元禄十二年 正月六日

335

全御譜中

一筆令啓達外、舊臘十日
千代姫君様御逝去之旨承知仕、絶言語奉存外、右之段爲
可申入如此御座外、恐惶、

朱力半

元禄十二年 正月六日

近藤備中守様 (用高)

丹羽遠江守様 (長守)

人、

336

全御譜中

正文在文庫

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被
獻之外、首尾好遂披露外、恐、謹言、

朱力半

元禄十二年 正月十一日

小笠原佐渡守

長重判

土屋相摸守

政直判

戸田山城守

忠昌判

阿部豊後守

正武判

松平薩摩守殿

337

全御譜中

口上覺

南京出之來朝之唐船一艘、人數三十八人乘外壹人病死、
(大船船)
十月朔日領内七島之内諏方之瀬江、致漂着卸碇外付外、

先頃委細申上置外、右唐船警固之者相付、長崎江送越、
今月三日無吳儀御請取外、此段申上外、以上、

朱力キ
元禄十二年 正月十二日

全御譜中

正文在文庫

就方姫縁組被 仰出外、遠路預賀章殊如目錄被懸芳意、
過當之至存候、恐、謹言、

朱力キ
元禄十二年 正月十四日 水戸少將 吉孚判

松平薩摩守殿

御報

339 全御譜中

正文在文庫

尊書謹弔拜見仕候、弥御勇健被成御座、珍重御儀奉存外、
然者爲歳暮之御祝儀、御目錄之通拜受仕、幾久忝次第奉
存外、將亦於御當地、一門中相替儀無御座外間、尊意安
可被思食外、猶奉期後喜之時候、誠惶誠恐敬白、

朱力キ
元禄十二年 正月十四日

松平修理大夫

吉貴御判

進上 中將様

340 全御譜中

正文在文庫

就方姫縁組被 仰出候、使簡持更御太刀・馬代并目錄之
通被懸芳意、還程御深情之段、過當之至存外、恐、謹言、
(録カ)

朱力キ
元禄十二年 正月十四日 水戸宰相 綱條判

松平薩摩守殿

御報

341 綱貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將亦其方儀被
下御暇、其上御馬并白銀・時服拜領、難有由得其意外、
國元に到着付、爲御禮以使者目錄之通被獻之外、右之趣
遂披露外處、御前江被召出、入念外段御喜色之御事外、
恐、謹言、

朱力キ
元禄十二年 正月十八日

小笠原佐渡守

長重判

342

綱貴公御譜中

芳墨殊如恒例、於神前御祈禱之御札牛王贈給、過當之至存外、弥御懇祈頼入外、恐々、

朱力キ
元禄十二年 正月廿二日

八幡山

泉坊

回答

全上

正文在文庫

(逐)
遂申、委曲彼卿可有演説外也、

(平松持方)
先頃額之事、以右衛門督被示聞之趣得其意外、漸々可備

愚毫外、仍啓一簡外也、

松平薩摩守殿

土屋相 摸守
政直判

戸田山城守
忠昌判

阿部豊 後守
正武判

344

正文在文庫

鹿兒嶋諏訪・稻荷兩社鳥居額之事、右大臣殿に申入外處、可被染御筆之由外、先以珍重之事外、恐惶謹言、

朱力キ
元禄十二年 正月廿三日

松平薩摩守様

(時方)
平松中納言
(花押 No.5)

朱力キ
元禄十二年

初陽念三

松平薩摩守殿

(近衛家照)
(花押 No.4)

345

正文在文庫

鹿兒嶋稻荷社・諏訪社額之事、近衛右大臣殿令言上外之處、被遊可被下之旨被仰候、爲其如此外、恐惶謹言、

朱力キ
元禄十二年 正月廿三日

松平薩摩守様

朱力キ
平松宰相
時方

一筆致啓達_レ、御屋鋪類焼付_ル、從同姓修理大夫、櫻田屋敷_ハ一節御移_レ様と申入、舊臘十七日之晚御引越_レ付_ル、芝屋敷_ハ預御見廻、將又島津又八郎病氣付_ル、旁被仰聞_レ趣忝存_レ、右爲御禮如此御座_レ、恐惶、

朱力キ
元禄十二年 正月廿五日

(定巻)
松平因幡守様

一筆致啓達_レ、御屋敷類焼付_ル、從同姓修理大夫、櫻田屋敷_ハ一節御移_レ様と申入、舊臘十七日之晚御引越_レ付_ル、芝屋敷_ハ預御見廻被仰聞_レ趣忝存_レ、右爲御禮如此御座_レ、恐惶、

朱力キ
元禄十二年 正月廿五日

(定巻)
松平三郎助様

如來書下官所勞、弥快然候之間、可被安心_レ、度々深切之趣尤満足思給_レ、猶期後音_レ條不能羅縷_レ也、

元禄十二年 初春廿八鳥 基熙

松平薩摩守殿

正文在文庫

如來命改年之吉兆不可有盡期_レ、弥御堅固御超歲之由、玆重存_レ、下拙無爲令越年候、早々預貴翰欣悦存_レ、恐惶謹言、

朱力キ
元禄十二年 正月廿七日

松平修理大夫様

貴報

平松宰相 時方

貴札拜披、如來論改年之御慶不可有盡期_レ、愈御堅固御越年被成_レ由、玆重存_レ、拙下事無爲致超歲_レ、猶期後慶之時_レ、恐惶謹言、

朱力キ
元禄十二年 正月廿七日

松平修理大夫様

御報

石井宮内卿 行豊

一筆致啓達_レ、金銀吹替御用首尾好相濟_レ付_テ、爲御褒美、御時服御拜領由、玆重存_レ、御悅爲可申入如此御座_レ、恐惶、

朱力_キ

元禄十二年 二月二日

阿部豊後守様

352

全上

一筆致啓達_レ、金銀吹替御用首尾好相濟_レ付_テ、爲御褒美、御時服御拜領由、玆重存_レ、御悅爲可申入如此御座_レ、恐惶、

朱力_キ

元禄十二年 二月二日

加藤越中守様
(明美)

人、

353

全上

一筆令啓達_レ、金銀吹替御用首尾能相濟_レ付_テ、爲御褒美、御加增御拜領之由、玆重存_レ、爲御悅如此御座_レ、恐惶、

朱力_キ

元禄十二年 二月二日

354

荻原近江守様
(重秀)
人、

綱貴公御譜中

此御書古貴公御譜中ニ在リ

爲改年之祝儀、芳札令披見_レ、其方玆無吳重歲、去月二日登城、如例年首尾好御禮相濟_レ由、玆重存_レ、隨_テ以使、二種兩樽贈給之、欣然之至_レ、猶期後喜之時_レ、恐、

朱力_キ

元禄十二年 二月九日

松平修理大夫殿

回章

355

全上

正文在文庫

御札令披見候、舊冬東叡山寺中出火_レ段被承之、被申越_レ趣得其意_レ、紙面之通各一覽之事_レ、恐、謹言、

朱力_キ

元禄十二年 二月九日

阿部豊後守

正武判

松平薩摩守殿

356

正文在文庫

御札令披見外、舊冬東叡山中出火外段被承之、被申越
外趣得其意外、紙面之通承届外、恐、謹言、

朱力平
元禄十二年 二月九日

松平右京大夫
輝貞判
柳澤出羽守
保明判

松平薩摩守殿

357

全御譜中

一筆致啓上候、

公方様益御機嫌能可被成御座、恐悦奉存外、然者當年私
參勤時分之儀、爲可奉伺之各様迄以使者申上候、可然様
御差圖奉頼外、恐惶謹言、

朱力平
元禄十二年 二月十日

358

全上

一筆令啓達外、先達の御案内申入外領内於屋久島、致破
損外朝鮮人五十二人、所持道具共ニ此方船ニ乗せ、警固
之者差添、此節差越申外、外二人致病死外、死骸又老破
損船具之儀ニ付、家來共より相伺外處、御差圖之旨具致
承知、其通ニ申付外、委細之儀家來共可申上外、恐惶、

朱力平
元禄十二年 二月十四日

(長崎奉行)
近藤備中守様
(同)
丹羽遠江守様
人、

359

綱貴公御譜中

(始良郡)
正興寺住持職事、任先例可令執務之狀如件、

元禄十二年二月廿一日

中將綱貴御判 (花押 No.2)

玄悦西堂

360

全御譜中

一筆令啓達外、私領七島之内寶嶋(大島郡)江舊臘廿八日唐船漂着
之處、風波荒去月五日致破損外付、唐人荷物共、所之
小舟餘多乘之、當國之地方江可送越由、從彼嶋在番之者
早速以飛船申越外得共、海上荒漸此節相達申外、尤右船
共到着外ハ、御左右可申入外、委曲家來共申上外間、
不能詳外、恐惶、

朱力平
元禄十二年 二月廿二日

綱貴公御譜中

口上覺

私領七島之内寶島に唐船一艘人數廿五人乘、舊臘廿八日致漂着、從南京東江差越外商船遭難風、帆柱損外間、相調度由申ニ付、彼島之儀材木無之外、殊湊々無御座由申聞外處、帆柱無之外者出船難成外、縱致破損外共無是非外、命を助、長崎江差送り様ニと唐人共願申外、折節風波荒、其分ニ功差置外ハ、早速令破損、唐人共可及溺死之所之者共申談、人家遠所ニ小屋相調、同晦日唐人廿五人荷物共陸江卸、小屋江入置、外廻堅固圍申付、晝夜番之者付置申外、唐船之儀者湊無之處江繫置外ニ付、所之者共出精外得共、手ニ及不申、去月五日終令破損外間、唐人荷物共、所之小舟餘多爲乘之、當國之地方江可送越由申越外、右之旨早、可申遣と飛船申付外得共、時分柄海上荒、漸此節當地江爲相達儀ニ御座外、尤當國之地迄送來外者早速可申越旨、長崎奉行衆江御案内申達外、

近藤備中守様

丹羽遠江守様

人々

綱貴公御譜中

一筆致啓上候、

公方様益御機嫌能被成御座旨、恐悅奉存外、然者私御暇被下歸國仕外付、差上使者候之處、御前被召出、且又自分之御禮申上、御暇被下外節、御時服・御羽織頂戴仕、誠以雖有仕合奉存外、右之御禮爲可申上、如此御座外、恐惶謹言、

朱力年

元禄十二年

二月廿五日

正文在文庫

逐申、調合之保之二香合可被試外、

改年之嘉儀、雖事舊外啓一翰外、弥可爲勇健外、此邊無恙外、仍如目錄贈之外、猶属口上外、穴賢々々、

朱力年

元禄十二年

仲春念七

(近衛家照)

(花押)

(No.4)

薩摩中將殿

正文在文庫

御札令披見_レ、如承青陽之慶賀珍重_レ、先以公方様益御機嫌能被成御座、年始之御規式可相濟と恐悅旨尤候、隨_レ以使者御樽着被獻之候、各申談首尾好遂披露_レ、恐、謹言、

朱力キ元禄十二年 二月廿七日

阿部豊後守 正武判

松平薩摩守殿

全上

正文在文庫

御札令披見_レ、如承青陽之慶賀珍重_レ、先以公方様益御機嫌能被成御座、年始之御規式可相濟と恐悅旨尤候、隨_レ御樽着被獻之_レ、紙面之趣得其意_レ、恐、謹言、

朱力キ元禄十二年 二月廿七日

松平右京大夫 輝貞判

柳澤出羽守 保明判

松平薩摩守殿

正文在文庫

去十四日之尊書拜見仕_レ、先達_レ被仰下_レ御領内於屋久嶋、致破船_レ朝鮮人五拾貳人、所持之道具共日本船ニ乘之、警固被差添、今度被送遣之、無吳儀昨廿八日當津着岸、無相違請取申_レ、將又外貳人病死仕_レ死骸并破損船具之儀ニ付、最前從御家來衆被申聞_レ付、委曲申談_レ趣被聞召、弥其通被仰付_レ由、得其意奉存_レ、此度及自御家來衆可申越_レ之通、逸、承届_レ、委細老御使者之衆相達申_レ、恐惶謹言、

朱力キ元禄十二年 二月廿九日

丹羽遠江守 長守判

近藤備中守 用高判

松平薩摩守様

参貴報

367 吉貴公御譜中

正文在文庫

明朝日例月之御禮無之_レ間、不及登 城候、以上、

朱力キ元禄十二年 二月廿九日

小笠原佐渡守

368

綱貴公御譜中

口上覺

先達の申上置外領内屋久島に漂着、破船仕外朝鮮人五十
二人、長崎に送届、去月廿八日奉行衆御請取外、外二人
病死之者有之、朝鮮人望之通土葬に取置外處、死骸并破
損船具長崎に可差越之旨、從奉行衆差圖外付外、送越申
管御座外、此段申上外、以上、

朱力年
元禄十二年 三月五日

369

全上

先達の申上置外領内屋久嶋に漂着、破船仕外朝鮮人五十
二人、長崎に送届、去月廿八日奉行衆御請取外、外病死
之者二人御座外、船具等之儀付外者、從奉行衆差圖御座
外間、其通可仕覺悟御座外、此段申上外、以上、

松平修理大夫殿

土屋相摸守
戸田山城守
阿部豊後守

370

全上

口上覺

舊臘四日申上置外領内七島之内寶嶋に漂着仕外來朝之南
京船一艘、琉球之内大嶋に差越、去月廿日彼地出船、同
廿八日領内(薩摩)甕島に着船仕外付外、警固之者相副、長崎に
差送申管外、右之趣長崎奉行衆にも申越外、此段申上
外、以上、

朱力年
元禄十二年 三月六日

371

全上

一筆令啓達外、舊臘三日以飛札申入置外來朝之南京船一
艘、領内甕島に着船外付外、警固相副其許に差送可申
外、委曲家來共申上外間、不能詳外、恐惶、

朱力年
元禄十二年 三月六日

近藤備中守様

丹羽遠江守様

人々

吉貴公御譜中

正文在文庫

明十五日例月之御禮無之_レ間、不及登 城_レ、以上、

朱力キ

元祿十二年

三月十四日

小笠原佐渡守

土屋相摸守

戸田山城守

阿部豊後守

松平修理大夫殿

阿部豊後守

正武判

松平薩摩守殿

全御譜中

此御書吉貴公御譜中ニ在リ

一筆令啓_レ、慶雲院殿病氣之處、療治不相叶遠去被成、
笑止之儀存_レ、依之示給_レり趣被入念儀存_レ、恐_レ、

朱力キ

元祿十二年

三月十九日

松平修理大夫殿

御宿所

網貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見_レ、

公方様益御機嫌能可被成御座、恐悦旨尤_レ、將又參勤時
分儀以使者被相同之_レ、及 高聞候處、來年三月中可致

參府由被 仰出_レ、可被存其趣_レ、恐_レ、謹言、

朱力キ

元祿十二年

三月十八日

小笠原佐渡守

長重判

土屋相摸守

政直判

戸田山城守

忠昌判

全上

一筆令啓達_レ、(消楚)禰寝丹波事病氣之處、養生不叶相果申_レ、
依之預示趣被入御念之段忝存_レ、爲御禮如此御座_レ、恐

惶、

朱力キ

元祿十二年

三月十九日

鳥居播磨守様

(忠英)

人、

全上

376

全御譜中

今歲綱貴滿三五十之算、因一族家臣等以三詩歌一賀三寶算、載而在三于別錄、

377

全上

一筆致啓上候、弥御勇健被成御座、珍重御儀奉存外、然
老先頃芝屋敷江以御使僧、東照宮牛王御札并御薰二包被
下置之、忝次第奉存外、右之御禮爲可申上如此御座外、
此由宜預洩達外、恐々、

朱力平

元禄十二年

三月廿一日

万里小路大進御房

(承信)

379

全上

一筆令啓達外、然老御關所御手形申請外節、家來伊勢十
兵衛・赤松甚右衛門・阿多六大夫と申者、御斷可申上外
間、可然様御差圖頼存外、爲其如此御座外、恐惶、

朱力平

元禄十二年 三月廿一日

村越伊豫守様

(直感)

人々

380

全上

一筆致啓達外、

中將様御儀、被爲成五十之御歳、壽算之賀御祝儀被遊之
趣致承知外、寔以千秋萬歳目出度奉存外、依之奉表御嘉
祥目錄之通致進上之外、此旨以御序、宜預御披達外、頼
入存外、恐々謹言、

朱力平

元禄十二年

三月廿二日

鳴津左京

惟久判

鳴津圖書殿

381

綱貴公御譜中

口上覺

去六日申上置(薩摩郡)琉球之内大嶋より、領内(薩摩郡)甕島(薩摩郡)に着船仕ハ來朝之南京船一艘、警固之者相添、長崎奉行衆ハ送届ハ處、無相違御請取ハ間、此段申上候、以上、

三月廿六日

382

全上

一筆致啓上候、今度領内之嶋、科人三十九人流罪被仰付ハ間、於大坂町奉行衆差圖次第請取、國許ハ可差越之旨被仰渡之段承知仕ハ、此旨爲可申上如此御座ハ、恐惶、

朱カキ

元禄十二年 三月廿七日

阿部豊後守様

人々

383

全上

一筆致啓違ハ、今度領内之嶋ハ科人流罪被仰付ハ付カ、從阿部豊後守殿貴様へ被仰渡趣有之段致承知ハ、此旨爲可申上如此御座ハ、恐惶、

朱カキ

元禄十二年 三月廿七日

384

市太夫久雄譜中

元禄十二年己卯三月廿七日補鹿屋地頭職、

此久雄ハ光久公ノ二十男ナリ

保田越前守様

人々

385

網貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見ハ、

公方様益御機嫌能被成御座、正日四日増上寺 御佛殿御參詣之儀被承之、恐悦旨尤ハ、紙面之趣各申談及言上ハ、

恐々謹言、

朱カキ

元禄十二年 三月晦日

土屋相摸守

政直判

松平薩摩守殿

386

全上

正文在文庫

御札令披見ハ、

公方様益御機嫌能被成御座、正月廿四日増上寺 御佛殿

御參詣之儀被承之、恐悅旨尤外、紙面之趣得其意外、恐
、謹言、

朱力年
元祿十二年
三月晦日

松平右京大夫
輝貞判

柳澤出羽守
保明判

松平薩摩守殿

387
綱貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方樣益御機嫌能被成御座、先頃護持院被爲 成外儀被
承之、恐悅旨尤外、紙面之趣各申談及言上外、恐、謹言、

朱力年
元祿十二年
四月二日

小笠原佐渡守
長重判

松平薩摩守殿

388
綱貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方樣益御機嫌能被成御座、先頃護持院被爲 成外儀被
承之、恐悅旨尤外、紙面之趣得其意外、恐、謹言、

四月二日

松平右京大夫
輝貞判

柳澤出羽守
保明判

松平薩摩守殿

389
全御譜中

元祿十二年己卯是歲

大樹綱吉公許ニ綱貴之述職ニ、有下可ニ來歲辰三月中參觀一
之 命上、是故修理大夫吉貴去年以來在三江府ニ也、

390
一筆致啓上外、

公方樣益御機嫌能被成御座、恐悅奉存候、將又私參勤時
分之儀相同外處、來年三月中參府可仕之旨被仰出、御奉
書之趣長難有仕合奉存外、此段爲可申上差上使者外、恐
惶、

朱力年
元祿十二年
四月十三日

阿部豐後守様

戸田山城守様

土屋相摸守様

小笠原佐渡守様

人、

全御譜中

一筆致啓達_レ、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦奉存_レ、然者私參勤時分之儀相伺_レ處、來年三月中參府可仕之旨被 仰出、難有仕合奉存_レ、依之差上使者_レ間、如此御座_レ、恐惶、

朱力キ

元禄十二年

四月十三日

柳澤出羽守様

松平右京大夫様

人、

全上

一筆致啓達_レ、

公方様益御機嫌能被成御座旨、恐悦奉存_レ、次貴様御堅固頃日者可被成御參府と存_レ、拙者例年者頃日參勤仕筈御座_レ處、時分之儀相伺申_レ得者、來年三月中參勤可仕由被 仰出_レ、難有仕合奉存_レ、兼者國元罷立_レ時分之儀、可得御意と存罷在_レ得共、當年者參勤不仕_レ付

、御案内及延引_レ、大坂に差置_レ家來に者、申付置_レ趣有之_レ間、定_レ御家來衆迄者參勤及延引_レ段者、最早相達爲申_レ可有御座と存_レ、此等之段爲可申入、如此御座候、恐惶、

朱力キ

元禄十二年

四月十三日

藤堂和泉守様

(寛久)

人、

全御譜中

一筆令啓達_レ、先頃申入_レ領内七嶋之内、於寶島破船之唐人二十五人并荷物、此節鞏固之者相副、如其地送越申_レ間、如此御座_レ、委細者從家來共可申上_レ條、不克詳_レ、恐惶、

朱力キ

元禄十二年

四月十三日

近藤備中守様

丹羽遠江守様

人、

綱貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃柳澤出羽守亭被爲成
外儀被承之、恐悦旨尤候、紙面之趣各申談及言上外、恐
、謹言、

朱力キ
元禄十二年 四月十四日

松 薩摩守殿

小笠原佐渡守
長重判

全上
全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃出羽守亭被爲 成外儀
被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣得其意外、恐、謹言、

朱力キ
元禄十二年 四月十四日

松平右京大夫
輝貞判

松平薩摩守殿

柳澤出羽守
保明判

吉貴公御譜中

正文在文庫

明十五日例月之御禮無之外間、不及登 城候、以上、

朱力キ
元禄十二年 四月十四日

小笠原佐渡守
土屋相摸守
戸田山城守
阿部豊後守

松平修理大夫殿

網貴公御譜中

正文在文庫

一筆致啓達候、

中將様益御機嫌好可被成御座と目出度奉存外、然者拙者
儀、今十五日

殿中江被爲 召、在所江之御暇被 仰出之、其上御老中
御列座ニ由、佐土原從古來城地之儀、被爲 聞召通、向
後城主列ニ被 仰付之趣、御用番小笠原佐渡守殿被 仰
渡之外、寔以難有仕合安堵仕候、此儀別由御取持被下外
故、首尾好相濟忝御儀奉存外、右之趣爲可申上、不取敢
御自分迄以使札如斯御座外、以御序宜預御披達外、頼入
存候、恐、謹言、

朱力キ
元禄十二年 四月十五日

嶋津左京
惟久判

398 忠與一流飛驒守惟久譜中

元祿十二年己卯四月十五日、惟久登レ營賜ニ歸郷之暇一
矣、當レ此時乎御老中列ニ座于別席一、小笠原佐渡守長重
述ニ台旨一曰、惟久之所領佐土原之地、元來爲レ城地之
事明白也、以レ之容レ訴免ニ許自今以後爲レ城主、惟久百
拜奉レ謝レ之、夫此事如何者於ニ當家ニ代代雖レ敍爵割ニ與
領地於式部少輔久壽ニ之後、惟久所領減少而不レ敍爵、且
佐土原元來雖爲城地、頃年空ニ城地之名一、越ニ綱貴主
告ニ訴其來由於

將軍家一、肆及ニ此事一、是偏 主之恩遇渥所ニ以致一也、

399 綱貴公御譜中

一筆致啓上候、

公方様益御勇健被成御座、去月廿七日東叡山江 御成、
御機嫌能 還御旨承知仕、恐悦之御儀奉存外、此段爲可
申上捧飛札外、恐惶、

朱カキ
元祿十二年 四月廿二日

400 從 關白様御書拜見仕候、益御機嫌能被成御座、玆重之

御儀奉存外、然老年首之御祝詞被仰下、殊御調合之御儀之
二香合被下置之、誠以忝次第奉存外、此旨宜預洩達外、
恐々、

朱カキ
元祿十二年 四月廿六日

進藤筑後守殿 (長房)

401

從 (近衛家總) 右府様御書拜見仕候、益御機嫌能被成御座、玆重之
御儀奉存外、然老年首之御祝詞被仰下、殊御調合之御儀之
二香合被下置之、誠以忝次第奉存外、此旨宜預洩達外、
恐々、

朱カキ
元祿十二年 四月廿六日

今大路兵部太輔殿 (光好)

402

綱貴公御譜中

一筆致啓上外、(近衛家久) 大納言様益御勇健被成御座、玆重御儀奉
存外、然老江戸屋敷江以御使者、年始御祝儀被仰下、殊
屬子一箱拜受仕、誠以忝次第奉存外、此旨宜預洩達外、
恐々、

朱力^半
元禄十二年 四月廿六日

(長之)
進藤修理亮殿

403

全上

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃松平右京大夫亭被爲成外儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及言上外、恐々謹言、

朱力^半
元禄十二年 四月廿九日

松平薩摩守殿

小笠原佐渡守

長重判

401

全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、先比右京大夫亭被爲成外儀被承之、恐悦旨尤候、紙面之趣得其意外、恐々謹言、

朱力^半
元禄十二年 四月廿九日

四月廿九日

松平右京大夫

輝貞判

柳澤出羽守

保明判

405

網貴公御譜中

松平薩摩守殿

正文在文庫

爲端午之祝儀、帷子單物數十到来歡覺候、委曲阿部豊後守可述外也、

朱力^半
元禄十二年 五月三日

五月三日

網吉
墨印

薩摩

中將殿

406

網貴公御譜中

正文在文庫

一筆致啓上候、爲端午之御祝儀、被入御念預御使者、殊更御目錄之通被贈下忝奉存外、爲御禮如斯御座外、恐惶謹言、

朱力^半
元禄十二年 五月四日

五月四日

秋元但馬守

喬朝判

松平薩摩守様

人々御中

407

全上

全上

去月廿七日之尊札致拜見候、御領内之嶋江流罪之者被仰付、從阿部豐後守殿拙者江就被仰渡外、當御地御家來衆江申談外趣、被成御承知外由、入御念外御紙面之旨奉得其意候、恐惶謹言、

朱力キ
元禄十二年 五月四日

(江戸町奉行)
保田越前守

(郷九)
宗仁判

松平薩摩守様

尊報

408

全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃増上寺被爲 成外儀被承、恐悦旨尤外、紙面之通各申談及言上外、恐、謹言、

五月六日

戸田山城守

忠昌判

松平薩摩守殿

409

全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃増上寺被爲 成外儀被承、恐悦旨尤外、紙面之趣得其意外、恐、謹言、

朱力キ
元禄十二年 五月六日

松平右京大夫

輝貞判

柳澤出羽守

保明判

松平薩摩守殿

410

全御譜中

芳札令披見外、我等事來年三月中可致參府旨被 仰出、緩々令在國外、且又先頃於芝屋敷平産、男子出生付外、爲祝儀示給被入念儀令悦外、猶期後喜之時外、恐、

朱力キ
元禄十二年 五月六日

松平修理大夫殿

回章

参考 此年三月廿日、幼名虎野丸誕生、公ノ七明、後繼ヒト称ス
島津勘解由久管ノ簽子トナラセラル

411

全上

芳札令披見外、我等事當年賀付外、爲祝儀被差越使、殊目錄之通饋給之、幾久敷と令満悦外、仍目錄之表令進之外、猶期後喜之時外、恐、

尚以爲上巳之祝詞、目錄之通被相饋令祝着外、從是奉目錄之表進外付、爲謝禮別札之趣慰勉之儀存外、以上、

朱力キ
元禄十二年 五月六日 右二通ノ御書吉貴公御譜中ニ在リ

松平修理大夫殿
回章

全御譜中

(消息)
御せうそこはいけん仕り外、いよ／＼御きけんよく御座なされ外よし、めてたくそんし奉り外、さて又わたくしことしの賀御祝ひなされ外て、御もくろくのとをりくたしをかれ、いく久しくとかたしけなくそんし奉り外、猶かさねて御祝ひ申上へく外、めてたくかしく、

尚、いよ／＼御かわりなされ外事も御さなく、ちんてうの御事ニ外、これよりもいわる申外て、もくろくのおもてしん上仕り外、かしく、

朱力キ
元禄十二年 五月六日

しん上

(光久齋、平松氏)
陽和院様

御せうそこひけんいたし外、そこもとかわる事なく、陽和院様いよ／＼御きけんよく、一門中となたもつゝかなきのよし、めてたくそんし、われらもふしに外まゝ、御心やすかるへく外、さてまた今年は五十の賀に付、御いわる外て、もくろくのことくをくり給り、いく久しくもと大慶にそんし外、猶かさねて申のふへく外、めてたくかしく、

尚、これよりもいわる外て、もくろくのことくしんし外、かしく、

朱力キ
元禄十二年 五月六日

修理大夫との
おくかた
返事

芳札令披見外、其方弥無吳之旨珍重存外、然者我等當年賀付、爲祝儀別緒之通被相饋之、令怡悦外、且又去月廿日朝、家内ニ西平産男子出生、揃外息災之由、大悦事候、參勤之時分表相延、緩々致在國外、旁被入念儀滿

足存外、猶期後喜之時外、恐々、

朱カキ
元禄十二年 五月六日

嶋津又八郎殿

回報

415 綱貴公御譜中

御せうそこはいけん仕り外、そこほといよく御きけんよく御座なされ外よし、めてたくそんし奉り外、修理大夫おくにても、先月十一日に、袖とめの祝ひしゆひよく相すミ申のよし、ちん重に存外、芝にても袖なをしの祝ひもあいすみ、いづれもそく才(息災)のよし、御ねんいらせられいたん、かたしけなく存奉り外、猶かさねて御よろこひ申上へく外、めてたくかしく、

尚々兩やしき、そのほか一もん中ふしのよし、まんそく仕り外、わたくし事もそく才にまかりゐ申外まゝ、御心やすく思召下されへく外、かしく、

朱カキ
元禄十二年 五月十日

しん上

陽和院様

416 御せうそこひけんいたし外、そこほといよく御無事に

元(元) 慶

て、先月十一日けんふくなされ外よし、ちん重にそんし外、陽和いん様へもますく御氣けんよく、しほ(息災)にてもそろい外てかわる事御さなくよし、まんそくいたし外、くわしくうけ給り外おもむき、御ねん入事にそんし外、猶重て申のふへく外、かしく、

尚々いよくかわる事もこさなく外よし、めてたくそんし外、かしく、

朱カキ
元禄十二年 五月十日

修理大夫殿

おくかた

返事

417

綱貴公御譜中

此御書吉貴公御譜中ニ無之

正文在文庫

一筆啓上仕候、弥御機嫌能可被成御座、目出度奉存外、然老爲端午之御祝儀、御目錄之通被下置之、幾久忝次第奉存外、右之御禮爲可申上如斯御座外、猶奉期後喜之時候、誠惶誠恐敬白、

五月十三日

松平修理大夫

吉貴判

進上
中將様

418

全上

一筆致啓達_レ、貴様弥御堅固可被成、御勤珍重存_レ、然
老嶋津左京儀、奉願_レ通佐土原城地被仰付、至私別_レ難
有仕合奉存_レ、早竟御取持故首尾好相濟忝存_レ、祝_レ而
目錄之通致進覽_レ、御禮旁爲可申入如此御座_レ、恐惶、

朱力キ
元禄十二年

五月十三日

小笠原佐渡守様

人々

419

一筆令啓達_レ、嶋津左京儀如奉願_レ佐土原城地被、仰付、
至拙者難有仕合奉存_レ、御取持之儀共御座_レ而、首尾好
相濟忝存_レ、爲御禮如斯御座_レ、隨_レ而目錄之通令進覽之
_レ、恐惶、

五月十三日

(信篤)
林大學頭様

人々

一筆令啓達_レ、嶋津左京儀如奉願_レ佐土原城地被、仰付、
至拙者難有仕合奉存_レ、御取持之儀共御座_レ而、首尾好
相濟忝存_レ、爲御禮如此御座_レ、隨_レ而目錄之通令進覽之
_レ、恐惶、

朱力キ
元禄十二年

五月十三日

(五利)
庄田下總守様
(西丸留守屋)

人々

421

全上

一筆令啓達_レ、嶋津左京儀如奉願_レ佐土原城地被、仰付、
至拙者難有仕合奉存_レ、御取持之儀共御座_レ而、首尾能
相濟忝存_レ、爲御禮如此御座_レ、隨_レ而目錄之通令進覽之
_レ、恐惶、

朱力キ
元禄十二年

五月十三日

石野八兵衛様

人々

422

一筆致啓上候、朱力キ例ノ通變之將又嶋津左京儀、奉願_レ通去
月十五日佐土原城地被、仰付之旨承知仕、寔以難有仕合
奉存_レ、御禮爲可申上極飛札_レ、恐惶、

宋力年
元祿十二年 五月十三日

全上

口上覺

先達の申上置り私領七嶋之内寶嶋(大島郡)に漂着破船之唐人貳拾五人并荷物、先比當國之地方迄送來り付る、警固之者差添、長崎に送越り處、去三日着岸、同四日彼地奉行衆無吳儀御請取り問、此旨申上り、以上、

五月十四日

全上

一筆令啓達り、今度執當役被仰付、院家被召成院號被下之由珍重存り、依之芝屋敷に御見廻御口上之趣、過分之至存り、御悅謝禮旁如斯候、恐惶頓首、

宋力年
元祿十二年 五月十六日

願王院

綱貴公御譜中

正文在文庫

今度繪圖方之御用有之、拙者事江戸に被遣り付、於江戸勤方之趣被仰付り覺

一繪圖御奉行より段、被仰渡置り御書付之内に、譯難知儀餘多有之り間、赤松(前)甚右衛門案内に、永山休兵衛(義也)事繪圖御奉行御家來中に取合、譯難知儀共一、承届させ申、其趣を以正保以來御領國地形并村里等變り所を相しらべ、一郡か一郷程表上り繪圖之趣に、先影繪圖を相調させ申、其繪圖を繪圖御奉行御家來中へ見せ申、於罷成儀表、繪圖御奉行方に表入御内見申筋に仕、上り繪圖之仕立様無殘所承究、得と影繪圖相調させ持下り可申り、

一高辻帳調様之儀表、右格式に仕、下書相調持下り可申り、

一國境郡、論所有之、御裁許御座り所表、御裁許之趣書付可被差出旨、被仰渡置り間、先年飢肥境山論御裁許之趣表、此節被仰出に可有之り、始終之首尾委被仰出事り哉、又ハ太躰に被仰出儀に表り哉、他所に類表可有之り間、甚右衛門より承合り上、先年山論御裁許之趣、江戸に書付等有之り間、見合置申、此節御裁許之趣不申上り、不叶譯表有之りハ、時宜相應に相

計可申外、若段々之儀委細之御尋_外ハ、於御國元得と調申、追_る可申出由申置可然_外、

一日州御持合之御衆_ハ可被相觸由_ニ、繪圖御奉行より被_レ置_外御觸書之内_ニ、譯不相知事埒明_外者、御觸書御案紙之通_ニ爲相調、御持合之御方_ハ留守居などを以相達_外様_ニ仕可申_外、

一薩州之古繪圖_ニハ十四郡_ニ致有之_外處、寛文四辰之年、貞享元子之年御判物_ニハ、知覽之郡を除、十三郡_ニ御書出有之_外間、此節之繪圖_ハ十三郡_ニ記被差出_ニ、_レ可_レ有之_外、併古繪圖_ニ者相替事_外間、其御案内、繪圖御奉行_ハ被_レ仰_外出置_外上可被相改哉、繪圖御奉行御家來中_ハ承合させ申、時宜相應_ニ可仕_外、

一日州椎葉山之儀付_る、相良遠江守様より去年已來御問合有之儀、從此御方様_ハ被_レ仰_外出儀_ニ者可有之哉、此段_ハ爲承合、時宜相應_ニ相計可申_外、

一正保年間繪圖被_レ相調_外節ハ、日州伊東出雲守様・秋月長門守様・有馬左衛門佐様・島津左京殿御領分ハ、各境目_ニ彼方御家來と、此御方繪圖役人立合申_外上、繪圖之表_ニ雙方之役入印形仕置_外、此節之儀_ハ其筋_ニ有度被思召_外間、是_ハ繪圖御奉行御家來中_ハ承合、若急

度御案内被_レ仰_外出儀_外ハ、其通_ニ可仕_外、致相印_外儀不障事_外ハ、出雲守様・長門守様・左京殿并御代官衆御方_ハ、右之旨申談_外筋_ニ可申_外付_外、肥後境之儀

者、此節_ハ立合_外、致相印置_外筋_ニ有度被思召_外間、立合之上致相印置度旨、細川越中守様・相良遠江守様・米良主膳殿御方_ハ、甚右衛門より申談_外筋_ニ可申_外付_外、

一先年ハ日州御持合之御衆繪圖被_レ相調、御使者を以鹿兒嶋_ハ被_レ遣、其繪圖を御領内之繪圖_ニ取合せ見申_外上、御請取せ_外、其後書枚_ニ清書爲被_レ仰_外付事_外、此節之儀_ハ先年之通_ニ有之度旨、是_ハ甚右衛門より御持合之御方_ハ申談_外様_ニ可申_外付_外、

一肥後・豊後_ハ之合繪圖ハ、上リ繪圖之仕立様承届_外已後、其趣を以御國境之繪圖相調、細川越中守様御方_ハハ遣可申_外、日州之内豊後_ハ相境_外所_ニ者、三浦喜岐守_ハ様御領分_ニあり間、先壹岐守様御方_ハ、甚右衛門より問合申、彼方_ハ返答之趣_ニ應_シ、中川因幡守様御方_ハ者問合有之筋_ニ仕可宜_外、

一古繪圖_ニ者、山之口并梶山より飢肥_ハ罷_レ通_外道二筋程有之_外處、近年通路相止_外、ケ様之道筋_者、其分_ニ有被

差置事ニ表ハ哉、右道筋之儀ニ付ル者、出雲守様御方
方何角と申來儀表可有之ハ條、繪圖御奉行ハ承合置
可申ハ、

一御領國新田之員數不申出ハ、不叶分もハ、太鉢
壹萬石程表可有之と挨拶爲仕置可申ハ、

一日向國之繪圖 此御方様と、伊東出雲守様被 仰合、
御首尾被成可被差出旨、被仰渡ハ、先年繪圖被差出ハ
節ハ、日向國之繪圖表 此御方様より御首尾爲被成事
ハ間、此節之儀表、先規之通有之度被思召ハ條、如先
規有度旨を以、先繪圖御奉行御家來中ハ口うらを甚右
衛門より承合、繪圖御奉行ハ被仰出ハ、可相濟趣
ニ、御家來共申ハ、繪圖御奉行ハ右之旨可申出ハ、
繪圖御奉行御手前ニ表者、相濟間敷儀と御家來共申ハ
ハ、小笠原彦太夫殿を以小笠原佐渡守様ハ御内意可
被仰入候條、主計事彦太夫殿御宅へ參、此節繪圖被仰
付ハ付、日向國之繪圖者、伊東出雲守殿と相合、首尾
可仕旨被仰渡ハ、日向之儀者、往古方薩摩守家より支
配爲仕來譯表有之ハ、且又正保年間ニ繪圖被仰付ハ節
表、此方方首尾爲仕事ハ間、此節之儀表、先規之通ニ
御座有度存ハ條、右之趣を以何分ニ表宜筋佐渡守様へ

御内意被仰達被下度旨申達、左ハ、日州之儀、往古
より御支配被成來ハ譯、且又正保年間繪圖被差出ハ節
之儀、又者此節被仰渡ハ段、委細ニ彦太夫殿ハ可申
達ハ、繪圖御奉行御手前ニ表可相濟鉢ニ承及ハ、
佐渡守様御内意被仰ニハ及間敷ハ、將又此節御願之通
ニ者可難達儀と物音有之ハ共、日州之儀者、往古より
段、此御方様御家方御支配爲被成來ハ、此節御老中様
方ハ被聞召置ハ様ニ有度被思召ハ間、其趣を以彦太夫
殿ハ可申達ハ、

右之趣を以、島津勘解由殿・島津助之丞ハ得差圖、

首尾能様ニ相計可申ハ、右段、之譯者、專御家老中

致會得不被罷居ハ不叶儀ハ間、得と右之旨可申達

置ハ由 御意ハ、以上、

元禄十二年 卯五月十八日
嶋津主計

右之段、御直ニ御意ハ付ハ、主計方右之通書付ニ相

調、備 御覽ハ處弥宜ハ、右之儀者、御家老中得と納

得無之ハ不叶儀ニハ間、右之旨申達置ハ様ニ御意

ハ付、右之通書付ハ、御家老中へ差出置、壹通者江

戸ハ致持參ハ、

綱貴公御譜中

芳札令披見外、其方事、去月十五日殿中江被爲召、在所
江之御暇被下、其上城主列ニ被 仰付之旨、小笠原佐渡
守殿被仰渡之由、寔以安堵之儀、於我等亦大慶存外、依
之被差越使簡、被入御念之段令祝着外、猶期後喜之時外、
恐々、

朱カキ
元禄十二年

五月十八日

鳴津左京殿

回答

綱貴公御譜中

先レ是元禄十年丁丑閏二月四日

大樹降ニ 命于綱貴ニ曰、可下薩隅兩國・琉球國繪圖及日

州一國之地圖者、相ニ議于伊東大和守祐實ニ而調上進之、
依レ之書ニ記法制一、而賜ニ之綱貴一、閱レ之其書中有難ニ

辨別一、且因レ爲三州者島津家家號之地一、正保進獻之地
圖亦命ニ祖父光久一人一也、以故光久畫三三州之地圖一乃

獻レ之、今不レ依ニ舊格一、與ニ伊東家一、正ニ校日州之地
圖一、則背ニ正保之先蹤一、是以難ニ如之何一、於レ是爲レ

奉レ訴ニ于

將軍家一、元禄十二年己卯五月二十二日、使下ニ

島津主計久年永山休兵衛之赴中東武上也、

綱貴公御譜中

此御書吉貴公御譜中ニ無之

正文在文庫

八丁堀おはる殿、此程病氣御座外處、養生不被相叶、去
廿二日遠去、笑止之至存申外、此旨爲可申上如斯御座候、
誠惶誠恐敬白、

朱カキ
元禄十二年
五月廿五日

松平修理大夫
吉貴判

進上
中將様

今上

全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃 日光御門跡被爲 成
外儀被承之、恐悦旨尤候、紙面之趣各申談及言上外、恐
々謹言、

朱カキ
元禄十二年
五月廿六日

戸田山城守
忠昌判

松平薩摩守殿

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃 日光御門跡被爲 成

外儀被承之、恐悅旨尤候、紙面之趣得其意外、恐々謹言、

朱力キ

元禄十二年 五月廿六日

松平右京大夫

輝貞

柳澤出羽守

保明判

松平薩摩守殿

一筆致啓上外、然者明王院事、願王院と被改稱號、院家

被仰付之由承知仕、至私忝次第奉存外、右之旨宜預漏達

外、恐々、

朱力キ

元禄十二年 五月廿六日

御門様坊官

万里小路大進御房 (承信)

一筆令啓達外、然者京都并大坂町屋敷に差置外家來、伊

集院(欠明)主水・伊地知五兵衛と申者、御用之儀可申上外間、

可然様御差圖頼存外、右之旨爲可申入如此御座外、恐惶、

猶以先頃主水御役所に罷出外處、別る御懇意被仰聞

之由忝存外、以上、

朱力キ

元禄十二年 五月廿六日

建部内匠頭様 (敷字)

人々

一筆令啓達外、然者家來禰寢丹波後家・同娘上下四人、

從江府國元(濟班)に差越外に付而、御關所御手形御調被下忝存

外、爲御禮如此御座外、恐惶、

朱力キ

元禄十二年 五月廿六日

松平主計頭様

大久保玄蕃頭様 (忠)

岡部丹波守様 (勝)

水野長門守様 (忠)

村越伊豫守様 (直)

人々

全上

網貴公御譜中
正文在文庫
御札令披見外、
公方様益御機嫌能被成御座、先頃小石川御殿被爲成外
儀被承、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 上聞外、恐々
謹言、

朱力半
元禄十二年 六月二日

松平薩摩守殿
(編費)

阿部豊後守
正武判

(表紙)

追 舊 記 雜 録	網 貴 公 自元禄十二年六月 至同 年閏九月	吉 貴 公	卷二十五
-----------------------	------------------------------------	-------------	------

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃小石川御殿被爲成外
儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣得其意外、恐々謹言、

朱力半
元禄十二年 六月二日
(秘)

松平右京大夫
輝貞判

柳澤出羽守
保明判

松平薩摩守殿

網貴公御譜中 此御書吉貴公御譜中ニ在リ

一筆令啓外、其方弥可爲無吳玆重存外、然者與方、袖留
之祝も首尾能相濟外由玆重存外、祝儀之印迄目錄之通進
之外、委細者使口上申合外、恐々、

猶以、先頃芝屋敷ニ而七夜之祝之節、祝儀物被相贈
之由、大慶存外、以上、

朱力半
元禄十二年 六月二日

松平修理大夫殿
(吉費)
御宿所

全御譜中 此御書吉貴公御譜中ニ在リ

一筆令啓外、其方弥無別條之由玆重存外、於爰元爰相替

儀無之外間、可易心外、先頃芝屋敷與方平産男子出生、爲祝儀阿多太仲使申付差越外條、此段申達外、恐々、

朱力キ
元禄十二年 六月二日

松平修理大夫殿

御宿所

全上

一筆令啓達外、其御地御靜謐

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦御同意奉存外、次貴様頃日者、御參勤首尾能御禮を及被仰上、御堅固可被成御勤と珍重存外、拙者事及無別條、此節者緩々と在國仕外、此節用事之儀御座外、使差越申外、御見廻爲旁如此御座外、恐惶、

尚々先頃者、拙者爲賀之御祝儀、御目錄之通被懸

御意忝存外、自是表祝申外、目錄之表進入申外、以上、

朱力キ
元禄十二年 六月二日

鳥居播磨守様

人、

全上

正文在文庫
貴札致拜見外、然者先頃(酒井忠隆家、綱久女)慶雲院遺物爲持、致進覽之外付被仰聞外趣、被入御意儀奉存外、恐惶謹言、

朱力キ
元禄十二年 六月三日

松 薩摩守様

貴報

酒井鞆負佐
忠圍判

全御譜中

一筆致啓上候、

公方様益御勇健被成御座、恐悦奉存外、酷暑之節、猶以爲可奉伺御機嫌、差上使者申外、隨り目錄之通獻上仕外間、可然様御差圖奉頼外、恐惶、

朱力キ
元禄十二年 六月三日

正文在文庫

一筆致啓達外、

(編註)
中將様益御機嫌能被成御座と珍重奉存外、然者今度佐土原之儀、如古來、可爲城地之旨被

綱貴公御譜中
正文在文庫

仰出之、冥加之仕合難有奉存外、偏御威光故と忝次第筆頭不得申上外、依之爲御禮、以名代之使者如目錄致進上外、聊表嘉儀印迄御座外、此等之趣以御序宜預御披達外、頼入存外、恐、謹言、

朱力平
元禄十二年 六月三日

鳴津圖書殿
(久世)

鳴津左京
惟久判

鳴津圖書所迄芳札令披見外、其方弥無吳之旨珍重存外、我等儀及無別條外間、可易芳意外、然者佐土原之儀、如古來可爲城地之旨被 仰出、難有被奉存之由、委細之紙面令承知尤之事外、依之被差越使者、殊目錄之通贈給、被入念之段欣然之至外、恐、

朱力平
元禄十二年 六月六日

鳴津左京殿
回章

全御譜中

御札致拜見外、如仰、拙者儀(寛永寺家編册)上野御普請御手傳御用就相濟外、御懇之上意御腰物致拜領、其上家來之者御褒美頂戴仕、重疊有難仕合奉存外、依之爲御悅預示被入御念之段忝存外、猶期後音之時候、恐惶謹言、

朱力平
元禄十二年 六月十二日

松平薩摩守様
御報

(淺野)
松平安藝守
綱長判

全御譜中

當春於其御地、被仰聞外御額之事、則令申沙汰外處、此節從禁裏・洞中被仰出外御清書物數多外故、御延引之御事外、併近、御清書可有之候、以此旨可申述之由、所右大五殿(鼠)仰如此外、恐、謹言、

朱力平
元禄十二年 六月十三日

中西長門右衛門殿

(長之)
進藤修理亮
長判

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃山王 御社參之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之通各申談及 高聞外、恐々謹言、

朱力キ
元禄十二年 六月十三日

松平薩摩守殿

阿部豊後守
正武判

446 全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃山王 御社參之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之通得其意外、恐々謹言、

朱力キ
元禄十二年 六月十三日

松平右京大夫
輝貞判

柳澤出羽守
保明判

松平薩摩守殿

447 全上

全上

一筆致啓達外、

中將様弥御勇健可被成御座、珍重奉存外、然者於江府御

約諾申上置外御看致進上之外、甚暑之節無吳儀相届外之段、無心元存外得共差上申外、自然御披露被成外、不苦於被思召者、宜様御取成頼入存候、恐惶謹言、

朱力キ
元禄十二年 六月十四日

鳴津圖書様
(久恐)

人々御中

鳴津左京
惟久判

448 今御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又鳴津左京願之通佐土原城地被 仰付之、雖有之由得其意外、紙面之趣各一覽之事情、恐々謹言、

朱力キ
元禄十二年 六月十五日

松平薩摩守殿

阿部豊後守
正武判

449 今御譜中

正文在文庫

全御譜中

御札令披見、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤、將又嶋津左京願之通佐土原城地被 仰付、甞有之由得其意、紙面之趣承届、恐、謹言、

朱力キ
元禄十二年 六月十五日

松平右京大夫 輝貞判

柳澤出羽守 保明判

松平薩摩守殿

全御譜中

正文在文庫

貴札致拜見候、愈御堅固之由、珍重之御事、然者嶋津左京殿願之通佐土原城地被 仰付、於貴様難有思召之旨致承知、隨、御目錄之通被懸貴意、忝奉存、恐惶謹言、

朱力キ
元禄十二年 六月十八日

小笠原佐渡守 長重判

松平薩摩守様

貴報

正文在文庫

猶、老父、同前被悦申、以別紙可申入、得共、態不能其儀、相心得可申進之由被申、陽和院殿(光久繼室立松氏)早速申遣、同前可被悦申と存、

一書令啓達、其許御勇健御座、哉、然者來年愚息(時春)元服相催度、伊集院主水(久明)・伊知地五兵衛家來者子細申談候之處、早速相達、可有御助力之由、御懇篤之至不淺存、

首尾能可加首服大悦此事候、爲御禮如此、恐惶謹言、

朱力キ
元禄十二年 六月十八日

平松宰相 時方

松平薩摩守様

綱貴公御譜中

正文在文庫

一筆令啓上候、從薩摩守殿御使札被下、拜見仕候、弥御堅勝被成御座、目出度奉存、然者嶋津左京殿願之通、如前、佐土原城地被 仰出、珍重奉存、小笠原佐渡守殿に御挨拶申、段被聞召、御満足被思召候、依之太平布貳拾疋・干鯛一折被掛御意、被入御念忝奉存候、御序之時分宜様被仰上可被下、恐惶謹言、

朱力^キ
元禄十二年 六月十九日
(西丸留守)
庄田下總守
安利判

松平薩摩守様

御用人衆中

453 綱貴公御譜中

一筆令啓達^レ、當夏來朝之唐船三艘、去十五日歸帆被仰
付^レ聞、領内津、浦、入念^レ様可申付之旨、家來被召寄
被仰聞^レ趣、得其意存^レ、此旨爲可申入、用飛札如此御
座^レ、恐惶、

朱力^キ
元禄十二年 六月廿二日

(長崎奉行)(用高)
近藤備中守様

(同)(長守)
丹羽遠江守様

人、

454 全上 此御書吉貴公御譜中ニ在リ

先頃於八丁堀、おはる殿病氣之處、養生不相叶死去之由、
其方同前絶言語存^レ、依之預芳札入念事^レ、恐、

朱力^キ
元禄十二年 六月廿二日

松平修理大夫殿

455 綱貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見^レ、

公方様益御機嫌能被成御座、四月廿日東叡山御堂 御參

詣之儀被承之、恐悦旨尤候、紙面之趣各申談及 高聞候、

恐、譯言、

朱力^キ
元禄十二年 六月廿三日

松平薩摩守殿

阿部豊後守

正武判

456 全御譜中

正文在文庫

御札令披見^レ、

公方様益御機嫌能被成御座、四月廿日東叡山 御堂御參

詣之儀被承之、恐悦旨尤^レ、紙面之通得其意候、恐、謹

言、

朱力^キ
元禄十二年 六月廿三日

松平右京大夫

輝貞判

柳澤出羽守

保明判

松平薩摩守殿

一筆致啓達_レ、今度御用之儀御座_レ付、御自分迄以書付
申上_レ、萬端宜様被仰談可被_レ下_レ、願入存_レ、委曲伊集
院_(久美)三右衛門・酒匂源左衛門口上申合_レ付、不能詳_レ、恐
惶、

六月廿三日

鳴津左京

鳴津圖書様

人、御中

口上覺

一去年上野御普請御手傳被仰付_レ節、俄大分之物入共自
分之働を以相調_レ儀、究_レ難叶_レ處、段、用金無滞被
仰付之被_レ下、其上御人并至諸道具迄、御加勢被遊被_レ下
_レ、依之大切成御役儀無闕如相勸申_レ、外聞實儀共
ニ無殘所、偏御影故と忝奉存_レ、右之金子當年より及
返上仕度存_レ得共、殊之外内證差間、急ニ返上難仕儀
御座_レ間、今程御免被遊被_レ下_レ様申上度奉存_レ事、
一右之御役儀ニ付、上方ニ及餘程致借金、其上無間奉
願_レ儀ニ付、存之外物入共有之、兼_レ之借金ニ相加、

大分罷成致迷惑_レ、依之自分之用事急度令儉約、返濟
之方ニ申付、且又去年御内意相同申_レ通、家中へ出置
_レ知行半分之物成相添、上方之借金返濟申付筈ニ御座
_レ、雖然彼是僅成儀御座_レ得_レ者、左耳借金減可申様及
無御座_レ、其上近年家中漸々令困窮、兼_レ及難儀_レ躰
ニ者御座_レ得共、此節之儀別_レ大切ニ存_レ哉、自分
之渴命を及不願申付_レ趣、少々難澁仕_レ者無御座_レ、
至私感悦仕_レ、乍然右之通逼迫之者御座_レ得_レ者、半知
之物成重_レ申付_レ者、當分より奉公難勤輩及可有之
哉と不便之至御座_レ、就夫、せめて半知之物成を少々
輕申付度_レ事、

一右之通ニ御座_レ者、利分ニ及致不足、借金漸々ニ相
増申_レ、以後共ニ返濟及難叶罷成_レ者、御役目も
可難續と別_レ迷惑仕_レ、因茲近比申上兼_レ得共、御米
六千石程敷、又者、銀子三百貫目程當年中ニ拜借被仰
付度奉存_レ、左様御座_レハ、三四年之内ニ者借金餘
程可致減少哉と存_レ、左_レハ、最前より段々拜借被仰
付_レ御金を及、漸々返上仕度心底御座_レ、寔以去年以
來、大分之用金相調_レ様被仰付被_レ下_レ處、又々ケ様申
上_レ儀、御賢慮之程及如何敷奉存_レ得共、此節之儀、

全上

自分之才覺ニ否相調申事ニ無御座ハ、次致困究ハ家來共、猶以及難儀可申ト別ル不便之至御座ハ、因茲右之趣無據申上度存ハ間、御同役中ハ表被仰談、以御取成可然様被仰上、願之通被 仰付被下ハ様、偏頼入存ハ、委曲伊集院三右衛門・酒匂源左衛門口上申含ハ、以上、

朱力キ
元禄十二年 六月廿三日

嶋津左京

嶋津圖書殿
(久保)

一筆致啓上ハ、貴殿様弥御勇健可被成御座ト、玆重奉存ハ、然者今度從左京方御用ニ付、伊集院三右衛門・酒匂源左衛門申付差越申ハ、此等之段爲可申上奉捧愚札ハ、誠恐惶、

朱力キ
元禄十二年 六月廿四日

神宮司(純正)外記

淺山治右衛門(高重)

町田彌次右衛門(久應)

嶋 圖書様
(久保)
參御與力衆中

全御譜中 御書吉貴公御譜中ニ在リ

正文在文庫

一筆啓上仕候、先頃御賀之御祝儀申上ハ處、從貴公様表二種兩樽被下置之、忝次第奉存ハ、幾久拜受仕ハ、右之御禮爲可申上、如斯御座ハ、猶奉期後喜之時候、誠惶誠恐敬白、

朱力キ
元禄十二年 六月廿六日

松平修理大夫 吉貴判

進上 中將様

全上

一筆啓上仕候、甚暑之節御座ハ得共、貴公様益御機嫌能被成御座之旨、目出度奉存ハ、然者今年御賀爲御祝儀、御目錄之表拜受仕、誠以雖有次第奉存、幾久祝申ハ、猶奉期後喜之時ハ、誠惶誠恐敬白、

朱力キ
元禄十二年 六月廿六日

嶋津又八郎 忠英判

進上 中將様

全上

全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃護國寺被爲 成之儀被

承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及言上外、恐、謹言、

朱力^キ
元禄十二年

六月廿六日

阿部豐後守

正武判

松平薩摩守殿

463

全上

全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃護國寺被爲 成外儀被

承之、恐悦旨尤候、紙面之趣得其意外、恐、謹言、

朱力^キ
元禄十二年

六月廿六日

松平右京大夫

輝貞判

柳澤出羽守

保明判

松平薩摩守殿

464

網貴公御譜中

一筆致啓上外、去五日尾張中納言殿御逝去之旨承知仕、
(編感)

奉絶言語外、右之段爲可申上捧使札外、恐惶、

朱力^キ
元禄十二年

六月廿七日

阿部豐後守様
(正武)

戸田山城守様
(忠息)

土屋相摸守様
(政應)

小笠原佐渡守様
(長惠)

465

全上

一筆致啓上外、去五日尾張中納言殿御逝去之旨承知仕、

奉絶言語外、右之段爲可申上、捧使札外間如斯御座外、

恐惶、

朱力^キ
元禄十二年

六月廿七日

柳澤出羽守様

松平右京大夫様

466

全御譜中

正文在文庫

貴札則入御門主御披見外、然者明王院先頃御役儀并願王

院之院室迄被仰付外付、爲御禮御紙面之趣、被入御念外

儀、御滿悦思召外、此等之旨相心得、宜及御返答之由、

御座ハ、恐惶謹言、

朱力キ
元禄十二年 六月廿七日

万里小路大進
承信判

松平薩摩守殿

467

全上

全上

御札令披見ハ、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃觀音堂 御參詣之儀被

承之、恐悦旨尤ハ、紙面之趣各申談及言上ハ、恐、謹言、

朱力キ
元禄十二年 六月廿九日

阿部豊後守
正武判

松平薩摩守殿

468

全上

全上

御札令披見ハ、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃觀音堂 御參詣儀被承

之、恐悦旨尤ハ、紙面之趣得其意ハ、恐、謹言、

朱力キ
元禄十二年 六月廿九日

松平右京大夫
輝貞判

469

全上

全上

御札令披見ハ、

公方様益御機嫌能被成御座、五月八日東叡山 御堂 御

參詣之儀被承之、恐悦旨尤ハ、紙面之趣各申談及 高聞

ハ、恐、謹言、

朱力キ
元禄十二年 七月三日

土屋相摸守
政直判

松平薩摩守殿

470

全上

全上

御札令披見ハ、

公方様益御機嫌能被成御座、五月八日東叡山 御堂 御

參詣之儀被承之、恐悦旨尤ハ、紙面之趣得其意ハ、恐、

謹言、

朱力キ
元禄十二年 七月三日

松平右京大夫
輝貞判

柳澤出羽守
保明判

471

松平薩摩守殿

柳澤出羽守
保明判

全上

御札令披見レ、就甚暑之節

公方様御機嫌之御様躰、以使者被相伺之レ、益御勇健之御事レ間、可御心安レ、隨テ目録之通被獻之レ、各申談首尾好遂披露レ、恐レ、謹言、

朱カキ
元禄十二年
七月四日

松平薩摩守殿

土屋相摸守
政直判

472

全上

御札令披見レ、就甚暑之節

公方様御機嫌之御様躰被相窺之レ、益御勇健御事レ間、可御心安レ、隨テ目録之通被獻之レ、紙面之趣得其意レ、恐レ、謹言、

朱カキ
元禄十二年
七月五日

松平右京大夫
輝貞判

473

松平薩摩守殿

柳澤出羽守
保明判

綱貴公御譜中 此御書吉貴公御譜中ニ在リ、

一筆令啓レ、其方弥可爲無吳珎重存レ、我等儀も無別條レ間、可易芳意レ、然者愛壽丸事嶋津圖書齋子、徳慈丸事者彌寝丹波跡目ニ此節申付レ間、可被得其意レ、委細之儀者、家老中方可相達之旨申付レ條、可有承知レ、恐レ、

尚、愛壽丸・徳慈丸事付テ、我等了簡之委細者、先頃猿渡喜右衛門ニ申含趣レ間、其心得尤候、以上、

朱カキ
元禄十二年
七月六日

松平修理大夫殿

御宿所

474

綱貴公御譜中

一筆令啓レ、其方弥可爲無吳珎重存レ、我等儀も無別條

綱貴公五男愛壽丸、元禄五年壬申ノ誕生、此年八歳ニテ後圖書公方ト称ス、六男徳慈丸、元禄九年丙子ノ生ニテ此年四歳ナリ、後彌寝仙十郎清純ト称ス、参考ニ供ス

外間、可易芳意外、然者愛壽丸事鳴津圖書養子、德慈丸

事者禰寢丹波跡目ニ此節申付外間、可被得其意外、委細之儀者、家老中方可相達之旨申付外條、可有承知外、恐々、

尚、愛壽丸・德慈丸事付外、我等了簡之委細者、先比猿渡喜右衛門江申含趣外間、其得尤外(心脱力)、以上、

朱力^キ元禄十二年 七月六日

鳴津又八郎殿(忠莖)
御宿所

475 全御譜中

一筆令啓達外、先頃高輪屋敷御年貢地之内ニ致普請外付外、御斷申外、就夫每夜右之屋鋪江御出、且又品川・大井兩屋敷之繪圖書付等、從家來差出外節、段々御懇意被仰聞、首尾能相濟忝存外、此等之御禮爲可申入、如此御座外、恐惶、

朱力^キ元禄十二年 七月六日

(屋敷改)勝繩
細井左次右衛門様
人々、

476 全御譜中

一筆令啓達外、先頃高輪屋鋪御年貢地之内ニ致普請外付外、御斷申外、就夫每夜右之屋鋪江御出、且又品川・大井兩屋敷之繪圖書付等、從家來差出外節、段々御懇意被仰聞、首尾能相濟忝存外、此等之御禮爲可申入、如此御座外、恐惶、

朱力^キ元禄十二年 七月六日

能勢市十郎様(屋敷改)頼恒
人々、

477 全御譜中

一筆令啓外、今度城主列ニ被仰出、玆重存外、爲祝儀用使札外、依之祝外外、目錄之通進之外、委曲使者口上申含外、恐々、

朱力^キ元禄十二年 七月六日

鳴津左京殿(惟久)
御宿所

478 綱貴公御譜中

正文在文庫

全上

阿部豐後守殿

朱力年
元禄十二年 七月十日

爲端午之御祝儀、御帷子單物獻上之仕_レ處、被成下 御
内書、謹_レ頂戴仕難有仕合奉存_レ、右之趣可然様御披露
所仰御座_レ、恐、

全御譜中

七月九日

鳴津圖書殿
(久洪)

鳴津左京

惟久判

從
中將様被成下尊書、謹_レ致拜見候、先以益御機嫌能被成
御座之旨、目出度奉存_レ、如被仰下候、今度私儀城主列
被 仰出之、難有仕合奉存_レ、依之爲御祝儀、御使者殊
御太刀一腰・御馬代黄金十兩・琉球太平布五十疋并御肴
二種・御樽一荷致拜受之、寔以被爲入御念之段、過分至
極奉存_レ、右之御請爲可申上、御自分迄如此御座_レ、以
御序宜預御披露_レ、頼入存候、恐、謹言、

全上

此御書吉貴公御譜中ニ在リ

進上 中將様

朱力年
元禄十二年 七月十二日 松平修理大夫 吉貴判

一筆啓上仕候、先以海陸益御機嫌能被遊御歸國、目出

全御譜中
正文在文庫

此御書吉貴公御譜中ニ在リ 尚、書ハ無之

七月十日

阿部豐後守様

人、

一筆致啓上候、御内書頂戴仕_レ付_レ、家來之者_レ御侍
服拜領之仕、誠以忝次第奉存_レ、御禮爲可申上如斯御座
_レ、恐惶、

全上

度奉存外、右之御祝儀爲可申上、差上輕使申外、仍御看二種・御樽一荷進上之仕外、於當御地、一門中別條無御座、私事々無恙罷在外之間、尊慮安可被思召外、猶奉期後喜時候、誠惶誠恐敬白、

元禄十二年 七月十日

松平修理大夫

吉貴御判

進上 中將様

網貴公御譜中

一筆致啓上外、領内被遣外流人請取之者、大坂江差越申外處、流人三拾九人之内、一人者相煩候付外、江戸江被殘置、一人者大坂ニ於於牢中相果、相殘三十七人并從大坂出家一人、五月廿八日於大坂、從町奉行衆被相渡之、乘船仕、去九日鹿兒嶋江到着仕外、病人死人之儀者、別紙書付差出申外、此段爲可申上以飛札如此御座外、恐惶、

朱力キ
元禄十二年 七月十八日

阿部豊後守様

人々

全上

一筆令啓達外、先頃御渡被成外領内被遣外流人三拾八人、去九日鹿兒嶋江致着船外、浦次御廻狀一通流人船ニ被相渡之、浦、江之御觸狀二通致返進外、此旨爲可申入、以飛札如此御座外、恐惶、

朱力キ
元禄十二年 七月十八日

大坂町奉行 宗應
松平玄蕃 頭様

人々

全上

一筆令啓達外、先頃御渡被成外領内被遣外流人三拾八人、去九日鹿兒嶋江致着船外、浦次御廻狀一通流人船ニ被相渡之、浦、江之御觸狀二通致返進外、此旨爲可申入、以飛札如此御座外、恐惶、

朱力キ
元禄十二年 七月十八日

大坂町奉行 宗應
永見甲斐守様

人々

一筆令啓達外、先頃御渡被成外領内被遣外流人三拾八人、去九日鹿兒嶋江致着船外、浦次御廻狀一通流人船ニ

被相渡之、浦々之御觸狀二通致返進外、此旨爲可申入、以飛札如此御座外、恐惶、

朱力キ
元祿十二年 七月十八日

(大坂舟手)(廣徳)
小濱民部様

人々

487
全御譜中

正文在文庫 此御書吉貴公御譜中ニ無之

尊書謹の拜見仕候、弥御機嫌能被成御座、珍重之御儀奉存外、然考此節、奥の袖留之爲御祝儀被下御使、殊御目錄之表拜受之仕、忝次第奉存外、將又於私表弥無吳罷在外間、尊意安被思食可被下候、誠惶誠恐敬白、

朱力キ
元祿十二年 七月十八日

松平修理大夫
吉貴判

進上 中將様

488
綱貴公御譜中

正文在文庫

内、御願之額之内稻荷社額、(近衛家熊)右大臣殿被染御筆相調外條被遣外、諏訪社額及大概相調外得共、餘御延引外間、先

此度被遣外、度々申上外得共、無御如在子細有之遅々之事外、先一社相調珍重存外、恐惶謹言、

朱力キ
元祿十二年 七月廿五日

松平薩摩守様

(時憲)
平松中納言

(花押)
No5

489
全上

正文在文庫

内、御願望之稻荷社額被染御筆候、被遣之外、諏訪社額追付可相調外、彼は無據御用等及延引外段、宜令傳達之由、右大臣殿御命外、恐惶謹言、

朱力キ
元祿十二年 七月廿五日

松平薩摩守様

平松宰相
時方

490
全上 此御書吉貴公御譜中ニ在リ

全上

尊書謹の拜見仕候、先頃於芝屋敷御平産男子出生之爲御祝儀、阿多太仲被差登外付の、被仰下之趣忝次第奉存外、將又於爰許、一門中相替儀無御座外間、尊慮安可被思食外、猶奉期後喜之時候、誠惶誠恐敬白、

朱力^キ
元祿十二年 七月廿五日

松平修理大夫
吉貴御判

進上
中將様

491
網貴公御譜中

正文在文庫

從 中將様被成下御書、謹_カ致拜見_ハ、殊當年御賀之爲
御祝儀、干鯛一折・御樽代二百疋拜受之、忝次第過分至
極奉存_ハ、從是_カ御祝儀申上候御禮被仰下、御慰勸之御
儀奉存_ハ、右之御禮御請旁爲可申上、御自分迄如斯御座
_ハ、御序之刻宜預御披達_ハ、賴入存候、恐々謹言、

朱力^キ
元祿十二年 七月廿六日

嶋津左京
惟久判

嶋津圖書殿
(久松)

492
全御譜中

一筆致啓上_ハ、

公方様益御勇健被成御座旨、恐悦奉存_ハ、猶以御機嫌爲
可奉伺之、差上使者申_ハ、因茲御肴一種獻上仕_ハ間、可
然様御差圖所仰御座_ハ、恐惶、

元祿十二年 七月廿七日

493

網貴公御譜中
口上覺

南京唐船一艘人數三拾九人乘、去年九月十四日琉球之内
大嶋西古見_(大島郡)之申所_カ致漂着、水薪等之用事相達、同月晦
日致出船_ハ、尤不依何色商賣不仕_ハ由、此節從琉球中山
王申越_ハ付_カ、右之趣長崎奉行衆_カ申越_ハ、此段申上_ハ、
以上、

元祿十二年 七月廿七日

494
全上

正文在文庫

尊札拜見仕候、先頃相渡申_ハ御領内_カ被遣_ハ流人三拾八
人、去九日鹿兒嶋_カ致到着_ハ由、浦次廻狀壹通、流人船
_カ相渡_ハ浦々_カ之觸狀貳通御返被成、御紙面之趣承知仕
_ハ、恐惶謹言、

朱力^キ
元祿十二年 七月廿八日

大坂町奉行
松平玄蕃頭
忠周判

松平薩摩守様

尊報

全御譜中

一筆令啓達外、然者南京唐船一艘、去年九月十四日、琉球之内大嶋西古見と申所に致漂着、同月晦日致出船外由、此節從琉球中山王申越外、此旨爲可申入如此御座外、委曲家來共申上外、恐惶、

朱力キ
元禄十二年 七月廿八日

(長崎奉行)(用高)
近藤備中守様

(同)(長守)
丹羽遠江守様

人々

全御譜中

正文在文庫

尊札拜見仕外、先頃御家來衆に相渡外流人三拾八人、去九日鹿兒嶋に致到着外由、承知仕外、依之浦觸證文壹通并流人船へ相渡外折紙貳通御返被成、請取申外、御紙面之趣被爲入御念御儀奉存外、恐惶謹言、

朱力キ
元禄十二年 七月廿八日

(大坂町奉行)
永見甲斐守

重直判

松平薩摩守様

參尊報

全上

全上

尊書拜見仕候、先頃御領内に遣外流人三十八人、去九日鹿兒嶋に到着仕外由、浦次之廻狀壹通、流人船に相渡外證文二通御返進被遊外、因茲被入御念被仰下承知仕候、恐惶謹言、

朱力キ
元禄十二年 七月廿八日

松平薩摩守様

尊報

(大坂舟手)
小濱民部

文字シレス
判
(広隆)

網貴公御譜中

此御書吉貴公御譜中ニ無之

正文在文庫

猶、爲端午之祝儀、目錄之通進之外、爲謝禮別紙示給趣、是又入念儀存外、將又爲七夕之祝儀、目錄之通被相饋之、欣然之至外、以上、

芳札令披見外、然者此方奥に留守向之料理振舞被申外儀付外、又八郎方へ委細被達置之由、然共參府前ニ來、窻外儀有之、六月十三日於又八郎部屋、我等も同前ニ振舞相濟外段、從又八郎申越外由、依之示給紙面之趣、念入外儀令怡悦外、恐々謹言、

朱力年
元祿十二年 八月朔日
薩摩守 綱貴御判

松平修理大夫殿
回章

499

全上

一筆啓上仕り、殘暑甚御座り得共、弥御勇健ニ被成御在國之旨、玆重奉存り、然者愛壽丸殿嶋津圖書方養子、德慈丸殿禰寢丹波跡目養子被仰付り由、内所迄被仰下承知仕、目出度御事奉存り、右爲御悅如斯御座り、恐惶謹言、

朱力年
元祿十二年 八月三日
鳥居播磨守 忠裁判

薩摩守様
参人、御中

500
全上

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被獻之候、首尾好遂披露り、恐、謹言、

朱力年
元祿十二年 八月三日
小笠原佐渡守 長重判

土屋相摸守 政直判

戸田山城守 忠昌判

阿部豊後守 正武判

松平薩摩守殿

501

綱貴公御譜中

正文在文庫

去月廿八日之尊書拜見仕り、然者南京唐船一艘、去年九月十四日、琉球之内大嶋西古見と申所口致漂着、同月晦日出船仕り由、從琉球中山王、此節申越候之由、依之被仰下り趣承知仕り、委曲從御家頼衆被申越り通承承届り、恐惶謹言、

朱力年
元祿十二年 八月四日

(長崎奉行)
丹羽遠江守 長守判
(同)
近藤備中守 用高判

松平薩摩守様
参貴報

502

全御譜中

覺

其方儀、此度城主列ニ爲被 仰付儀ニ得共、家中之仕置萬端之儀、就中入念無怠可有沙汰^レ、家來共式法を不亂、正道ニ相勤^レ様連、可被申付^レ、每物細ニ被承之、氣を可被付儀專要ニ^レ、未年若ニ有之^レ付^レ者、何角家來共ニ任置、大形之儀^レ於有之^レ者家之衰微ニ^レ、其方并家來共、身之分限を不顧不相應之儀^レ有之^レハ、御奉公^レ不相調管ニ^レ間、能^レ了簡尤^レ、且又去年上野御手傳付^レ物入有之、差迫^レ者、此節願之趣被申聞^レ、此方ニ表上野中堂御手傳付^レ者、大分^レ之入目^レ者、願之儀^レ者難達時節ニ^レ得共、城主列ニ^レ被 仰付^レ處、右式被差迫候^レ者、御奉公難調管^レ付^レ者、難黙止、此方之不勝手を差捨、此節迄^レ者令扶助、八木五千石於大坂遣之^レ、重願之趣雖有之相達儀難成^レ、委曲家老中より可達之旨申付^レ條、可被得其意^レ、以上、

朱力キ
元禄十二年 八月五日

嶋津左京殿

全御譜中

一筆令啓^レ、然者左京殿御所帶被差迫^レ付^レ者、伊集院三

綱貴公御譜中

覺

右衛門・酒匂源左衛門方、嶋津圖書迄被差越、左京殿御書付之趣并兩使口達之旨^レ、圖書より申聞、中將様達貴聽^レ處、八木五千石御扶助^レ、右付^レ者左京殿に御書付被遣、御意之旨趣拙者共よりも別紙を以申達^レ、恐

朱力キ
元禄十二年 八月五日

肝付主殿(欠)

喜入安房(欠)

嶋津中務(欠)

嶋津圖書(欠)

町田彌次右衛門殿

淺山 治右衛門殿

神宮司 外 記殿

御宿所

一左京殿上野御手傳付^レ者、御入用銀從此方様被借遣^レ五百五拾六貫目之儀、内證被差迫^レ間、今程御返濟御斷ニ^レ、且又右御手傳付^レ者、上方ニ^レ者餘程借金有之、城地願ニ^レ付^レ者、物入有之、兼之之借金ニ相加及大分

被差迫り、依之米六千石歟、銀三百貫目歟、當年中：御借用被成度之由あり、伊集院三右衛門・酒匂源左衛門方被差越、左京殿御書付之趣致承知、中將様達貴聞り、

一 飛彈守殿并式部少輔殿番之節、左京殿家督罷成り(島津忠高)
(聯)

及、大分之御加勢有之、難儀を御救り處、去年御手傳に付る被遣り銀子、今程御返濟御免之筋あり、又、此節之御願之儀、何共難被仰達儀にり、此方様之儀も上野中堂御手傳付る、御物入有之、於上方表大分之御借金あり、壹ヶ年：銀子千貫目餘宛毎年年賦に返濟いたし、其上御家中漸々令困窮り得共、御手付及不能成、鹿兒嶋御城之火災于今御普請及不調、旁以御差迫り節り得者、過分之借金高、便々と手付及無之被差置りハ、さきく猶更可被差迫儀に表り、依之此一涯迄者御助力をも可被成と被思召り故、米を以被遣之り、右之米佐土原に差越りハ、御遠慮之譯及有之り付る、於大坂可相渡り、此方御手船あり大坂に積届させ、現米五千石當年秋・來年秋兩度に可相渡之旨被仰出り、五千石之外運賃米七百石者、此方より申付筈にり、一 左京殿御書付に表此節之願相違りハ、三四年之内に

御借金餘程可致減少り、最前より段々御借金漸々可被相濟之由り得共、漸々と御返濟之儀者、限もなき事にり、此方様御不勝手を被差捨、御願被相達儀にり間、上野御手傳付る之御用金、此節之米五千石、來年より拾ヶ年を以不殘御返濟可有之り、於其儀者、來年より十ヶ年迄之間、壹年何程宛御返濟有之り得者、御手傳付る之五百五拾六貫目并此節之五千石目成申り由、堅固に書付仕、家老中連印あり急度可被差越り、一 左京殿御所帶難被相續り付る、家中半知之物成、重く御申付りハ、當分より奉公難勤輩及可有之り、就夫せめて半知之物成を少々輕被仰付度之旨、左京殿御書付に相見得り、三右衛門方・源左衛門方に及、右半知物成之儀、段々爲相尋り處、二ツ半物成に申付筈にり由、此物成別る輕く、其上反米をも右二ツ半之内に相籠メ、上ヶ地外之殘高反米及、半知物成二ツ半之内より出申之由り、左り得者、左京殿藏方に相納り半知之物成ハ、別る少分あり屹立、御内意を及爲被仰上半知之詮及無之り、其上此方様は老重疊御無心被仰上、御差迫之上あり得共、御助力り處、御家中之儉約者、大形に相見得り儀如何にり、此儀付る者、左京殿并家

老中ニ委專了簡も可有之事ニ付、

一左京殿事未御年若ニ付得者、毎物細ニ御差圖難相達儀も可有之付、家老中并頭立付面々、正道之心入を專ニ仕、邪儀之働毛頭無之、左京殿爲を存、相勤付様無之付ハ、さき／＼家之衰ニ付間、能々入念所帶方ニ付而委、可成程令簡略、内外共ニ相調付様可仕付、且又家中之面々委驕ケ間敷儀無之、相應より者諸事輕ク仕、向後 公義向之御奉公相達付様ニ可心懸儀肝要ニ付、此已後左京殿何様ニ被差迫付る委、佐土原家ニ付而、先年より大分之御助力ニ付間、重る御加勢被成間敷付間、此段委左京殿并家老中ニ委得心仕付様ニ可相達之旨被仰付、

朱力平
元禄十二年
八月五日

肝付主殿(久世)
喜入安房(久松)
新納美作(久松)
鳴津中務(久世)
鳴津圖書(久世)

佐土原

家老中

505

全御譜中

貴札致拜見付、然者今度御用之儀ニ付而、伊集院三右衛門方・酒匂源左衛門方被差越、別紙之御書付并右兩人口達之趣具致承達、同役中申談 中將殿ニ申上付處、此節米五千石御助力被成、御書付被遣付、右ニ付而家老中ニ可申達之旨、 中將殿御意之趣有之段々之旨、同役中連署を以申達付間、可被聞召達付、猶三右衛門方・源左衛門方ニ申含付間、不能詳候、恐惶、

朱力平
元禄十二年
八月五日

鳴津圖書

鳴津左京様

貴報

506

全御譜中

御狀令披見付、然者左京殿より御用之儀ニ付而、伊集院三右衛門方・酒匂源左衛門方被差越、左京殿御書付之趣致承達、同役中遂相談、中將様達 貴聞、 御意之旨同役中連署を以相達付、恐々、

朱力年
元禄十二年 八月五日 島津圖書

町田彌次右衛門殿

淺山 治右衛門殿

神宮司 外 記殿

御宿所

507 綱貴公御譜中

正文在文庫

貴札致拜見外、就尾張中納言殿逝去、爲御悔被仰聞外

御紙面之趣、(綱貴)甲府殿に令洩達外處、被入御念外段、從私

宜申述旨御座外、恐惶謹言、

朱力年
元禄十二年 八月八日 戸田長門守 忠利判

松平薩摩守様

508

全上
全上

御札令披見外、尾張中納言殿逝去之儀被承之、被絶言語
之由、得其意外、依之被差越使者外紙面之趣、各申談及

上聞外、恐々謹言、

朱力年
元禄十二年 八月九日 小笠原佐渡守 長重判

松平薩摩守殿

509 全上
全上

全上

御札令披見外、尾張中納言殿逝去之儀被承之、被絶言語
之由、得其意外、紙面之趣承届外、恐々謹言、

朱力年
元禄十二年 八月九日 松平右京大夫 輝貞判

柳澤出羽守 保明判

松平薩摩守殿

510 全上
全上

全上

尾張中納言逝去付由、杏路預示誨御深志之至存外、爲御
禮令啓達外、恐々謹言、

朱力年
元禄十二年 八月十日 水戸少將 吉孚判

松平薩摩守殿

人々御中

六月廿七日之御札致拜見外、先以其御地御平安、
 公方様益御機嫌能被成御座之段被仰聞、恐悦御同意奉存
 外、次貴様御堅固御勤之由、玆重存外、然者從 御臺様
 狹犬御用付外、女中衆より申來外、御犬毛付并女中より
 の文寫被差越、致一見外、自

御臺様御用之御犬之儀、此程從去方拙者に申來外付外、
 領内折角相尋申外得共、未御用罷成外犬、尋出不申外、
 御用之御犬御座外ハ、貴様迄差越可申外得共、先達外
 從去方申來外故、其方に差越可申と存外、此段被聞召
 達、御城女中方に宜様被相達可被下外、女中衆より之
 文之寫者、此方に召置申外、御犬毛付者脇方に可被仰達
 儀表可有之と存、返進申外、恐惶、

朱力年
 元禄十二年 八月十三日

松平大膳太夫様
 御報

一筆令啓達外、暹羅出來朝唐船一艘、去ル九日領内屋久
 嶋之内一湊に致漂着候に付外、如例番船付置申外間、日
 和次第當國に可送越旨、在番之者申越外、到着外ハ、

其許に差越可申外、委曲從家來共申上外、恐惶、

朱力年
 元禄十二年 八月十四日

近藤備中守様

丹波遠江守様

人々

全御譜中

口上覺

暹羅出、來朝唐船一艘、人數百貳人乘、去ル九日領内屋
 久島之内一湊に致漂着外付外、如例番船等付置申外、日
 和次第當國に可送越旨、彼地在番之者申越外條、到着仕
 外者、警固之者差副、長崎に送越可申旨、長崎奉行衆も
 申越外、此段申上外、以上、

朱力年
 元禄十二年 八月十四日

全御譜中

正文在文庫

一筆令啓達外、弥御無爲外哉承度存外、隨り領所之鯨三
 尺令進覽之外、尚期後音之時外、恐、謹言、

朱力_キ
元祿十二年 八月十五日 水戸宰相 綱條判

松平薩摩守殿
人、御中

515 全御譜中

一筆令啓達_レ、此程申達_レ領内屋久嶋一湊_ニ漂着之唐船
去十三日當國山川湊_(攝津郡)迄致着船_ハ間、警固之者相添、其許
_ニ差越申_レ、委曲從家來共可申上_レ、恐惶、

朱力_キ
元祿十二年 八月十六日

近藤備中守様

丹波遠江守様

人、

516 全御譜中

一筆令啓達_レ、去十三日領内京泊_(川西)と申浦_ニ唐船一艘、同
十四日脇元_(阿久根)と申浦_ニ唐船一艘、致漂着_レ付_テ、番船付置
_ハ、兩艘共警固之者相副、日和次第其許へ差越可申_レ、
委曲從家來共可申上_レ條、不能詳_レ、此旨爲可申入用飛
札如此御座_レ、恐惶、

朱力_キ
元祿十二年 八月十六日

近藤備中守様
_(長崎奉行)
丹波遠江守様
人、

517 全御譜中

正文在文庫
中將様方_ハ以御使者尊書被成下奉拜見_レ、先以倍御機嫌能
被成御座、目出度御儀奉存_レ、然者拙僧儀、先頃出羽國
羽黒山兼帶大僧都拜任被仰付_レニ付、御書面之趣、殊爲
御祝詞、御目錄之通被下置、幾久と拜受仕、重疊忝仕合
奉存_レ、御禮之儀、何分_ニも宜預御取成_レ、恐惶謹言、

朱力_キ
元祿十二年 八月十六日

願王院

智周判

中將様ニ

御近所衆中

518 全御譜中

正文在文庫 此御書吉貴公御譜中ニ在リ
尊書拜見仕候、貴公様益御機嫌好被成御座_レ由、目出度
奉存_レ、然者愛壽丸事島津圖書智養子、德慈丸事禰寢丹_(久世)

波跡目養子、此節被仰付外旨、被 仰下外趣奉承知外、

右付外、家老中より申越外段、且又猿渡喜右衛門(信忠)を以、

被仰下外趣奉、委細承知仕外、猶奉期後喜之時候、誠惶

誠恐敬白、

朱力半
元禄十二年 八月十八日
松平修理大夫
吉貴判

進上
中將様

519
全御譜中

正文在文庫

尊書拜見仕候、

貴公様益御機嫌能被成御座、目出度御儀奉存候、然者愛

壽丸事嶋津圖書賀養子、徳慈丸事禰寝丹波跡目養子被仰

付候付外、被仰下候趣奉承知候、家老中方申越候段、且

又猿渡喜右衛門ニ被仰下候趣、委曲承知仕候、此等之

御請爲可申上如斯御座候、猶奉期後喜之時候、誠惶誠恐

敬白、

朱力半
元禄十二年 八月十八日
嶋津又八郎
忠英判

進上
中將様

520
全御譜中

正文在文庫

一筆致啓達候、先頃以兩使御用之儀申上外處、 中將様

達 御聞、爲御助力御米五千石、於上方拜借被仰付之旨

被仰出之、寔以每度御厚恩之段、忝仕合奉存外、右之御

禮爲可申上、御自分迄以使者御着一種致進上之外、御序

之節宜預御披達外、頼入存外、恐々謹言、

朱力半
元禄十二年 八月十八日
嶋津左京
惟久判

嶋津圖書殿

521
全上

全上

一筆致啓達外、先頃以兩使御用之義申上外節、從 中將

様以御書付、被 仰下之趣、謹々致拜見畏奉得其意候、

誠以被爲入御念御儀、忝次第奉存外、右之御請爲可申上

如此御座候、此旨以御序宜預御披達候、頼入存外、恐々

謹言、

朱力半
元禄十二年 八月十八日
嶋津左京
惟久判

中將様
御近習衆中

一筆致啓達_レ、然_レ今度家來伊集院三右衛門・酒匂源左衛門を以御用之儀申上_レ、各被仰談、中將様達御聽、爲御助力御米五千石御借可被下_レ之旨、被 仰出_レ、其上家老共_レ御誼之趣、各より以御書付被仰下、具承知仕、段、被爲入御念之段、過分至極忝次第筆頭不得申上_レ、右之御禮爲可申上、爲使者神官司外記_(金細)差上申_レ、委曲口上申合_レ、恐惶、

朱力_キ
元禄十二年 八月十八日

鳴津左京

鳴津圖書様

鳴津中務様

新納美作様

喜入安房様

肝付主殿様

人々御中

口上覺

一今度左京上野御手傳付_レ、其御方様より拜借被申_レ、五百五拾六貫目之銀、今程返濟之儀御斷被申上、且又右

御手傳付_レ、上方_ニる_レ余餘程借金被致、城地願_ニ付_レも物入有_レ之、兼_レ之借金_ニ相加、及大分内證被差迫_レ、依之御米六千石歟、銀三百貫目歟、當年中_ニ御借可被下旨、伊集院三右衛門・酒匂源左衛門を以、右之趣書付各迄被差上_レ、中將様被達 貴聞、被 仰出_レ趣、一々御書付之通、謹_レ奉得其意_外事、

一(金細)飛騨守并式部少輔番代之節、左京家督_ニ罷成_外も、

大分之御加勢を以難儀を御救被成_レ處、去年御手傳付_レ、被遣_レ銀子今程返濟御免之筋_ニ、又、此節之願之儀難御叶儀_レ、御方様_ニ表上野中堂御手傳付_レ御物入有_レ之、於上方表大分之御借金_ニ、壹ケ年_ニ銀子千貫目餘宛、毎年年賦_ニ御返濟被成、其上御家中漸々令困窮_レ得共、御手付も難被成、鹿兒島 御城之火災御普請、于今不相調、旁以御差迫之節_ニ、雖然過分之借金高、便々_と手付表無之被差置_外ハ、さき々_と猶以可被差迫儀_ニ、依之此一涯迄之御助力を表可被遊_レと被爲思召_外故、米を以被遣_外、右之米佐土原_ニ被差越_外儀も御遠慮之譯表有_外付_レ、於大坂御渡可被下_レ、其上御手懸_レ大坂_ニ御届させ、現米五千石、當秋・來年秋兩度_ニ御渡可被下旨、被仰出_レ、五千石

之外運賃米七百石者御方様を被仰付筈に由、御紙面之趣奉得其意、誠無據御扶助被遊被下り段、左京并至拙者共別難有仕合奉存外事、

一左京より此節之願相叶りハ、三四年之内に借金餘程可致減少り、最前より段々借金漸々可被相濟之由り得共、漸々と返濟之儀者限なき事り、御方様御不勝手之を被差捨、願之通御達被下儀り間、上野御手傳付之由金、此節之米五千石、來年より十ヶ年迄の間、一ヶ返濟可被申り、於其儀者來年より十ヶ年迄の間、一ヶ年何程宛返濟有之り得者、御手傳付之五百五拾貫目并此節之五千石目成申り由、堅固に書付仕、家老中連印に急度可差上之旨、御紙面奉得其意返濟之盛、委曲別紙書付差上申り事、

一左京所帶難相續り付る、家中半知之物成重く被申付り者、當分より奉公難勤輩者可有之り、就夫せめて半知之物成を少々輕被申付度旨、以書付被申上り、右半知物成之儀、三右衛門・源左衛門方に及段々御尋させ被成り處、二ツ半物成に被申付筈に由、此物成別るからく、其上反米を及右二ツ半之内相籠メ、上ヶ地外之殘高反米及半知物成二ツ半之内より出申り由、左り

得者左京藏方に相納り半知物成者、別る少分なる屹立、御内意を及爲被申上半知之詮及無之り、其上御方様に及者重疊御無心被申上、御差迫之上にも御扶助被遊り處、家中之儉約者大形に相見得り儀、如何に被爲思召り、此儀に付る左京并家老中に及専了簡も可有之旨、御紙面奉得其意、尤之御儀に奉存り、此段最前より中上り通、家中之輩別る困窮仕、半知之外反米等申付り者、當時より奉公難續者數多可有之と、右之通被申付外事、

一左京儀末年若にり得者、每物細に差圖難被相達儀も可有之り、家老中并頭立り面々正道之心入を専仕、邪儀之働毛頭無之、左京爲を存相勤り様無之りハ、さきく家之衰にり間、能く入念、所帶方に付る者、成程令簡略、内外共に相調り様可仕り、且又家中之面、及驕け間鋪無之、相應より者諸色かるく仕、向後公義向之奉公相達り様可心懸儀肝要に被爲思召り、此以後左京何様被差迫り者、佐土原家に付る者、先年より大分之御助力にも候間、重る御加勢被成間敷り間、此段左京并家老中に及得心仕り様可被相達旨、被仰出り由、御書付之趣一々承知仕、左京方に具申聞り

事、

右段、中將様御誂ニ外間、謹ヨ奉得其意、急度御請可申上之旨、御書面之趣奉畏、誠被爲入御念外儀、左京并至拙者共、別ヨ難有仕合奉存外、右御請爲可申上如此御座外、以上、

朱力キ
元禄十二年
八月十八日

神宮司 外記
(正統)

淺山 治右衛門
(高重)
町田彌次右衛門
(久盛)
伊集院三右衛門
(久美)
宇宿 傳左衛門
(久巡)

島 圖書様
島 中務様
新 美作様
喜 安房様
肝 主殿様

524 全御譜中

一筆致啓達外、然者今度家來伊集院三右衛門・酒匂源左衛門を以、貴様迄御用之儀申上外處、各被仰談 中將様 達 御蹕、爲御助力御米五千石御借可被下旨、被 仰出

525 網貴公御譜中

之忝次第奉存外、依之家老共方に御誂之趣、各より以御書付被仰下具承知仕、段々被爲入御念之段、過分至極奉存外、誠最前より段々大分之御用御聞被下、又々此節無據申上外處、御助力被遊忝次第筆紙不申上得候、此旨御同役中江及宜被仰達可被下外、右之御禮爲可申上、爲使者神宮司外記差上申外、委曲口上申含外、恐惶、

朱力キ
元禄十二年
八月十八日
嶋津左京

鳥津圖書様
人々御中

一 銀五百五拾六貫目
一米五千石

但代銀三百貫目、石ニ付六拾八匁
貳口合、銀八百五拾六貫目

右嶋津左京方より拜借被申外、返上之儀者、來辰年より壹ヶ年銀八拾五貫六百目宛、十ヶ年限年賦を以毎年極月限、於大坂御藏屋敷無滞返濟可被申外、仍證文如件、

元禄十二年己卯八月十八日

神宮寺(同) 外記(同)

淺山 治右衛門〇

町田彌次右衛門〇

伊集院三右衛門〇

宇宿 傳左衛門〇

高橋 左門殿

野村太左衛門殿

526 綱貴公御譜中

一筆令啓達(同)外、此程申達外領内京泊浦江漂着之唐船一艘、

警固之者相副、其許江差越申外、委曲從家來共可申上

外、恐惶、

朱力キ
元禄十二年 八月廿一日

近藤備中守様

丹波遠江守様

全御譜中

正文在文庫

去十四日之尊書拜見仕外、暹羅出、來朝之唐船壹艘、今

月九日御領内屋久嶋之内一湊江致漂着外付、如例番船等(船毛)

附置外間、日和次第其表江可被送越之旨、彼地從在番中

申來外之條、到着外若此地江可被差遣之旨承知仕外、委

曲自御家來衆被申越外趣承届外、弥諸事如前、被仰付、

其元着船次第早、當津江可被送遣外、恐惶謹言、

朱力キ
元禄十二年 八月廿一日

丹羽遠江守 長守判(長崎奉行)

近藤備中守 用高判(同)

松平薩摩守様 參貴報

528 全御譜中

一筆令啓達外、此程申達外領内脇元江漂着之唐船一艘、(何久銀)

警固之者相副、其許江差越申外、委曲從家來共可申上外、

恐惶、

朱力キ
元禄十二年 八月廿二日

近藤備中守様

丹波遠江守様

人、

端午之 御内書可被成御渡外間、明日五時過 御城江家
來之者差上可申之旨、畏奉存外、恐惶、

朱力平
元禄十二年 八月廿二日

大久保加賀守様 (忠 題)

阿部 豊後守様 (正 武)

戸田 山城守様 (忠 昌)

土屋 相摸守様 (政 直)

御姉

女子

初滿姫 後滿君 近衛内大臣家久公後簾中

元禄十二年己卯八月二十四日誕生於武州高輪第一、母

勢州桑名城主松平越中守定重女也、滿姫生妾腹、以故嫡母之
為子、實母家臣名越右膳恒

渡妹也、延享元年甲子七月三日病而卒于齋府、
法號月桂院殿心一獻珠大師、葬禮淨光明寺殿二柳於同寺一

爲端午之御祝儀、御帷子單物獻上仕之處、被成 御内書、

謹頂戴難有仕合奉存外、右之趣可然様御披露所仰御座外、
恐々、

朱力平
元禄十二年 八月廿三日

戸田山城守殿

正文在文庫

去十六日之尊書拜見仕外、今月十三日御領内京泊と申浦
江唐船壹艘、同十四日脇元と申浦江唐船壹艘致漂着外付、
番船被附置候間、兩艘共警固之衆被差添、日和次第當表
江可被送遣之旨、得其意奉存外、委細從御家來衆被申越
外之趣表承届外、弥諸事如前、被仰付、早々當津江可被
差遣外、恐惶謹言、

朱力平
元禄十二年 八月廿四日
丹羽遠江守 長守判

近藤備中守 用高判

松平薩摩守様

参貴報

全上

口上覺

(カシボシ) 東埔塞出之唐船一艘、人數五十六人乘、去十三日領内京泊と申浦に漂着仕り、彼浦老撃場惡敷り故、羽嶋(羽嶋)と申所以以挽船差越申り、且又暹羅出之唐船一艘、人數百十三人乘、同十四日脇元と申所之沖卸碇り付る、以小船挽入申り、兩艘共番船付置り間、日和次第警固之者相副差送可申旨、長崎奉行衆に申越り、此段申上り、以上、

八月廿五日

534

全御譜中

一筆令啓達り、阿佐布領之内芝拙者家來名付る、御年

貢屋鋪之儀付る、從家來申出趣御座り處、御懇意被仰聞、其上屋敷町堺之儀御差圖之段、致承知忝存り、右屋敷之儀付る、此節相願り趣奉御座り間、宜様御差圖可被下り、旁爲可申入如此御座り、恐惶、

朱力年
元禄十二年

八月廿五日

(屬敷改) (勝那)
細井左次右衛門様

人々

536

全上

一筆令啓達り、阿佐布領之内芝拙者家來名付る、御年

貢屋敷之儀付る、從家來申出趣御座り處、御懇意被仰聞、其上屋敷町堺之儀、御差圖之段致承知忝存り、右屋鋪之儀付る、此節相願り趣奉御座り間、宜様御差圖可被下り、旁爲可申入如此御座り、恐惶、

朱力年
元禄十二年

八月廿五日

(屬敷改) (貞吉丸)
杉浦彌市郎様

人々

口上覺

海南出唐船一艘、人數三十九人乘、去十二日領内種子嶋(種子嶋)之内、野間と申所之沖に致漂流卸碇り付る、小船壹艘差出、様子承り處、水望之由申り付る爲取之り、早速湊に挽入可申と仕り得共、風波荒難成り處、翌十三日揚碇漂流仕、十五日又最前之所に卸碇り故、同嶋之内浦田と申所に挽入、番船付置去廿三日隅州之地方内之浦と申所に送來り、番船付置り間、日和次第警固之者相副差送可申旨、長崎奉行衆に申越り、此段申上り、以上、

朱力年

元禄十二年

八月廿七日

全上

一筆令啓達_レ、海南出唐船一艘、去十二日領内種子嶋之内、野間と申所之沖に致漂流_レ付_ル、同嶋之内浦田と申所以挽入置、隅州之地方内之浦と申所に送來_レ、日和次第警固之者相副、其元_レに差越可申_レ、委曲從家來共申上_レ條不能詳_レ、此旨爲可申入、以飛札如斯御座_レ、恐惶、

朱力平

元禄十二年

八月廿七日

近藤備中守様

丹波遠江守様

人々

全御譜中

正文在文庫

一筆致啓達_レ、

中將様弥御機嫌能可被成御座、玆重奉存_レ、然者兼_レ御聽置申_レ私屋敷替之儀、先頃小笠原彦大夫殿を以、小笠原佐渡守殿に得御内意_レ之處、以御差圖右願之書付御用番稻葉丹後守殿に差出申_レ處、御請取置被成_レ由、委細江戸留守居之者方申越_レ之_レ、此上者願之通首尾好可被仰出奉存_レ、右之段爲可申上、御自分迄如斯御座_レ、此

旨以御序宜預御披達_レ、頼入存_レ、恐々謹言、

八月廿八日

嶋津淡路守

惟久判

嶋津大藏殿

綱貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見_レ、

公方様御機嫌之御様躰、以使者被相同之_レ、益御勇健御儀_レ間、可御心安_レ、隨_レ御看一種被獻之_レ、各申談首尾能遂披露_レ、恐々謹言、

朱力平

元禄十二年

九月二日

戸田山城守

忠昌判

松平薩摩守殿

綱貴公御譜中

御札令拜見_レ、貴様弥御堅固之旨、玆重存_レ、然者愛壽丸事嶋津圖書養子、德慈丸事彌寝丹波跡目養子申付_レ付_レ、御悅預示被入御念之段之段忝存_レ、恐惶、

猶以爲八朔之御祝儀、目錄之通致進覽之_レ、御禮豊

松殿・熊次郎殿・御息女に表同前進_レ付_ル、預御札

御慇懃之至存外、以上、

朱カキ
元禄十二年
九月二日

鳥居播磨守様
御報

541
綱貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様御機嫌之御様躰被相伺之外、益御勇健之御事外
間、可御心安外、隨而御看一種被獻之外、紙面之趣得其
意外、恐々謹言、

朱カキ
元禄十二年
九月三日

松平右京大夫
輝貞判
柳澤出羽守
保明判

松平薩摩守殿

542
全上

全上

一筆啓上仕外、吳國船近日歸帆申付外、於浦々飛乘之者
無之、又者船中之者不殘置様御領内堅可被仰付外、若遭

難風陸近乘來外者、如例番船等被附置、日和次第出船可

被仰付外、爲其如是御座外、恐惶、

朱カキ
元禄十二年
九月三日

丹波遠江守
長守判
近藤備中守
用高判

松平薩摩守様

人々御中

543

全上
全上

去月廿二日之尊札拜見仕外、此間被仰下外御領内脇元は
漂着之唐船一艘、警固之衆被差添被送遣、無吳儀今日當
津着岸無相違請取申外、委曲御家來衆方被申聞外趣承
知仕外、恐惶謹言、

朱カキ
元禄十二年
九月三日

丹羽遠江守
長守判
近藤備中守
用高判

松平薩摩守様

參貴報

544
全上

全上

去月廿七日之尊書拜見仕外、海南出唐船壹艘、先月十二日御領内種子嶋(熊毛郡)之内、野間と申所之沖に致漂流外付、同嶋之内、浦田と申所に挽入置、隅州之地方内之浦(肝属郡)と申所に送來候、日和次第警固之衆被差添、當地に可被差遣之旨承知仕外、愈々如例被仰付、早々當津に可被送遣外、恐惶謹言、

朱力半
元禄十二年 九月四日

丹羽遠江守
長守判

近藤備中守
用高判

松平薩摩守様

参貴報

545

全上

全上

貴札致拜見外、弥御堅固珍重存外、將亦爲窺御機嫌、被差越使者外付、御看一種被懸御意、忝次第御座外、恐惶謹言、

朱力半
元禄十二年 九月四日

柳澤出羽守
保明判

松平薩摩守様

御報

546

綱貴公御譜中

御札令拜見外、弥御堅固之由、珍重存外、然者領内に唐船参外段被聞召付、预示趣得其意存外、先比海南出唐船一艘、隅州内之浦(肝属郡)と申所に参外付、長崎に差送申外、其外ニ表段、漂着之唐船長崎に送越申外、何そ爲相替儀及無御座外間、不能詳外、被入御念御見廻之段忝存外、恐惶、

朱力半
元禄十二年 九月六日

伊東出雲守様
御報

547

全上

御札致拜見外、弥御無吳之由珍重存外、其元留守中無別條旨、被仰知大慶存外、將又當年拙者五十賀付外、御詠之偽并仙臺紙布一端・壽老人之繪一幅饋給、御念入外御紙面之趣忝存外、當秋之比者可有御上京之由、明春伏見に参着之節、御見廻外ハ、可得御意外、恐惶、
猶以御氣色大形御本復之由珍重存外、早々御報可申達之處、無據儀共御座外及延引外、以上、

朱力半
元禄十二年 九月六日

弘福寺
御報

548 網貴公御譜中

正文在文庫

爲重陽之祝儀、小袖五到來歡覺候、委曲小笠原佐渡守可
述外也、

朱カキ
元禄十二年 九月七日



薩摩

中將殿

549 網貴公御譜中

御札令拜見外、吳國船近日歸帆被仰付外間、於浦、飛乘
之者無之、又者船中之者不殘置様領内堅可申付外、若遭
難風陸近乘來外者、如例番船等付置、日和次第出船可申
付旨、委曲得其意存外、恐惶、

猶以家來之者被召寄被仰聞趣委細致承知外、以上、

朱カキ
元禄十二年 九月九日

近藤備中守様

丹波遠江守様
御報

550 網貴公御譜中

口上覺

先達而申上置外領内(舟内)京泊浦に漂着之東坤寨出人敷五十六
人乘唐船一艘、脇元(阿久根)に漂着之暹羅出人敷百十三人乘唐船
一艘、警固之者相添、長崎に送届外處ニ、兩艘共去三日
無相違御請取外間、此段申上外、以上、

元禄十二年 九月十日

551 全上 此御書吉貴公御譜中ニ在リ

一筆令啓外、弥無吳之由、一門中無別條外段珍重存外、
於此地表相替儀無之、我等無事外間、可易芳意外、先比
阿多太仲使ニ其元ニ差越外付而、返札之趣口上之旨を以
令承知外、爰元ニ珍敷學鱉一桶被相饋、則賞味申外、心
入之程大慶存外、謝禮勞爲可相達如此外、恐々、

猶以爲重陽之祝儀、目錄之通被相饋令受用外段者、

嶋津中務(久根)江申聞外、以上、

朱カキ
元禄十二年 九月十日

松平修理大夫殿
御宿所

562 吉貴公御譜中

先是元禄十年之季夏

將軍家建_ニ立武州東叡山本堂_一、依_レ之受_ニ綱貴助役之命_一、及_ニ元禄十一年之秋_一、而其功漸成也、是故同年九月五日、賜_ヲ告_テ于綱貴_一、同月晦日發_ニ東都_一歸_レ國、至_ニ今歲元禄十二年_一、蒙_ニ述職之恩免_一、在_ニ麿府_一行_ニ國政_一、以故吉貴留_ニ江府_一以奉_ニ事幕府_一也、

563 吉貴公御譜中

爲今年之嘉儀、被差渡使簡、殊被任恒例目錄之通贈給之、入念_ハ段令欣悦_ハ、猶期後音之時_ハ、恐惶不宣、

元禄十二年
九月十日

侍從吉貴
(島津吉貴)
(花押 No.1)

謹上 琉球國司

564 全上

芳簡令披見_ハ、先頃東叡山本堂就御造畢、
中將殿_ハ御

手傳被 仰付_ハ處、首尾好相調、依_レ之於 御前、御腰物拜領之段相聞、爲歡目錄之表贈給之、入念_ハ儀欣然之至_ハ、恐惶不宣、

朱力_キ
元禄十二年
九月十日 侍從吉貴御判

謹上 琉球國司

565 全上

來墨令披見_ハ、先比東叡山本堂就御造營、中將殿_ハ御手傳被 仰付_ハ處、首尾好相調、依_レ之於 御前御腰物拜領之段相聞、爲歡目錄之通被相饒之、入念_ハ儀欣然之事_ハ、恐、不宣、

朱力_キ
元禄十二年
九月十日 侍從吉貴御判

回復 中城王子

566 全上

爲當年之佳事、芳札殊目錄之通被相贈之、入念_ハ趣令怡悦_ハ、猶期後音時_ハ、恐、不宣、

朱力_キ
元禄十二年
九月十日 侍從吉貴御判

回復 中城王子

綱貴公御譜中

貴札致拜見(家愚)、近衛右大臣殿(家愚)に兼る奉願置り額之内、稻

荷社額今度被染御筆り付り、被遣り、諏訪社額々大概

相調申り得共、餘御延引り之間、此節右額被遣り由、別

る忝次第奉存り、度、被仰上り得共、無御如在子細有之、

被遊遲り由、御尤奉存り、先一社相調り段大悦仕り、

右之趣可然様被仰上可被下り、恐惶、

猶以右額之儀付り、關白殿(近衛基熙)に及御禮申上可然り者宜

様頼存り、以上、

朱力キ
元禄十二年 九月十日

平松中納言様

貴報

全上

御札致拜見り、近衛右大臣殿に兼る奉願置り額之内、稻

荷社額今度被染御筆り付り、被遣り、諏訪社額之儀者、

追付御調可被下之由、何角無據御用等就有之、被遊御延

引之旨御尤之御儀奉存り、先此節一社御調被下り之段、

別る忝次第奉存り、右之趣可然様被仰上可被下り、恐惶、

猶以右額之儀付り者、關白殿に及御禮申上可然被思

綱貴公御譜中

正文在文庫

召り者、宜様頼存り段、中納言殿に申達り間、被仰

談可被下り、以上、

朱力キ
元禄十二年 九月十日

平松宰相様

御報

全上

一筆令啓り、先比以兩使被申越り趣有之、就夫此方從家

老中相達り儀付り、其方從家來共返答之書付落字有之、

斷之段、令承知候、此方之儀者、右躰之落字有之り而表、

斷之趣者承分儀り、公儀之儀者不及申、他所に之書付、

書狀等無調法之儀り者、笑止之儀存り間、自今以後隨

分被入念尤存り、家來共に及萬端念入り様可被申付り、

恐、

朱力キ
元禄十二年 九月十三日

鳴津左京殿

御宿所

從 (細也) 中將様被下御書、謹_レ致拜見_レ、然者先頃以兩使御

用之儀申上_レ御節、御家老中_レ家來共_レ被示下_レ御請書付之内落字有之、至拙者も迷惑仕、御斷共申上_レ御處、達

御聽、御賢慮之趣委細被仰下_レ、誠以被爲入御念_レ御儀忝次第奉存_レ、自今以後隨分入念、家來共_レ後其段可申付之旨、御紙上之趣畏奉存_レ、右之御請御禮旁爲可申上、

御自分迄如斯御座_レ、以御序宜預披達_レ、_レ入存_レ、恐々謹言、

朱力キ

元禄十二年 九月十八日

鳴津左京 惟久判

鳴津圖書殿

561

全御譜中 此御書吉貴公御譜中ニモ在リ

一筆令啓_レ、先月廿四日女子誕生、七夜之祝迄首尾能相濟_レ由、大慶之至_レ、爲祝儀二種_レ稱進之_レ、猶期後喜之時_レ、恐々、

猶々誕生之女子、おミつと名被相付之段、令承知_レ、

以上、

朱力キ 元禄十二年 九月廿一日

松平修理大夫殿 御宿所

按二

吉良公長女滿君、元禄十二年八月廿四日、武州高輪御_ニ誕生_トアリ、近衛内大臣家久御座申也

562

全御譜中

一筆致啓上候、先頃本庄因幡守殿卒去之旨承知仕、絶言

語奉存_レ、依之御機嫌之御様躰爲可奉伺之、捧飛札_レ、恐惶、

朱力キ 元禄十二年 九月廿二日

563

全上

一筆致啓上候、先頃本庄因幡守殿卒去之旨承知仕、絶言

語奉存候、依之三丸様御機嫌之御様躰爲可奉伺之、呈飛札_レ、恐惶、

朱力キ 元禄十二年 九月廿二日

秋元但馬守様 (御初) 人々

564

綱貴公御譜中 此御書吉貴公御譜中ニ無之

正文在文庫

一筆啓上仕候、重陽之爲御祝儀、御目錄之通被下置之、

幾久拜受仕忝次第奉存外、右之御禮爲可申上、捧愚札候、猶奉期後喜之時候、誠惶誠恐敬白、

朱力キ
元禄十二年 九月廿五日
松平修理大夫
吉貴御判

進上 中將様

565 全御譜中

爲今年之賀儀、芳札殊如恒例目錄之通被相饋之、令欣悦外、猶期後喜時外、恐々不宣、

朱力キ
元禄十二年 九月廿六日
中將綱貴御判

回復 中城王子

566 綱貴公御譜中

正文在文庫

貴翰致拜見候、爲可被相同御機嫌、被差越使者外付、御肴一種被懸御意忝次第候、愈御堅固珍重御事外、恐惶謹言、

九月廿七日

松平薩摩守様

貴報

土屋相摸守

政直判

567 全上

全上

尊書致拜見外、今度私儀御役被^(唐字書)仰付、難有仕合奉存外、依之爲御祝儀、御太刀・馬代黄金十兩并御目錄之通被懸御意、忝奉存外、恐惶謹言、

朱力キ
元禄十二年 九月廿九日
稻垣對馬守
重富判

松平薩摩守様

貴報

568 綱貴公御譜中

正文在文庫

如御札我等繼目御禮相濟、大慶之事外、依之御太刀・馬代并目錄之通贈給、入御念外段、欣然之至存候、恐々謹言、

朱力キ
元禄十二年 閏九月朔日
尾張中將
吉通判

薩摩中將殿

御報

569

全上

全上

(幸七)
有栖川宮薨去ニ付、爲御悔御紙面之趣、被入御念外儀思

召外、此等之旨宜相心得可申進之由被仰外、恐惶謹言、

朱力キ
元禄十二年 後九月二日
大西宮内卿 深龍判

松平薩摩守様

570 全上

全上

先月二日之尊札拜見仕外、弥御勇健被成御在國之旨、珍

重奉存外、將亦八朔之爲御祝儀、芝御屋鋪迄以使者申上

外儀被仰下、御紙面之趣御懇懃之至奉存外、恐惶謹言、

朱力キ
元禄十二年 閏九月三日
烏居播磨守 忠救判

薩摩守様

貴報

571 全上

全上

尊札忝拜見仕外、然者芝御抱屋敷之儀ニ付、御留守居中

方被申聞外ニ付、町境之義御差圖申外段、御聞被成之旨、

依之被入御念被仰下之趣、奉得其意外、相應之御用等無

御心置被仰下外様奉存外、且又烏居播磨守方江私義續御

座外故、前々方及御出入可仕處ニ不得折外故、御見廻表

不申上外處、此度御用等被仰聞、本望之至奉存外、猶奉

期後音之時候、恐惶謹言、

朱力キ
元禄十二年 閏九月三日
細井佐次右衛門 勝郷判

松 薩摩守様

参尊報

572 綱貫公御譜中

正文在文庫

尊書致拜見外、弥御堅固御在國之段珍重之御事外、如仰

私儀、先頃拜領之屋江令移徙大悦仕外、依之爲御祝詞

被示下忝奉存外、恐惶謹言、

朱力キ
元禄十二年 閏九月四日
稻垣對馬守 重富判

松平薩摩守様

貴報

573 全御譜中

一筆致啓上外、然者今度所々風雨損亡付而、江戸米其外

穀類等可爲不足外間、兼而從諸國江戸江相廻外米穀、米

者不及申、其所之用米之外可成分者江戸に相廻り様可申

付、且又從當年來秋迄、諸國之酒造高之内五分一造之、

其餘者停止可申付、已之年造高之儀者來夏中相窺可申

旨、被仰渡り趣承知仕、畏奉得其意、恐惶、

朱力キ
元禄十二年
閏九月六日

戸田山城守様

人々

574

全御譜中

正文在文庫

八月十六日之尊書拜見仕、先達而被仰下り御領内屋久(熊毛)

嶋一湊江漂着仕、唐船、八月十三日其表山川湊迄致着船(揖宿郡)

外付、警固之衆御差添被送遣、今日當津致着岸、無相滯

請取申、委細御家來衆被申聞り趣承承届、恐惶謹

言、

朱力キ
元禄十二年
閏九月七日

丹羽遠江守

長守判

近藤備中守

用高判

松平薩摩守様

参貴報

575

全御譜中

一筆令啓達、來朝舟山出之唐船一艘、去五日領内上甕(中園)

嶋之内繩瀬と申所之沖江卸碇付、中甕嶋湊江挽入置

、日和次第警固之者相副、如其元差送可申、此旨爲

可申入用飛札、委曲從家來共申上り條、不克審、恐

惶、

朱力キ
元禄十二年
閏九月八日

近藤備中守様

丹羽遠江守様

人々

576

全御譜中

一筆令啓達、來朝南京出唐船一艘、去五日領内屋久嶋

之内安坊と申所に漂着付、當國之地方山川迄送來、(揖宿郡)

間、如其元差越可申、此段爲可申入、用飛札、委曲

從家來共申上り條、不能審、恐惶、

朱力キ
元禄十二年
閏九月十日

近藤備中守様

丹羽遠江守様

人々

一筆令啓達_レ、先達_レ申入_レ領内屋久嶋之内安坊_レ漂着之唐船一艘、警固之者相副、如其許差送申_レ、委細者從家來共申上_レ間、不能審_レ、恐惶、

朱力年
元禄十二年 閏九月十一日

近藤備中守様

丹羽遠江守様

人々

一筆令啓達_レ、何國之船共不相知吳國之小船一艘、領内屋久嶋之内志戸子と申所_レ八月十二日流寄、乘來者・荷物・船具等無之、水船罷成_レ、海邊山中迄相改_レ得共、不審之儀無之_レ、依之右之船警固之者相副、如其元差越申_レ、委曲從家來共申上_レ條、不克詳_レ、恐惶、

朱力年
元禄十二年 閏九月十一日

近藤備中守様

丹羽遠江守様

人々

口上覺

何國之船共不相知吳國之小船一艘、領内屋久嶋之内志戸子と申所_レ八月十二日流寄、乘來者・荷物等及無之、水船罷成、久々漂流之様子に相見得申_レ、海邊山中迄相改_レ處、不審成儀無御座_レ、乍此上嶋中浦々可入念由申付_レ、右之小船者所之船乘之、當國之地方山川迄差越_レ間、從當地警固之者相副、長崎_レ差送申_レ、右之趣奉行衆に申越_レ、此段申上_レ、以上、

朱力年
元禄十二年 閏九月十一日

口上覺

來朝南京出唐船一艘、人數四十人乘、去五日領内屋久嶋之内安坊と申所_レ漂着仕、卸碇_レ付_レ、番船付置、在番之者警固_ニ、當國之地方山川迄送來_レ間、從當地警固之者相副、差送可申旨、長崎奉行衆に申越_レ、此段申上_レ、以上、

朱力年
元禄十二年 閏九月十一日

全上

一筆致啓上^(老中)、先頃戸田山城守殿卒去之旨絶言語り、依之御機嫌之御様躰爲可奉伺之、捧飛札^(朱力キ)、恐惶、

元禄十二年 閏九月十二日

全上

正文在文庫

去八日之御飛札拜見仕^(朱力キ)、來朝之舟山出唐船一艘、今月五日御領内上甕嶋之内繩瀬と申所之沖^(朱力キ)に碇を卸^(朱力キ)付^(朱力キ)、

中甕嶋湊に挽入被置^(朱力キ)間、日和次第警固之衆御指添、可被差遣之旨、奉得其意^(朱力キ)、委曲御家來衆方被申聞^(朱力キ)趣表承届^(朱力キ)、弥如前、警固御添被成、以挽舟早、當津^(朱力キ)に可被送遣^(朱力キ)、恐惶謹言、

元禄十二年 閏九月十二日

丹羽遠江守

長守判

近藤備中守

用高判

松平薩摩守様

参貴報

正文在文庫

一筆致啓達候、

中將様愈御機嫌好可被成御座と、目出度奉存^(朱力キ)、然者先月十五日嶋津主税^(久松) 殿中^(朱力キ)に被爲 召、御老中御列座^(朱力キ)、

私櫻田屋^(朱力キ)に就御用地、被 召上之、爲返地於新堀邊二千坪被成下之旨、土屋相摸守殿被 仰出之候由申來^(朱力キ)、寔

以難有仕合御座^(朱力キ)、右之趣爲可申上、御自分迄如斯御座^(朱力キ)、御序之節宜預御披達^(朱力キ)、積入存^(朱力キ)、恐、謹言、

元禄十二年 閏九月十三日

嶋津左京

惟久判

嶋津圖書殿

全上

全上

去月廿二日之尊書拜見仕^(朱力キ)、先達^(朱力キ)被仰下^(朱力キ)御領内種子嶋之内野間^(朱力キ)に漂着之唐船寄艘、警固之衆御差添被遣之、

今日當津着岸無相違請取申^(朱力キ)、委曲御家來衆方被申聞^(朱力キ)趣表承知仕^(朱力キ)、恐惶謹言、

元禄十二年 閏九月十四日

丹羽遠江守

長守判

近藤備中守

用高判

松平薩摩守様
参貴報

全上

去十日之御飛札拜見仕り、來朝之南京出唐船壹艘、今月五日御領内屋久嶋之内安坊と申所に致漂着り付、其表地方山川迄送來り間、可被差遣之旨、奉得其意り、委曲御家來衆方被申聞り趣承承届り、愈諸事如例被仰付、早、當津江可被送遣り、恐惶謹言、

朱力キ
元禄十二年
閏九月十四日

(長崎奉行)
丹羽遠江守
長守判
(同)
近藤備中守
用高判

松平薩摩守様
参貴報

綱貴公御諧中
正文在文庫

一筆致啓達候、

中將様益御機嫌好可被成御座と、目出度奉存候、然者先達り申上置り私櫻田屋鋪返地、先月十九日於麻布新堀端

相渡候由申來候、右之趣旁爲可申上、御自分迄如此御座り、御序之節宜預御披達り、頼入存候、恐、謹言、

朱力キ
元禄十二年
閏九月十五日
鳴津圖書殿

鳴津左京
惟久判

全御諧中

鳴津圖書所江之芳翰令披見り、先月十五日鳴津主税殿中江被爲召、御老中列座ニ爲、其方櫻田屋敷御用地被召上、於新堀邊返地二千坪被下旨、土屋相撰守殿被仰渡之由申來、雖有被存り由尤之事り、依之示給趣被入念儀存り、恐、

朱力キ
元禄十二年
閏九月十六日

鳴津左京殿
回報

全御諧中
正文在文庫

先月七日之尊翰從在所相達、忝拜見仕候、然者八月十三日、領内洪水之儀被爲聞召附蒙仰り、御紙上之趣誠以忝次第奉存り、私儀眼病不快罷有、其上氣分相勝不申り付、

於于今在府保養仕り、恐惶謹言、

591

網貴公御譜中

朱力年

元禄十二年 閏九月十七日

大村因幡守
眼病^レ暫以印判申上候^御
純長〇

松 薩摩守様

尊報人、御中

正文在文庫

尚、段、御細書御事多有御座ニ辱奉存外、去ル三

日ニ高輪へ御見廻申上、修理太夫殿へ掛御目、色、

御馳走緩々、と得貴慮忝奉存外、殊ニ御息災ニ相見へ、

目出度珍重之御事ニ奉存外、以上、

追申上外、正右衛門儀、七月へ御當地ニ罷有外故、

不被仰付之由迄被爲入御念外、被仰下忝奉存外、

以上、

先立申上置外領内屋久嶋之内一湊江、漂着仕り遅羅出
來朝唐船壹艘、警固之者相副、長崎へ送越申外處、去七
日彼地奉行衆無違儀御請取外間、此段申上候、以上、

朱力年

元禄十二年 閏九月十八日

全御譜中

正文在文庫

如御札先頃我等被任中將、大慶之事り、仍御太刀・馬代
并目錄之通贈給之、入御念外段欣然之至存外、恐、謹言、

朱力年

元禄十二年 閏九月廿三日

尾張中將

吉通判

薩摩中將殿

御報

初之九月廿二日之御自筆之尊札、今日相届忝致拜見外、
弥御堅泰ニ被成御座、恐悦ニ奉存外、次第ニ寒天ニ罷成、
然者又左衛門娘儀、先比申上外處ニ被聞召外、奉得其意
外、仍亦小笠原彦太夫方も申上外趣、御承知被遊之由忝
奉存外、随亦關政右衛門儀、御紙面之趣忝奉存外、當暮
ニ並次第、可被仰付外旨、過分至極存外、おそき分少も
不苦外、なニ次第ニ奉存外、被入御念御紙上不淺次
第二外、鳴津中務殿へ申遣外書狀之趣、御聞被遊之旨、
重、忝存外、將又中西長門右衛門・又左衛門參上申外節、
長門右衛門へ我等方以手紙申入外趣、御聞被遊之由、過
分至極奉存外、春ハ次第ニ近寄申外、三月中ニハ可得尊

意外、大慶不過之外、恐惶謹言、

朱力平

元祿十二年
後九月廿三日

薩州様

尊報

向井(正興)
空參
判